

東京に帰れるのなら、なんだってやってやる。
例えそれが、生き血を糧とする兵器を操ることだとしても――

二〇四五年 七月二十日 午前零時十分

鹿児島市・市道紫原中央線
むらさきはる

口いっぱい頬張った携帯食料を、ミネラルウォーターで押し流して。島津鋼太郎は固いコックピットシートに身を預けていた。

片耳に挿したイヤホンからは掠れたノイズ音に混ざって、上層部の声が聞こえて来る。

『防壁を超えて県内に紛れ込んだ、はぐれ吸血鬼は霧島市と給良市の上空を通過。間もなく鹿児島市内へと墜落するだろう。』

落下の予測地点は東紫原陸橋周辺と予想される。当地区の担当に充たる行動予備隊は対象吸血鬼を殲滅。速やかに事態を収束せよ』

「……了解」

二対の操縦桿を握りしめ、キックペダルを強く踏み込む。

「電圧よし。油圧よし。エンジン回転正常。関節機構ロック解除。O S プログラム起動。――アクテイベート・スタンバイ」

鋼太郎の声紋を認証し、その鉄塊は上体を起こした。

対〈吸血鬼症〉の罹患者を想定された六メートル級ヒト型装甲兵器〈F G〉

――感染を防ぐための防護服から発展し、全身を黒い装甲に包まれた兵器のシルエットは、鎧兜を纏う武者の姿を想起させた。

鋼太郎が機体の全身を起こした背後で、同じように二機の〈F G〉が続々と立ち上がる。そして真正面には、大きなブレードアンテナを備えた隊長機の姿があった。

『総員。聞いての通りだ』

通信能力を強化された隊長機の声は一際、よく通る。

『既に近隣住民の避難は完了している。どうせ、迷い込んだのは下級なんだ。囲んで一斉に鉛玉を浴びせてやれば怖くねえ』

「待ってください、隊長。〈FG〉に装填される特殊弾頭は希少なはず。相手が下級なら無暗に消耗することも控えた方が、」

『チツ……うるせえんだよ、クソガキ』

鋼太郎の声は横柄な態度と舌打ちによって遮られた。

『なら、俺たちにもあの狂った戦い方を強要するのか？ 死にたがりの teme と一緒にするんじゃない』

「ですが、」

『だいたい、隊長は俺なんだ。お前らは素直に俺の指示だけを聞いてればいいんだよ！』
その指示を聞いたせいで一人の隊員が重症を負ったんだろ。とは敢えて言い返さなかった。

どれだけ正論で意見をしても無駄だと分かっていたから、それに欠けた隊員の補填として、この隊に派遣された自分には大した発言力もない。

ならば、いつそ——鋼太郎は意識の先をがなり立てるイヤホンの雑音から、モニター画面へと向けなおした。翡翠色をしたカメラアイの双眸で、上空から落ちてきた影をじつと見つめる。

「ターゲットを捕捉。これより単機でターゲットを殲滅します」

『なっ……単機でだど!?』

操縦桿を強く押し込めば、機体は大きく身を屈めてみせた。脚部の底がアスファルトをガツと噛んで、スタートダッシュの姿勢を取る。

「——島津鋼太郎。FG-05〈フミツキ〉出る」



メインモニター脇にミニマップが表示された。エンジンの振動にシートを揺らされる片手間で鋼太郎はそれを確認する。

紫原は一丁目から七丁目までの住宅街であり、そこに住まう人口数は鹿児島市でも最大であった。

幸いにも住民の避難は完了しているが、〈FG〉が疾走する道路を挟んだ家屋には明かりが一つもない。機体胸部に備え付けられたライトと、街灯だけに照らし出される街並みは得も知れぬ不気味さを醸し出していた。

そんな不気味さを振り払うよう、備え付けられた推進器スラスターの出力を上げる。

紫原は市内最大の住宅街であることに加え、もう一つの特徴がある。土地の高低差が大きいことだ。丘陵地帯を切り開くように都市開発の進められた紫原には、急こう配の坂が

幾つも見られ、標高の差も顕著なものとなる。

「会敵まで約四五秒」

鋼太郎はターゲットに対し、標高の高いポジションを取ろうとしていた。一対一で会敵した場合、必然的に有利となるのは上を取った方だからだ。

「見つけた」

間もなくして、下り坂にうずくまったターゲットを発見する。——ビルの三階にも並ぶであろう全長は〈FG〉よりも一回り大きい。赤黒い体毛に覆われ、前肢には飛行に用いる薄い皮膜が折りたたまれていた。その姿はまさしく巨大な蝙蝠こうもりのバケモノと称するのが相応しい。

鋼太郎は、衣服らしき布の切れ端がターゲットの肉体に紛れ込んでいることに気付いた。「……………相変わらず、胸糞が悪いな」

あれは人間の成れ果て。二十年前に突如として蔓延し、人を血肉を喰らう怪物へと変貌させる〈吸血鬼症ヴァンパイア・シンドローム〉に侵された罹患者の姿だ。

良好なポジションは確保した鋼太郎は、〈FG〉の左腰部へと懸架されたブレードをゆるりと引いて八相に構える。鞘から露わとなる蒼白の刃は日本刀を模していた。

「抜刀」

罹患した吸血鬼には、人間だった頃の記憶も自我もない。そこにいるのは、ただの人食いの化け物だと。接触感染によって生物災害バイオハザードを振りまくだけの害獣だと。鋼太郎は自身に言い聞かせた。

「———今、楽にしてやる」

八トンはあろう鉄塊が、刃を振りかざして強襲する。

「チツ……浅いか」

切っ先は吸血鬼の薄皮一枚を軽くなぞるだけに留まった。大きく後ろに飛び退いて、避わされたのだ。

坂道を飛んだ両脚部には相応の負荷がかかる。着地したアスファルトには亀裂が走り、フレーム全体が軋むような悲鳴を上げた。

それでも一度睨んだ標的から、視線を外さない。

「ハッ……来てみやがれ」

今度は鋭利な爪を晒し吸血鬼が迫った。右の大振り。次いで左の横薙ぎ。それを冷静に見定め、ブレードの刀身で弾き返す。

吸血鬼には右脇腹辺りに大きな被弾の跡がある。県境に建設された防壁をこえようとし

た際に迎撃砲で撃たれたのだろう。吸血鬼の再生能力を持ってしても補い切れない重傷だ。そんな傷を負って尚、目の前の狂った怪物は攻撃の手を緩めない。

黄金色の眼球は異様なほどにキラ付いて。向けられた爪の先からは、執拗な殺意が伝わってきた。

それが唐突に攻撃を止める。ほとんどゼロに近い間合いで。振り上げた両腕をピタリと「フェイントか!？」

そう気づいた時には遅かった。牙を剥いて機体へと喰い付く。

例え記憶や人格を失おうとも、人間としての狡猾さだけは忘れていない。瞳を細め、口の端を吊り上げた表情はこちらを嘲り嗤っているようにも見えた。

「ぐ……ッ！ 離れろッ！」

モーターの馬力と勢いに任せて、鋼太郎は吸血鬼を振り払う。しかし食らいつかれた左腕には二つの穴が開いていた。

コックピット内に警告のアラートが響く。牙は装甲を貫通し、さらにその先端は機体を支えているフレームにまで達していた。

内包されたケーブル類も張り裂けて、その内側を伝う「液体」が損傷部から溢れた。「ッ……」

ドロリと赤黒く。錆臭い臭気を放ったそれはオイルや電解液の類ではない。装甲を伝って地面に滴る液体は、人体を巡る血液によく似ていた。

それを見た吸血鬼の目の色も変わる。鼻息が荒く、明らかに興奮状態にある。

スラスターを逆噴射して距離を取ってやれば、吸血鬼は〈FG〉の作った血だまりへと飛び込んだ。短い舌を突き出して、必死にそれを吸ろうとする様は醜悪と言うほかない。

「——俺たちにもあの狂った戦い方を強要するののか？」

ふと、鋼太郎の頭をよぎったのは、そんなつまらない言葉だった。

「……別に誰かに強要するつもりなんてねえよ」

手首の関節部をロールさせ、手にしたブレードを逆手へと持ち替える。それを中破した腕部へと当てがって、自らの意志のままに切り落とした。

「俺は俺のためならなんだってしてやるッ！ 俺の居場所東京に帰るためならなッ！」

そこには一才の躊躇いが無い。機体を破壊し、血を流すことが手慣れているようでもあった。

「……さあ、来いよ」

断面から噴き出した鮮血に、吸血鬼の意識は釘付けとなる。

「お前らは血が欲しくて、欲しくて、堪らないんだろッ！」

まるで獰猛な“狂犬”が唸るように。鋼太郎も鋭い犬歯を覗かせて、吠えてみせる。

メインモニターいっぱいには吸血鬼の姿が映し出された。興奮を抑えきれず、そのまま血を流す機体へ飛びかかってきたのだろう。

その動きはあまりに直線的だった。ついさっきまでの、攻撃にフェイントを織り交ぜるような狡猾さを兼ね備えた動きとは違う。

吸血鬼が吸血鬼たる由縁。血を求める本能に呑まれた動きだ。

だからこそ。カウンターのタイミングも容易に合わせられる。

「そこッ！」

瞳に宿るのは獰猛な光だ。逆手になっていたブレードを順手に戻し、そのまま流れるような動きで迫り来る吸血鬼へと煌めく刀身を押し込んだ。



「——七月二十日。午前零時十七分。吸血鬼の沈黙を確認」

依然として、機体からは夥しい量の血液が流れ、滴る。

形だけの報告を済ませ、緊張を解こうとした鋼太郎の両腕を鋭い痛みが襲った。

「このッ！」

血管深くに突き刺されたチューブが血液を吸い上げ始める。左腕を失った機体は血を流し続け、出力も低下していく。それを補おうと、マシンがパイロットの血液を求めているのだ。

「まったく、どっちが吸血鬼なんだか分かんねえな……」

貧血症状を起こす前にチューブを引き抜いて、鋼太郎はモニター越しに見える街並みを憎らしげに睨んだ。

「ああ、分かっている……俺の居場所は鹿兒島じゃないんだ」



十年前。新宿に最上級吸血鬼(グラトニー)が飛来した。

まもなくして東京は陥落。日本政府は数年間、感染によって爆発的に勢力を増す吸血鬼によって、本土から生存圏を奪われ続けることとなる。

そして最後に残された日本の生存圏こそが、本土の最南端——鹿兒島だった。

鹿児島はすぐさま隣接する熊本と宮崎を遮るように高さ三〇メートルにも及ぶ防壁を建設。侵攻する〈吸血鬼症〉の感染者たちを隔絶シャットアウトすることで、その場しのぎの平和を守り抜いてみせた。

それでも生き残った人類は未だ、血肉を喰う怪物たちへの反撃のチャンスを見い出せずにいる。

01

生存権の奪還と吸血鬼の殲滅——それは生き残った人類の悲願であると同時に、旧自衛隊、西部方面隊を中心に編成された国連軍第四五独立鉄騎連隊〈サツマハヤト〉の掲げる信念でもあった。

七月二十日 午前一〇時三〇分

紫原ムラサキ 行動予備隊B 6 基地ベース

季節は夏真っ盛り。トタン屋根に断熱材もないガレージ内はとうに四〇度を超えて、地獄のような熱気に包まれていた。

うだるような暑さに、熱中症で倒れる隊員も後を絶たない。申し訳程度に設置された扇風機も大した活躍はしてくれなかった。

B 6の基地は、小学校の敷地を借り上げた小規模の基地。〈FG〉の整備用に建てられたガレージだって急ごしらえのプレハブ式で、県内に点在する他の行動予備隊基地も似たような劣悪環境に置かれているのだろう。

それでも、この蒸し風呂状態の中で隊服を着続けるといえるのは無理がある。カーキ色をした厚手の隊服を腰に巻きつけながら、鋼太郎こうたろうは額に浮かぶ大粒の汗を拭った。

「……暑い」

その眼前で膝を折って項垂れるような駐機姿勢を取っている〈FG〉は、昨晚鋼太郎が乗り込んだものだ。

片式番号FG零伍ゼロファイブ〈フミツキ〉。操作性と整備性の両方に長けた第五世代機に区分される本機は、珍しいマシンというわけでもない。

その証拠に同様のモデルが二機、隊長用にブレードアンテナが大型化されたカスタムモデルが一機。計四機の〈フミツキ〉が、このガレージにはずらりと並べられていた。

「メカニックの連中曰く、テメエが汚したんだから、テメエで掃除しろだとさ……」
鋼太郎の手元にはデッキブラシとバケツがあった。他の〈フミツキ〉が高圧洗浄機のスチーマーで磨き上げられている一方で、鋼一郎の〈フミツキ〉だけが昨晚の血に塗れたままになっている。

混ざり合い、黒く固まってしまった血液は自ら流したもののか。それとも切り捨てた吸血鬼のものか。破損した腕部もフレームから交換するために取り除かれ、片腕だけになったその姿には哀愁さえ覚える。

後にも先にも〈吸血鬼症〉ツランバイア・シンドロームが空気感染した例はない。殲滅した吸血鬼の体内や血

液にもウイルスは内包されているが、そのほとんどは紫外線に晒されることですぐに死滅してしまふからだ。それこそ逸話で語られる吸血鬼のように、首元に牙を突き立てられでもしない限り、まず感染はあり得ない。

だが、そうだとしても、メカニックが機体に付着した血液を清掃しない理由にはなり得ない。

いくら感染の恐れがなくなっても、〈FG〉は精密な機械部品の集合体だ。関節に血が付着すれば動きは鈍るし、内部にまで血液が浸透すれば電装系がエラーを起こす。本来であれば、この基地に在籍するメカニック達が早急に清掃とメンテナンスを済まさなければならぬ案件だ。

では何故、鋼太郎がデッキブラシを握らされることになっているのか？

有体に言ってしまうえば、ただの嫌がらせだ。

「はあ……」

昔から誰かと打ち解けるのが苦手だった。自分が面倒な性格をしているのも自覚しているが、そのせいで周囲から孤立してきた。

トラブルを起こして、所属する予備隊を移動させられたのだった。一度や二度じゃない。

死にたがりと称されるまでに、昨晩のような無謀な戦い方を続けていたのも、他者から嫌厭されてしまう要因の一つであろう。

相手が誰であろうとも、血塗れになりながら喰らいつく。拳句に付いたアダ名は「狂犬」だ。

「……こんな嫌がらせに構っていられるかよ」

生存権の奪還と吸血鬼の殲滅——それらは国連軍第四五独立鉄騎連隊〈サツマハヤト〉の掲げる信念であると同時に、そこに籍を置く鋼太郎の渴望でもある。

〈サツマハヤト〉では吸血鬼によって奪われた生存圏を奪還するため、〈FG〉を用いた遠征や調査任務が課せられる。県境を跨いだ交通インフラが死滅した今、それ以外に他県へと渡る手段はない。

東京に帰るためならば、手段を選んではいられない。だから鋼太郎は〈サツマハヤト〉へと志願し、異例の速さでパイロットの資格を得たのだ。

両手が動かなくなるまで訓練装置にしがみついて、ようやく機体を思うがままに操れるようにもなった。それなのに……

「俺は、こんな所で足を止めてる場合じゃねえんだッ！」

遠征や調査任務を科せられるのは、〈FG〉の操縦に長けたエリートからなる一番隊から十二番隊だけに限定される。

ごく稀に防壁を超えて県内へと紛れ込んだ吸血鬼を屠るだけの行動予備隊に所属する鋼太郎では、経験値も戦績もまるで足りていなかった。

もっと結果を出さなければ。もっと強くならねば。

そんな強迫観念にも似た思想が鋼太郎の頭をグルグルと駆け巡った。犬歯をキツく噛み合わせて唸る様は、まさしく“狂犬”のそれと云っていい。

「——ねえ？ この基地は何処に行っても暑いところしかないの？」

背後で扉の辺りから聞きなれない声がした。柔らかく、聞き心地の良い女性の声だ。

手を止めて振り返れば、そこには見慣れぬ少女が基地の見取り図を団扇がわりに、首筋の辺りをパタパタと仰いでいた。その風に煽られて、後ろでは一つに結んだ黒髪のポニーテールが小さく踊る。

歳は十七か十八だろうか、鋼太郎とそう離れているようにも見えない。〈サツマハヤト〉の隊服を着ているのだから、関係者であることは間違いないのだろうが……

「うん。こんなところにいたら私の方が焼け落ちて、灰になっちゃう」
すると彼女は唐突にも着ていた隊服を脱ぎ始めた。

「なっ!？」

露わになったのは、透き通るような白い肌と黒いスポーツブラ。そこには小さいながらも確かに女性らしい膨らみがあった。

思わず目を逸らす鋼太郎。だが、彼女はそんな態度を見逃してはくれなかった。

ニンマリとした笑みを浮かべたかと思えば、軽快なステップを踏んで距離を詰めて来る。

「なーに、見てるの？ ヘンタイくん？」

「そ……それはアンタがいきなり服を脱ぐからで！」

「だって、この夏場に隊服は暑すぎるんだもん」

鋼太郎は彼女の所属や階級を伺おうと、隊服の方に視線をやる。

しかし、それを盗み見るよりも早く、彼女は鋼太郎と同じように隊服の袖を腰巻きにし

てしまった。

「ところでさ、君が噂の“狂犬” 島津鋼太郎くん？」

「……どうして、それを？」と言い返そうとしたのを見透かされてしまったのだろう。

「目元の酷いクマと貧血症特有の青白い顔」

先んじて、彼女が答えた。

「実はさ。昨晚の零時ごろ、この辺りに迷い込んだ下級吸血鬼を一人で殲滅したってパイロットがいるって話を聞きちゃってたんだよね。あとはそうだなあ……君の犬っぽい雰囲気、気のせいかな？」

「犬っぽいって……」

確かに歯を見せるような表情をすれば鋭く尖った犬歯が目立ってしまうのだが、犬っぽいと言われたのは初めてのことだ。

寧ろ鋼太郎には、初対面でも馴れ馴れしく近づいてくる彼女の態度の方がよほど、人懐っこい小型犬のソレに思えてならなかった。

「えっ……アンタが誰かは知らないが、俺は見ての通り忙しい。用があるなら後に、」
「あー違う、違う！ 私はちょっと君の顔を見に來ただけ、だから大層な用事なんてないよ」

「俺の顔を見に來た……？」

「そっ。思ってた以上に不健康で不幸そうな顔だね」

鋼太郎の額にピキリと青筋が走った。随分とボロクソに言ってくれる。

「そうだ、コレ食べる？ 食べたなら、その顔も少しはマシになるかも♪」

そんな鋼太郎の苛立ちに気づいているのか、いないのか。彼女はズボンのポケットから小さな紙包を取り出した。中に包まれているのは小さなお菓子のようだ。

「鹿児島名物、薩摩蒸氣屋さつまじょうきやのかすたどん！ ふんわり食感の生地でたっぷりのカスタード

クリームを包んだ甘い銘菓子！ オススメだよ」

「いや、いらねえんだけど」

「……えっ？」

「だから、いらないうって」

「どうして！ かるかん饅頭やボンタン飴にも並ぶ鹿児島名物だよッ！」

自信满满的なプレゼンを玉砕された彼女は、オーバーなリアクションを上げる。

「今は物を口に入れる気分じゃないと言うか」

「もしかして甘いのは苦手？ それならサツマ揚げなんかもあるけど」

「そう言うわけじゃなくて。つか、なんでサツマ揚げも持ち歩いてるんだよッ！」

「だったらさ」

彼女は小首を傾げて、

「君は鹿児島が嫌いなのか？」

その質問は薄氷のような鋭さがあった。鋼太郎は表情を引き攣らせたまま、思わず答えを詰まらせてしまう。

「それは……」

「〈FG〉を操れるんだから、君も〈刃血〉を持った鹿児島人のはずだよな？」

本土最南端の地、鹿児島が日本最後の生存圏として残り続けているのには、様々な要因が絡み合っている。

東京が陥落してから、南下してくる吸血鬼の侵攻に猶予があったこと。

城壁の建造とそれに付随する迎撃砲のシステムが配備が間に合ったこと。

ロールアウトされた第一世代モデルの〈FG〉が対吸血鬼戦で確かな戦果を挙げたこと。

「鹿児島が今日まで〈吸血鬼症〉を阻み続けてくれた理由なんて細かく上げ始めたらキリもない。けど他とは明確に違う二つの要素があったの」

「〈聖塵〉と〈刃血〉だな」

県を中心に浮かび、頻繁に噴火を繰り返す活火山として知られるも桜島火山。その噴

火によって降り注ぐ灰のなかに含まれる鉱物の一つが〈聖塵〉だ。

「〈聖塵〉の発する特殊な磁場は吸血鬼たちの運動能力を著しく低下させる。それらの特殊金属を銃弾や刀身に加工することによって、鹿児島はいちはやく、吸血鬼への有効な攻撃手段を確立させたの」

そして降り注いだ灰は、その地に住まう人々にも変化を齎した。

「〈聖塵〉の磁場により影響は吸血鬼だけでなく、人体を流れる血液にも及ぼした。その結果として鹿児島人の身体には〈刃血〉が流れるようになった、だろ？」

〈刃血〉には膨大なエネルギーが内包されていた。それは数滴でさえ、〈FG〉のような大型兵器を稼働させるに程の。

「そっ！ だから、その機体が君の〈刃血〉で稼働している以上、君も私たちと同じ鹿児島人だと思っただけだ。違うのかな？」

「別に……それに皆が皆、アンタみたいに地元大好きってわけでもあるまいし」

「まあ、それもそうだけども。やっぱり県民としては、皆が鹿児島を好きであって欲しいじゃん」

「そういうものか？」

「そういうものだよ」

彼女は首を縦に振って頷いた。しばし黙り込んだ後で、鋼太郎は閉ざしていた口を開く。「お袋が北海道生まれで、親父が鹿児島生まれ。だから俺にも〈刃血〉が流れてるし、〈FG〉を操縦することもできる」

「あっ、なるほど。そういうパターンもアリなわけか」

「だから別に鹿児島が好きと嫌いか、そう言う特別な感情を抱いたこともない……。ただ、何て言えばいいんだろうな……」

鋼太郎は東京の街で育った。〈吸血鬼症〉の感染爆発バンデミックによって汚染された、その街でだ。

「——俺の居場所は鹿児島じゃないって。そんな気がするんだよ」

「ふーん」

彼女はその丸っこい瞳を細めた。わざとらしく軽く肩をすくめて、退屈そうな顔をする。

「期待してたよりつまらない答えが出てきちゃった」

「なんだと……？」

「まあ、いいや。今日は君の顔を見に來ただけなんだし。それじゃあね」

彼女はくるりと踵を返して、鋼太郎に背中を見せた。

厚底の軍靴をカツカツと鳴らして。そのままグレージを後にするのだろうと、そう思った途端にニヤリとほくそ笑んだ彼女が振り返った。

「おりゃー！」

「なっ……ふごっ!？」

唐突なことに驚く鋼太郎。その大きく開いた口に、彼女は何かを突っ込んだ。

口の中にほのぼのと広がるのは、カスタードクリームの甘い風味だ。

「かすたどん、美味しいでしょ？ これで君は一つここが好きになった」

確かに美味しい。美味しいのだが。

「……けっほ！ ……けっほ！ いや、いきなり口の中に突っ込むじゃねえよ！ アン

タは俺を殺す気かッ！」

「あはは！ 君はそんな繊細でもないでしょ。それに」

そんな抗議も軽やかに受け流して。彼女はまるで予言でもするかのように、指先をそつと自らの口元へと当てがった。

「それにアンタって呼び方は気に入らないな——私は天璋院紅音てんしょういんあかね。君がこれからも戦

い続けるのなら、覚えておいて損のない名前だよ」

『あつ、もしもし。西郷さん？ そうそう、私。最年少スーパーエリート隊員の天璋院紅音チャンネルよ』

『うん。例の彼を見に行ったんだけど、結構見込みがあるね』

『それでさ。電話口にこんなことを頼むのもアレだけど。例の申請、通しては貰えないかな？』

03

血に塗れた（フミツキ）の装甲を三日も掛けて磨ききった鋼太郎が次に呼び出されたのは、基地内の会議室だった。

「本部のお偉いさんの一人がテメエと話がしたいんだってさ。次は何処に飛ばされるか知らねーけど。せいぜい粗相をしないよう気をつけるんだな、クソ犬野郎」

そう伝えたのは、鋼太郎の所属する行動予備隊の隊長だった。

「なんなら、犬らしく尻尾を振ってみたらどうだ？ 靴でも舐めてりゃ、処分も軽く済むんじゃないの？」

ついでのように付け加えられた一言には、相応な悪意が含まれている。

別にこの程度の嫌味には慣れてしまった。だから、いちいち構うようなこともない。

一瞥して無視を貫らぬけば、隊長の方がこちらの背を詰まらなそうに睨んでいた。

「テメエなんてどっかの戦場でくたばれば良いんだよ、余所者が！」

「……………うっせーよ。……………俺が余所者だってことくらい、俺が一番よくわかってんだよ」



「島津鋼太郎・二等陸士。ただいま参りました」

ドアをノックするも返事はない。不審に思いながらも入室すると、デスクには幾つかの端末類が置かれている。スピーカーと立体映像の投射器だ。

『初めまして。君が例の“狂犬”くんだね』

まるで鋼太郎が入ってくるタイムリングと示し合わせた様に、投射器は一人の男の姿を映し出す。長身にタイトなスーツを着こなすその男は、他に特筆するような点もない。何処にでもいる様な優男と評するのが一番であろう。

だが、〈サツマハヤト〉に属する隊員ならば、誰もがその男を知っていた。

「さっ……さ、西郷隆月陸将補ツ?!」

下級吸血鬼を一五〇体。並びに上級吸血鬼を八体。この数字は十年前、まだ第一世代モデルの〈FG〉がロールアウトされる以前に西郷が一個小隊を指揮して殲滅した吸血鬼の総数である。

そして現在は、各部隊の総括を任された連隊長の職務を務め上げる〈サツマハヤト〉の中心人物でもあった。

『本来ならば直接出向くのが筋だろうが、何分ボクも多忙の身でね。まずはこんなカメラ越しで会話する非礼を詫びさせてほしい』

「い……いえ！ そんなことは、ありませんっ!」

歴戦の猛者である隆月から受ける印象は、予想よりも柔らかなものだった。

だが、鋼太郎の張り詰めた緊張の糸は解けそうにない。二等陸士と陸将補。両者の階級は十以上もの開きがあるのだ。

『そう緊張しないでくれたまえ。肩書だけは大層でも、所詮は前線を退いた老兵だよ』

本人はそう言っているが地位やキャリアにだって大きな差がある。鋼太郎の知る上層部の中でも、隆月の築いてきた実績は頭が一つ抜けていた。

だからこそ、同時に一つの疑問も浮かぶ。——なぜ、隆月がこうやって自分にコンタクトを取ってきたのか？

鋼太郎は以前にもこうやって問題を起こしては、上層部のお偉い様方に呼び出されていた。

ようやく厄介払いが出来ると言いたげな顔で、欠員の出た予備隊へと左遷を言い渡される。それがいつものパターンだったはずだ。

だが、隆月ほどの重要人物がこうやって、面会を求めてきたことなど一度もない。失礼のないよう気を配りつつ、鋼太郎はその真意を探るろうとする。

「……陸将補殿。本日はどのようなご用件で？」

『君の次の配属が決まった。だから、ボクはそれを伝え、準ずるよう命じなければならぬんだよ』

それならば、書類を一枚添付するだけで十分だ。そんな疑念を汲み取ってか、隆月はさらに説明を付け加えた。

『これでもボクは君のことを高く評価しているんだ。普段の素行や言動こそ褒められたものではないが、君が優秀な〈FG〉のパイロットであることも聞き及んでいる。特にブレードを用いた近接戦闘のセンスが高いとね。剣道か何かの経験があるのかな?』

「……小さい頃に少し、父の影響で剣術を」

『なるほど、お父様のおかげか』

「ちよつと齧った程度の素人剣術です。段も持っていないですし、試合をしたら普通に負けます」

『そうだろうね、真剣と竹刀じゃ、足さばきから違う。……これはボクの旧友の言葉なんだけどね『ボクシングと殴り合いのデスマッチは違う。ルールに縛られた闘いの中ではそのルールにより適応した方が勝つし、逆もそう』らしいよ』

隆月がそつと目を細めた。そこにはホログラム越しだというのに、言い知れぬ圧がある。どうやら隆月を何処にでもいるような男と評するのは少々語弊があったようだ。

細められた瞳には猛禽類の鋭さがある。目付きが凡人とは明らかに違うのだ。

『それじゃあ、話を戻そうか。実はとある部隊がずつと近接戦闘に長けたパイロットを探していてね。君が欲しいと申請を受けたんだ。……ただ、その部隊はちよつとした訳アリだ』

「訳アリ……ですか?」

鋼太郎は小首を傾げた。

『特殊機甲技術試験小隊——通称は〈ケロベロス小隊〉。行動予備隊とも正規小隊とも違う、独自のカスタマイズが施された〈FG〉や新たな試作兵装をテストして、データ収集を目的とした一個小隊。……なんだけどね』

最後の方を明らかに濁していた。眉間に手を当てて、どうオブラートに包むべきかを悩んでいるようだ。

『なんというか、すごく面倒な……いや、個性的なメンバーが揃っているんだよ』

それは隆月なりのフォロワーだったのだろう。けれども、その実態が「変人揃いの実験部隊」であることに察しが付いた。〈サツマハヤト〉中から、自分のように行き場を失った隊員と技術者を寄せ集めでもしたのだろう。

「お言葉ですが、」

鋼太郎の表情が露骨に曇る。

瞳を眇め、隆月を睨んだ。

「もし、陸将補殿がお世辞でも自分のことを評価してくださるのなら、そんな後方な機材を弄るだけの部隊ではなく、自分を戦場に出して下さい。どんなに過酷な戦場でも構わない。自分はどうなことをしてでも、」

『君はどんなことをしてでも、東京に帰らなければならない。だったかな?』

まるで、こちらの全てを見透かしたかのように隆月は続けた。

『言ったよね、君のことは聞き及んでいると。それに、すこし説明不足みたいだ。〈ケロベロス小隊〉のデータ収集は、全て『実戦』によって行われる。時には県外の吸血鬼との戦闘データを取るために、遠征部隊に同行してもらおうケースだってある』

「それって、」

『結果さえ出せば、東京に帰れるかもってことだよ。正直、ボクらにも手段を選んでいる余裕はないんだ。たとえ部下たちに死んで来いと命じることになろうとも、僕自身が地獄の業火に焼かれることになろうとも。——生存圏の奪還と吸血鬼の殲滅。その為ならば、試せるものは何だって試してやろうというのがボクの方針だからね』

それは鋼太郎にとっての天啓。基い「狂犬」にとっては待ち侘びたチャンスでもあった。迷う理由などない。その場で一つの覚悟が決まる。

『彼女たちはすぐにでも君を必要としている。今日中に異動の手続きを完了し、これまでの戦闘レコードと、君の〈フミツキ〉を先方へ送るといい。そして、願わくば、君たちがその牙で吸血鬼たちの喉笛を噛みちぎることを望むよ』

04

七月二五日 午前十一時二十分

あいらし
始良市・加治木 I C

鋼太郎こうたろうを乗せた高速バスは〈サツマハヤト〉の本部基地を目指していた。

車内で揺られるだけの退屈な時間。何気なしに車窓へと目を向ければ、今日も噴煙を上

げる桜島火山さくらじまを見ることができた。

「……またか。風向きは確か、薩摩半島さつまの方だったな」

桜島は現在でも活動が記録される活火山だ。澄み渡る空に向けて、もくもくと煙の柱が立ち昇る様も県民にとってはそう珍しいものでもない。強いて言えば、洗濯物の心配をする程度のものだ。

地元のニュースでは桜島上空の風向き情報が報じられ、それをチェックしながら予定を立てるのも県民特有の習慣であろう。

桜島の灰が降ることは、雨や雪が降ることと変わらない日常の風景だった。少なくとも、

日本で〈吸血鬼症〉の蔓延する十年前までは――

吸血鬼の運動能力を著しく低下させる特殊金属〈聖塵〉。その性質が発見されて以降、桜島が噴火する日には特別な意味が込められるようになった。

少しバスの先頭へと目を向ければ、運転手が胸を撫でおろし、安堵している姿が伺える。乗り合わせた他の乗客たちも概ね同じような反応だ。

〈聖塵〉の影響下に晒されて運動能力の低下した吸血鬼が、防壁を超えた前例はない。少なくとも、桜島の灰が降るその日限りは〈吸血鬼症〉の感染に怯えなくても良くなるのだ。フン、と鋼太郎は心底詰まらなそうに鼻を鳴らして、シートへと腰を掛け直した。

確かに、灰の降る日は〈吸血鬼症〉の感染に怯えることもない。それでも現状だって変わるわけじゃないんだ。

〈聖塵〉を加工した対吸血鬼弾頭やブレードの数だって、人類が攻勢に出るにはまるで数がまるで足りていなかった。

苛立ちを募らせながらに、胸元に貼り付けられた新しいワッペンを見遣る。

そこに描かれたのは鎖を食いちぎる三首の猛犬――鋼太郎が新たに配属されることとなる〈ケロベロス小隊〉のエンブレムマークだ。

行動予備隊を移動になるたびに、幾つもの新しいエンブレムを受け取ってきた。しかし、そこで受け取るのはアルファベットと数字が描かれた簡素なものだ。

それは正規小隊も同じであり、エンブレムには小隊の番号が刻まれるだけだと聞いた。だからこそ、尚更にこのエンブレムが異質なものに思えてしまうのだろう。

「特殊機甲技術試験小隊…通称〈ケロベロス小隊〉か」

〈サツマハヤト〉に所属していれば、噂程度にその部隊の話を知ることもあった。誰もが口を揃えて、あそこは異質な小隊だと語るのだ。

西郷から聞かされた「変人だらけの実験部隊」という話とも大まかな印象は一致する。

「…:ある意味じゃ『狂犬』と呼ばれた俺にはお似合いなのかもな」



間もなくして高速バスは本部基地の周辺に停車した。そこから見える基地の規模は、これまで鋼太郎が転々としてきた行動予備隊のそれと比較にならない。

旧・鹿児島空港の敷地を借り上げたそこには、鋼太郎の属することが決まった〈ケロベロス小隊〉以外にも、一部隊から十二番までの隊舎や〈FG〉を改修するためのガレージ。加えて、吸血鬼の動向を探る観測レーダーまでもが揃えられている。

まさしく、生存圏の奪還と吸血鬼の殲滅を掲げた〈サツマハヤト〉の意思を体現した軍事施設である。

鋼太郎は事前に支給された基地内の見取り図を広げてみせる。どうやら〈ケロベロス小隊〉の隊舎は基地内でも端っこの方にあるらしい。

敷地内にはトーイングカーを始めとした様々な空港車両が行き交っていた。空港車両の中には〈FG〉の牽引に役立つものも多い。だから敷地と共に借り上げて、そのまま転用しているのだろう。

そのうちの一台に乗せてもらえたお陰で、隊舎へもすぐに辿り着くことが出来た。乗せてくれたトーイングカーの運転手が、〈ケロベロス小隊〉の名前を出した途端に気の毒そうにこちらを見てきたが、その目線には敢えて気づかないことにした。

不安を拭いつつ、軽く襟袖を整えて、ドアを開く。

「……失礼します」

隊舎のなかはずいぶん静かだ。隊員同士が円滑なコミュニケーションを取れるよう、玄関からすぐ側に設置された談話室にも人の気配はない。

壁に埋め込まれたデジタル時計に目を向ければ、今がちょうどお昼時であることに気付いた。さつき通り掛かった食堂がやたらと混み合っていたのも、そのせいだろう。

「多分、飯でも買いに行ってるんだろうな」

ならばさつきと背負ってきた荷物を解いてしまおうと、そんな風に考えていると、何処からか呻き声が聞こえてきた。

「……おえええ……ぎぼち悪い……」

声の方に目をやれば、女性用トイレの扉が徐に開け広げられている。そこから這うようにして〈サツマハヤト〉隊服を着た女性が現れた。

「ねえ、その少年。ほんのちょっとでいいから、アタシに手を貸してくれないかな……?」

「えっ……俺ですか……!?!」

「何を言うんだ? そこには君意外、誰もいないだろ?」

それもそうなのだが。明らかに関わってはいけない人間特有の雰囲気がある。

「つか臭っ、酒くっさ! まさか、昼間から酒飲んでるんじゃない?!」

「鹿兒島はお酒もお飲みも美味しいから、つつい飲み過ぎちまうんだよ。特にイモ焼酎と鳥刺し。あの組み合わせは、常々許されるされるものだね」

「いや、理由になってねえよ……」

恐らくトイレから聞こえた呻き声も今の不可解な言動も、二日酔いが原因なのだろう。

仕方なしに彼女に肩を貸して、ひとまずは談話室の椅子へと座らせた。そして自分も反対側の椅子へと腰を落ち着ける。

そこで改めて彼女の顔立ちが、ずいぶんと日本人離れていることに気付かされた。くつきりとした目鼻立ちと金髪に加え、透き通るような青色の瞳をしているのだ。

「ふいつー、なんとか落ち着いたよ。アタシはエノン・ブラウン。アメリカ人だけど、心はジャパニーズニンジャ！ ブシドーってやつをひた走る女さ！」

「いや、その時点で色々間違ってるような気がするんですが……」

「細かなことを気にしているうちはモテないぞ、少年。というか……君は誰だ？ 酒に弱い自覚はあるが、それでも記憶が飛ぶほど飲んだ覚えはないぞ」

やけに流暢な日本語でそう言われて、鋼太郎も名乗っていなかったことを思い出す。

「……島津鋼太郎・二等陸士です。本日より特殊機甲技術試験小隊に配属されることになりました」

「ふむ……では君が西郷さんとあの娘の言っていた例の『狂犬』くんか」

エノンがほんの一瞬だけ、視線を鋭く細める。

しかし、それもほんの一瞬のことで、すぐに手を広げてみせた。

「歓迎しよう、ミスター鋼太郎！ ようこそ〈ケロベロス小隊〉へ！」

そこで彼女はついでのように付け加える。

「それから、タメ口でも構わないぞ。そもそもアタシは兵隊ですらないからな。君たちのルールや階級の外にいる存在なんだよ。あっははは！」

「は……？」

頭の中にクエスチョンマークが浮かんだ。

「いや、隊服を着てるだろ……」

「あー……これは、ゲロって着るもんがなくなったから備品を借りてるだけ。というか異国の血を引くアタシじゃ〈FG〉に乗れないだろう？」

「けど、なんか隊員のな雰囲気を出してただろ！ それにさっきだって、なんか隊長っぽく歓迎の挨拶をしてくれたじゃないかッ！」

「あれはなんというか、アメリカンジョーク……いや、ちょっとした悪ノリってやつだな」
鋼太郎は絶句してしまう。変人揃いとは聞いていたが、一人目でさえこれだとは。

しかも彼女は〈ケロベロス小隊〉のメンバーですらないという。

「えっと……それじゃあ、本当の隊員は？」

「それなら、あの娘がそろそろ戻ってくるんじゃないか？ ほら噂をすれば」

「エノン先生、購買で水としじみ汁貰ってきたよ！ ……って、あれ？ もしかして、そこにいるのはいつぞや『狂犬』くんじゃないかな？」

思わず既視感^{デジキャウ}を覚えてしまった。背後から聞き覚えのある声がある。

それにこのシチュエーションだってつい最近、体験したばかりのような気がする。

「まっ、まさかな……」

そう自分に言い聞かせながらも、恐る恐るに振り返る。しかし、期待に反して彼女は買物袋をぶら下げながらに立っていた。

彼女の一つにまとめた黒髪のポニーテールが小さく揺れる。

「改めて自己紹介をしようか。私は天璋院^{てんしょういんあかね}紅音・二等陸尉。〈ケロベロス小隊〉の隊長を務めさせて貰ってるの」

「なっ……!? に……二等陸尉だどッ!?」

困惑と驚愕が同時に襲い掛かってきた。紅音は鋼太郎とそう変わらない歳のはずだ。〈FG〉に乗り始めた年数だって、大差はないはず。そんな少女が一個小隊を率いていることにも驚いたが、もっと驚くべきは彼女の階級にある。

年齢十八にして尉官。鋼太郎よりもちょうど九つ上の階級を誇っているのだ。隊服の襟元に留められた徽章も煌びやかにそれを表している。

「ふふふ……だから言ったでしょ？ 名前を覚えといて損はないって。なんたって私は、最年少スーパーエリート隊員！ 天璋院紅音ちゃんなんだから！」

そのドヤ顔が癪に触ったことは言うまでもなく。それでも紅音は大手を広げてみせた。

「歓迎するよ、鋼太郎くん！ ようこそ〈ケロベロス小隊〉へ！」

「あっ……それはもうアタシが言っちゃった。そっくりそのまま、同じ台詞で」

「……マジ？」

「……マジもマジ。大マジ」

しばしの沈黙。そのまま二人が気まずそうに顔を見合わせる。

「なんで言っちゃうの、エノン先生！ というか、先生は隊員でも無いくせに！」

「いやーこの新人くんがなんか勘違いしてるぽかったから。ついうっかり」

「ついうっかり、じゃないでしょ！」

なぜだか見ている鋼太郎の方が頭痛を覚えてきた。これから、この変人二人にどう返答を返せばいいのか。それを考えるだけでも億劫になる。

「はあ……せつかく色々考えてた隊長っぽい台詞も、先生のせいで全部台無しになっちゃいました。だから、もう鋼太郎くんには言いたいことだけ言うことにします！」

「……言いたいこと？」

「うん。これだけは次に会ったら言っておくって、ずっと決めてたことがあるの」
紅音が鋼太郎の表情を覗き込んだ。その丸く大きな瞳で鋼太郎のことをじっと認める。
「君さ、狂犬」だとか、何とか色々言われてるけど。——実はすっごく弱いだよ？」

05

「……なにが言いたんだよ？」

こうたろう
鋼太郎は瞳を細めて、あかね紅音を睨んだ。

「だーかーら、君が弱いつて言いたい。んー……具体的に言うなら、そうだね。悪ぶってるだけで本当は喧嘩をしたこともない、格好だけのチンピラくらい弱いでしょ？」

「……やけに生々しい例えだな。……それに俺が聞きたいのは、」

「どうして私が君のことを弱いと思うのか？ 君が聞きたいことくらい、わかってるよ」
彼女の立てた人差し指が、胸元を軽く突き刺す。

鋼太郎は一度たりとも、自分のことが「強い」と思ったことはない。素手の殴り合いにしたって、〈FG〉の操縦技術にしたって、相応に身の程は弁えているつもりだ。

ただ、それでも。鋼太郎は自分のことを「弱い」と思ったことだって、一度たりともありはしない——

「俺は〈FG〉の操縦能力を評価されたから、ここに呼ばれたつもりでいるんだけどな」
紅音は少し困ったようにして、瞳を伏せる。

「私ね、あんまり話しながら説明するってことが上手じゃないの。だからさ、君には身をもって教えてあげるよ。ほら、私に着いてきて」



紅音に着いて行った先にあったのは、〈ケロボロス小隊〉の〈FG〉を格納する整備ガレージだった。

ガントリークレーンの配備された天井は異様に高く、搬入された機材や弾薬も充実している。以前のプレハブ造ガレージとは設備の整い様が明らかに違っていた。

流石は本部基地の特殊機甲技術試験小隊と言わべきか。武装ハンガーには見慣れぬ試験兵装がズラリと取り揃えられていた。

ただそんなガレージの端っこには、本来そこにあるべきではないものが在る。

「格闘場^{リング}?　なんで、こんなものが?」

正方形のマットとそれをぐるりと取り囲むように立てられた柱には、四本のロープが貼られている。少々フィールド内が狭いような気もするが、それは確かに格闘技に用いられるリングだった。

「訓練用だよ。〈FG〉の操縦は本人のセンスに著しく左右されるからね。対吸血鬼との近接トレーニングを想定して、私が用意させたんだ」

両手に真っ赤なボクシンググローブを嵌めながらに、紅音が応える。いつの間にかスポーツウェア姿へた着替えていた彼女からは、しなやかな四肢が覗いていた。

「さて。早速だけど、私はこれから鋼太郎くんをボコボコにしてやろうと思います!　細かいルールとかレギュレーションとかはナシ。先に相手を降参させた方の勝ち」

「……つまり、なんでもありってことか。俺はてつきり二等陸尉様と〈FG〉同士でやり合えると思ってたんだけどな」

「別にそれでもいいけど、勝負にならないと思うよ」

あっさりと返されたその一言は、鋼太郎の神経を逆さに撫でた。

そんなこともお構いなしに紅音は続ける。

「あっ。鋼太郎くんは、それも使っているからね」

彼女が視線で指し示す先。そこには剣道に用いるような竹刀が、ガレージ隅のロッカーへと立て掛けられていた。それも度々使う機会があったのか、小さな傷も幾つも付いている。

「これも、訓練用なのか?」

「そっ、〈FG〉の用いるブレードによる近接戦闘を再現するために用意してるの。せつかくなんだし、お互いに得意な武器でやる方がいいでしょ?」

「……何がお互いにだよ」

いくら〈FG〉であっても、素手の格闘術だけでは吸血鬼に太刀打ちできないはず。彼女は見え透いた嘘で、自らの特技を画していた。

言うなれば、この竹刀は鋼太郎への挑発紛いなハンデそのものだ。

「どうやら、とことん舐め腐ってくれてるらしいな。言っとくが、いくらアンタが俺より上の階級だとしても手加減はしないぞ」

「いいよ、別に。それを理由に後から負け惜しみされても面倒だし」

二人はそのままリングへと上がる。竹刀を手にした鋼太郎の姿は場違いにも思えたが、紅音はお構いなしといった様子だ。

ゴングを鳴らすのは両者のタイミング。鋼太郎は彼女との間合いを図りながらに刀を八相で構えた。

刀を立てて頭の右手側に寄せ、左足を前に出す。バッティングフォームにも似たそれは、現代剣道の基本とも言える中段の構えや上段の構えとも明らかに違っている。

ただ、紅音はそこから繰り出される剣術それを既に知っていた――

「ねえ。やっぱり君のそれって薩摩さつま示現流しげんりゅうだよね？」

「……別に何だって良いだろ。……それよりアンタも早く構えたらどうだ？」

「誤魔化さないでよ」

鋼太郎はバツが悪そうに目を逸らす。

示現流は薩摩藩を中心に広まった、鹿児島特有の古流剣術だ。そして、「振り下ろした勢いで、防いだ刀ごと頭蓋を叩き切った」という逸話を残すほどに、威力と速さに特化した実戦向きの複合剣術でもある。

「君の居場所は鹿児島かごしまには、なかったんじゃないの？」

「小さかった頃、親父に教わった程度の技だ。使えるものは何でも使うタチでな」

「ふーん。そういうなりふり構わずはスタンスは、案外嫌いじゃないかも！」

彼女もまた構えを取った。両腕で上体をガードするそれはキックボクシングのものだ。

「そうだ。どうせなら、なんか賭けよっか！ エッチなお願だからご当地ガイドまでスーパー最年少エリート隊員・紅音チャンがなんでも聞いて上げるからさ」

「別に、そんなものに興味はねえよ。特に前者にはな」

「ちえっ。……それならさ、〈ケロベロス小隊〉の隊長になる権利を賭けてみるってのは、どう？」

紅音がその丸っこい瞳をイタズラっぽく細めた。

「鋼太郎くんが勝てば、今日から私の小隊は君のもの。だけど君が負けたなら、そうだね……隊長命令でトイレ掃除を一週間だ！」

「……ハッ！ 上等じゃねえかッ！」

鋭く前へと踏み込んで、鋼太郎の豪剣が振り下ろされる。半円を描く軌道は、着実に紅音を捉えていた。その示現流の一太刀は、早々に二人の諍いに決着を付けるかとも思わせる。

しかし、彼女は軽妙なバックステップでそれを避わした。

「おっとと!？」

「まだだッ！」

一撃必殺の示現流は、初太刀を凌げば怖くないというイメージが広まりつつある。しかし、それは誤った認識だ。

「疾ッ！」

鋼太郎は浅く呼吸を整えて、二撃目、三撃目を流れるように振り上げる。紅音もそれを避わそうと、すぐにロープの端へと追い詰められた。

「……なるほど、思ったよりは悪くないや」

追い詰められた紅音に逃げ場はない。

「けど、悪くないだけ。凡的だね」

だというのに彼女は、張り巡らされたロープに自らの身体を投げ出して、無防備を晒してみせた。

「やっぱり、君は弱いよ。少なくとも“狂犬”なんてアダ名は似合わない」

「どういう意味だよ？」

「そのまま。君は少しも狂っていない。マトモだって言ってるの」

彼女はつまらそうに。そして心底失望したように鋼太郎の握る竹刀の先を指した。

「例えば君の剣。全ての太刀筋が一撃必殺にもなり得る示現流剣術は、対吸血鬼戦闘において最も有効な戦術じゃん」

ヴァンパイア・シンドローム

〈吸血鬼症〉の罹患者は驚異的な人喰いの化物に変貌することに加え、異常とも言える超再生能力を獲得する。

獲得する再生能力には個体差もあるが、銃弾や斬撃を再生した筋骨で押し返すほどだ。だとすれば、それを屠る〈FG〉にも相応に高い攻撃力が求められる。

示現流剣術もその最適解の一つと言えた。

「例えば、君の在り方だってそうだ」

次いで彼女が指を刺したのは、鋼太郎の眉間だ。

「一切の手段を選ばないってことは、効率的で理性的ってことでもあるんだ」

「それで？ 結局アンタは何が言いたいんだよッ！」

「困ったなあ、さっきも言ったけど、私は教えるの苦手だから。けど、そうだね。マトモな君の動きなら簡単に読めるッ！」

鋼太郎が刀を振り上げるその一瞬に、彼女がタイミングを合わせた。迫る刃に向けて、素早くアッパーカットを撃ち放つ！

刀身を彼女のグローブ擦り、そのまま刃に乗せていた速度を上方向へと逃がされた。

「なっ……!？」

「合理的で理性的なことを咎めてるわけじゃないんだよ。ただ君の動きには、直感センスと

オリジナリティ
独創性が足りてない——だから君は弱いんだ」

「うぐつつ……!!」

右脇腹に何か突き刺さる。

焼けるような痛みと、喰らいつくような衝撃の正体が紅音の拳であると理解するのに、さらに数秒を必要とした。

「さあ！ ここからは紅音チャンのターンだよッ！」

彼女はコンバクトに次の動きを構築する。最小限のモーションで鋼太郎の懐へと飛び込み、ジャブとストレートを交互に繰り返す。

「このッ……!!」

構えを崩された以上、再度構え直すまでに数秒を要する刀は返って不利と判断した。

リーチ差によるアドバンテージも、ここまで間合いを切り詰められれば意味をなさない。

「なら、いつそ！」

「おっ、ここで刀を捨てるんだ」

竹刀をその場に投げ捨て、鋼太郎もまた両腕で上体をガードした。紅音のそれを真似たキックボクシングの構えだ。

これで仕切り直し。殴り合いへと持ち込めれば、体格が勝る鋼太郎が再び有利となる。

「うん。悪くないセンスだね。けど、まだまだオリジナリティに欠けるよッ！」

彼女はまたも唐突にキックボクシングの構えを解いてみせた。パチリ！と片目を閉じてウインク。そして鋼太郎の傍へと滑り込み、落ちた竹刀を拾い上げたのだ。

「私は別に鋼太郎くんを否定するつもりもない。ただ、勿体無いと思ってるだけなの。今の君は随分と息苦しそうだから」

円を描くような軌道で背後へと回り込み、めいっばい竹刀を振り上げる。それは鋼太郎の視線が捉えた紅音の最後の挙動だった。——叩きつける衝撃と共に意識は暗転する。

06

隊舎の窓から差し込むオレンジ色の遮光は、辺りを色褪せた写真のように映し出した。そんなセピアな雰囲気のせいだろうか？

額に大きな絆創膏を貼りながら、便器を磨く鋼太郎の姿がことさら惨めに映るのは。

隊長命令で一週間トイレ掃除。どうやらアレは何の冗談でもなかったらしい。ブラシを片手に小便器に染み付いた汚れをひたすらに擦りながら、鋼太郎は不満を漏らす。

「まだ眉間の辺りが痛え……あの鹿児島人め。どんな腕力をしてやがるんだよ」

紅音あかねの振るった刃は、竹刀による威力の常識を超えていた。

数ある日本剣術の中でも、特に「攻め」に重きを置いたのが示現流だ。その技を父から学んだ鋼太郎から見ても、彼女の振るう刃の速度は異常に思えた。

竹刀を握るフォームも力の込め方も、ほとんど素人同然だったはず。それでも鋼太郎の意識の外周からあんな一撃を振じ込めたのは、天性のセンスとしか言いようがない。

——君の動きには、直感センスと独創性オリジナリテイが足りていない。

結果的に紅音の言葉を借りるようなことが堪らなく悔しい。

あの他人の神経を逆撫でするようなニヤケ面を思い浮かべながらに、ギチチツと歯を噛み締めた。

「あの女……いつか絶対泣かす！」

「ふふ。その様子だと、どうやらあの娘こにこっ酷くやられたみたいだね」

トイレの入り口辺りから声を掛けられた。二度あることは三度あると言う。しかし、その声は紅音の弾むような声とは違う。もつと落ち着きのある大人びた声だ。

「たしか……アンタはエノン先生だったか？」

「おっ、アタシのことも覚えてくれたんだ」

扉を開ければ、そこに立っていたのは白衣を羽織るエノンだった。

レトロチックな丸サングラスも掛けていても、それが妙に似合っている。この格好が本来の彼女なのだろう。

「その格好は医師か？ それともザンバイア・シンドローム〈吸血鬼症〉の研究者とか？」

「惜しいじゃないか。確かにアタシはそこらの医者や研究者より頭が良い。だけどね、キミの所属する小隊の正式名称は何だい？」

「特殊機甲技術試験小隊……だよな」

鋼太郎は作業の手を止めて、戸惑いながらに答えた。

「そう！ 即ち、色んな〈FG〉をテストする小隊だ。それなら当然必要なんじゃないかな。腕の良い技術者メカニックって奴がさ！」

エノン・ブラウン——彼女は〈ケロベロス小隊〉に派遣された技術開発の顧問であ

り、兵器工学における権威でもあった。

「アタシ、これでも凄いなだよ。元JAXAの技術者だったんだから！ まあ、技術交流で日本にやって来た時期に本国の方で〈吸血鬼症〉が蔓延しちゃったから、母国に帰れないんだけど……って、おいおい、何だよ？ その嘘を吐いてる奴を見るような目は？」

「……………」

鋼太郎は疑いにあふれた目で彼女を睨んでいた。

仮に今までの話が本当だとしても、後ろに隠している焼酎の瓶が話の信憑性を著しく下げていることに、なぜ気付かないのだろうか？

「悪いけど、俺も酔っ払いの妄言に付き合ってもらえるほど暇じゃない」

「まだ飲んでないからセーフですよーだ！ それにコレは紅音隊長に没収される前に、お滴みのさつま揚げとセットで部屋の冷蔵庫に隠しておくためなんだから」

まず没収されるほど酒を飲むな。とは敢えて突っ込まなかった。どうせ無駄だろうし。

「『FG』のフレーム剛性と〈刃血^{じんけつ}〉の循環率の見直しについて』アタシが最近発表した論文のタイトルなんだけど。ネットで無料公開してるし、調べればアタシが嘘を吐いてないって分かるんじゃないか？」

その論文なら鋼太郎も目を通したことがある。自らの搭乗する〈フミツキ〉の性能を独自で向上させようと、〈FG〉に纏わる資料を片っ端から読み漁った時期があるのだ。

鋼太郎は今更ながらに、これまで目を通してきた多くの〈FG〉関連の資料には「エノン・ブラウン」の名前があったことを思い出す。

「むむ……これでも信じて貰えないか？ それなら『転生したら美少女技術者だった件！』ロボットを作って無双しなきゃいけないのにお酒が美味しすぎて仕事ができせん！』と検索してくれ。アタシが書き上げた渾身の一作が、」

「待ってくれッ！ なんだよ、その明らかにヤバイ雰囲気にするタイトルはッ!？」

「何を言う！ ウェブ上では好評を集めているんだぞ！ 特にヒロインが二日酔いで嘔吐するシーンが生々しくて、共感できるって」

「同行^{酒カス}の志を集めてんじゃないやねえよッ！」

そんなシーンに果たして需要があるのだろうか？ 紅音もそうだが、彼女の言動にもいちいち反応していてもキリがない。

「とにかく、今のアタシは素面なんだ。嘘も吐いていない」

「……ひとまずは信じるよ。……なんか疑う方が面倒くさくなってきたし」

「それは良かった。なら信じてくれるついでに、少し駄弁らないか？」

酔っ払いの妄言以外なら聞いてくれるんだろ? と彼女は小さくほくそ笑む。



流石にトイレ掃除をしたまま、立ち話ともいかない。丁寧に手を洗って、本日、二度目の来訪となる談話室の椅子へと腰を下ろした。

「それで? アンタは俺に何の用があるんだよ?」

「まず前提として。アタシにとって〈ケロベロス小隊〉は大事な箱庭のようなものなんだよ。これからも色んな兵器を研究をする以上、隊員同士の不和で、データが取れなくなるなんてまっぴら御免でね」

「要は、あの鹿児島人にポコポコにされた俺が拗ねないようフォローしに来たってわけか」
「平たく言えばそんなとこだね。それに紅音隊長は説明がド下手だから。たまーに何を言ってるかわからない時があるし」

「……それをアンタが言うのかよ?」

エノンが小首を傾げた。

酔ってるのではなく、これは本当に自覚のないとき顔だ。

「けど、まあ、今回はアタシもあの娘と同じ意見かな」

「……なんだよ? アンタも俺が弱いつて言いたいのか?」

鋼太郎の苛立ちが露骨にもなった。彼女も小さく方をすくめて、サングラス越しにわざとらしく視線を逸らす。

「多分だけど、君が弱いつて言うのはあの娘なりの挑発だよ。君に火をつけるためのね。それにアタシが抱いた感想は、〃狂犬〃つてアダ名がキミに似合っていないって方だ。――あと、ついでに言うのなら、アタシはその根拠を紅音よりも、もっと上手に説明できろぞ」

「……なら、是非ともご教授願いたいな」

「それじゃあ、キミ。さっきトイレから出た時、手を洗ってただろ?」

今度は鋼太郎の方が疑問に首を傾げた。

トイレ掃除をしていたのだから、終わったなら手を洗う。それは当然のことだろうと。

「それがらしくない理由だよ。本当に頭のイカれた奴にそんな良識があると思うか?」

答えは、言わずもがなであった。

鋼太郎が〃狂犬〃と呼ばれるようになった理由。それは目上の人間だろうとも容赦なく反抗し、命令無視と問題行動を繰り返した結果。

そして、自らの〈FG〉を傷つけ、流れた血を餌に吸血鬼を塵殺しようとする様と、目的を果たすためならば、一切の手段を選ぼうとしない、そのスタンスがきっかけであった。

だが、それも裏を返せば、理性的で合理的な判断を下した結果である。

「アタシは事前に送られてきた君の〈フミツキ〉を調べたんだ。マシーンってのは何処かの誰かさんと違って素直だからね、フレームの劣化具合や人工筋繊維の摩耗具合を見れば、パイロットの人物像やクセを大まかに推察することもできるんだ」

ブレードを用いて、吸血鬼とのゼロ距離戦闘を好むのが鋼太郎のクセ。それを一見すれば戦闘を好むバトルジャンキーのように映るだろう。

しかし、それも吸血鬼の再生能力や弾頭の希少性、飛散する空葉莢による近隣住宅への被害を鑑みれば、最適な判断の延長線にあると言えてしまうのだ。

「上司を殴ったなんて話も、提出された報告書を見せてもらった限りじゃ、非は相手の態度にある。どうやら、キミは自分で思っているより随分とマトモみたいだよ」

——ただ、勿体無いと思ってるだけなの。今の君は随分と息苦しうだから。

ふと、紅音に言われた言葉が蘇った。

「なら先生はどう思う？ 俺はどうしたら、あの何を考えてるか分からない鹿児島人を見返してやれると思う？」

「残念だけど、私はその答えは教えられない。計算ドリルみたいなもんさ。裏のページにある答えを見たって成長は出来ないだろ？ 答えは君自身が気づかなきゃ」

エノンは大切に、ずっと隠し持っていた（つもり）酒瓶を机の上に置いた。
小さなグラスも白衣の内に隠し持っていたのだろう。

「けど、ヒントくらいは上げてもいいのかな」

鋼太郎が止めるよりも早く、彼女は透き通るような焼酎をストレートで煽る。

「あつ、今飲みやがったな！ まだ勤務時間だろ！」

「その理屈なら、トイレ掃除をサボってアタシと駄弁ってるキミもアウトだろうけどね。それにアタシたちは似たもの同士って奴なんだ」

「……似たもの同士？ ……俺とアンタがか？」

「アタシも君も。それに紅音隊長や、今はちょっと遠征任務で席を外しているもう一人の隊員も。——〈ケロベロス小隊〉は似たような連中の集まりなんだよ」

すぐにアルコールが回ってしまったのか、ほんのり心地よさそうな赤ら顔でエノンは歌うように続けた。

「君は変人の条件ってヤツを知ってるかい？ 本当に変な奴か、目標が周りのその他大勢に理解してもらえない場合のどちらかなんだよ」

因みに前者が紅音。後者が自分や鋼太郎たちであると、付け加える。

「つまり、何が言いたいかと言うとだな。〈ケロベロス小隊〉に集まった連中は、変人揃いの似たもの同士ってこと。けど、それならさ。君も紅音隊長と同じくらい強くなれるって可能性でもあるんじゃないか？」

鋼太郎はまだ紅音の強さの全容を知らない。ただ、剣を用いた鋼太郎が素手の彼女に負けたことだけは確かな事実として、ここに存在する。

少なくとも、生身での喧嘩は彼女の方が明らかに強かった。

「東京に帰るためならば、なんだってやる。それが君のスタンスであることも聞いている。なら君は紅音隊長からは強さを学ぶことだって出来るはずだ」

「エノン先生……」

そう言いながら、エノンはさりげなく二杯目を注ごうとする。鋼太郎はそれを見逃さず、彼女の手首をキツく押さえつけた。

「途中まで頼れる大人感が出てたのに、コイツのせいで台無しだよッ!!」

「なっ!? 頼れる大人ってのは、皆お酒をカッコよく飲むって相場が決まってるのに」

「まず、勤務時間内に酒を飲んでんじゃねえッ!」

その直後。偶然にも辺り通掛かった紅音に酒瓶を見つけたり、エノンがそれを没収されたことは言うまでもない。



それから約八時間後。基地内の観測レーダーにて、下級吸血鬼の反応が複数確認された。その数、およそ三〇——〈吸血鬼症〉に侵され、本能のままに血を啜り人肉を喰う化物の群れが、鹿児島に放たれたのだ。

07

さつま町・国道五〇四号

七月二六日 午前三時四〇分

薄闇の中に仄の光る電子機器に圧迫されたコックピット。そこで機体と動脈を繋いだチューブを巡るのは、色鮮やかな〈刃血〉だった。

「……血液充填率。七十パーセント、七五、八十」

人体に内包される〈刃血〉は決して無尽蔵ではない。男性であれば平均で約四〇〇〇ミリリットル。そのうち、一度の戦闘に用いることのできる血液量は一〇〇ミリリットルに

も満なかった。

たしかに〈刃血〉は僅か数滴でも機体を稼働させるだけのエネルギーを秘めている。だが、それも短時間の稼働に限られた話だ。

ターゲットとなるのは高い再生能力を誇る〈吸血鬼症^{ヴァンパイア・シンドローム}〉の罹患者。それを葬るのには、相応の時間が必要となる。

そのため機体のフレーム内は、常に〈刃血〉の性質を再現した人工血液で満たされていた。しかし、それも所詮は模造品のデッドコピーに過ぎず。人工血液を活性化させ、エンジンに火を入れるにも、パイロットの純粋な〈刃血〉が必要とする。

〈FG〉もまた貪欲なのだ。

かつて民謡に語られた吸血鬼を屠るのに、神が民衆からの信仰を必要としたのに対し、人の括りから外れた化物を屠るのに、そのヒト型兵器もまた相応の代償を求めた。

「……九十、九五、一〇〇」

およそコップ一杯分の血液をこっそり抜き取られた鋼太郎は、まどろむような倦怠感に襲われた。思考がぼやけて、視界が僅かにフラつく。

「クソっ……相変わらず、持っていき過ぎなんだよ……」

ポケットの中を弄り、その中であつたカロリーメイトを口の中へと押し込む。

乾いた食感をミネラルウォーターで強引に流し込みながらに、ほつれた集中力を結び直した。

『……あのさ、もっと美味しそうに食べれないの？ ASMRみたくとまでは言わずとも、苦しそうに呻く声を聞きたくはないんだけど』

「そっちが通信チャンネルを勝手に繋げてきたんだろうが」

イヤホン越しに聞こえてきたのは紅音^{あかね}の声だ。音声だけでも、ムスツとした彼女が簡単に想像できた。

『私は〈ケロベロス小隊〉の隊長だからね。隊員たちに指示を飛ばさなきゃいけないの』

「隊員たちって、今は俺とアンタしかいねえだろ……」

『あーもうっ！ あー言えば、こう言うヤツなんだな、君は！』

彼女が通信の周波数を合わせてきたのは、戦況の確認をするためだ。

約一時間前。三十体以上もの下級吸血鬼が、出水市^{いずみし}・肥薩山脈^{ひさつさんみやく}で確認された。

事態の規模を考慮した結果、〈サツマハヤト〉は即座に事態を收拾すべく、担当地域の行動予備隊のみならず、周辺基地や正規小隊、そして〈ケロベロス小隊〉にも救援を求めた。

そして二人の〈FG〉を積載した多目的トレーラーは現在、肥薩山脈に向かう道中にある。

『それにしても変だと思わない?』

「……何がだよ」

『ターゲットの数だよ。県境を囲む城壁と計四〇〇門からなる砲撃システムが一体や二体ならともかく、三十体もの吸血鬼の侵入を許すと思う?』

「今日は風向きも悪い。〈聖塵^{せいじん}〉の発する磁場の影響がほとんど作用しなかったからじゃないか?」

吸血鬼の運動能力を著しく阻害する〈聖塵〉は桜島の噴火によって降り注ぐものだ。大きな噴火が観測されなかった今日一日は、吸血鬼たちにとって鹿児島に攻め入る絶好のチャンスとも言えた。

だが、紅音はそれにも納得しない。

『だけど、そもそも前提として吸血鬼たちにそこまでの理性があると思う?』

あれを理性ある生物と思うな。あれは狂った死体だと思え——それは〈サツマハヤト〉の教本に綴られた一文だ。

下級吸血鬼に理性はないと言われている。狡猾さや本能としての生き汚なさは生前の残滓として残っている、強襲のタイミングを測ったり、群れを成して行動できるだけの理性はない。

防壁の向こうの奪われた生存圏では、血を求めた下級吸血鬼同士が互いを喰い合う様さえ目撃されている。そんなバケモノもがどうやって防壁の迎撃システムを掻い潜ったかも定かではないが、それ以前に大群を成していることが不可解なのだ。

『まっ、所詮は一兵卒の私たちがそんなことを考えてても仕方がないんだけどね』

「なっ!? 自分から話題を振ってきたくせに!」

「余計なことを考えてる暇もないでしょ? 私たちの目的は県内に入り込んできた吸血鬼の殲滅だよ。気合いをバッチリ引き締めなきゃ」

通信越しの紅音はあっけらかんと答えた。真剣に取り合っていたこちらが馬鹿馬鹿しくなってくるほどに。

ただ、そこには一才の緊張を伺うことができない。これから戦場に身を投じるというのに、彼女の様子と精神は平静そのものなのだ。

『ふん、ふふーん♪』

通信には時折、彼女の鼻唄さえ混ざり込む。

「シヨッピングにでも行くつもりかよ……」

毒吐きながらも鋼太郎はモニター上に、紅音の搭乗する機体のデータを表示した。

片式番号FG―ゼロファイブカスタム零伍改〈ハツキ〉——鋼一郎の駆る〈フミツキ〉が武骨な鎧武者のような姿なら、所々の内部フレームが剥き出しにした彼女のマシンは細身のクノイチを思わせた。

〈ケロベロス小隊〉は様々な装備を検証する為の実験部隊だ。だから多少の珍しい機体や装備を見ることは予想していたが、まさかこんな機体まで配備されているとは。

〈ハツキ〉は〈フミツキ〉の高機動化をコンセプトとした改修機カスタムモデルのひとつだ。余分な装甲を切り捨て、隊長やエースの専用機として調整された機体と言えば聞こえはいいのかもしれない。

しかし、その実態は三〇パーセントもの装甲が廃され、パイロットの安全性と機体の強度に大きな問題を抱える欠陥機でもあった。

たしか、十機〈ハツキ〉が県境の防壁周辺に配備されたと聞いていたが、その構造的な脆さとパイロットを押し潰そうとするGの負荷が大きすぎたせいで、ロクな活躍もできないまま全機が解体、予備パーツに回されたと聞いていたが。

「まさか、こんなところに残っていたとはな」

右肩には〈ケロベロス小隊〉のエンブレムマーク刻まれていた。紅と白のパーソナルカラーも一際目立つ。

そして何より興味を惹かれるのは、彼女が携えたその兵装だ。

「あれはたしか……」

『ねえ。こちら辺で停めて貰えないかな?』

唐突にも紅音がトレーラーそんなこと言い出した。

トレーラーの固定具を解放。〈ハツキ〉が上体を跳ね起こす。カメラアイの双眸が翡翠

色に明滅し、稼働状態へと移行した。

『鋼太郎くん。ここからは走るよ』

「は……? おい、ちよつと待てッ!」

次に彼女は〈フミツキ〉の方へと目を遣った。隊長機の上位権限を用いた遠隔操作によって、鋼太郎機を強制的に起動させる。

『既に幾つかの部隊は、吸血鬼と交戦を開始している。だけど今回は敵の数も多すぎるから、そう長くは保たないと思うの』

「だからって、」

『けど〈FG〉この子たちならトレーラーよりも速く走れるでしょ?』

高機動型の〈ハツキ〉は当然ながら、鋼太郎の〈フミツキ〉も一部のリミッターを解放すれば、トレーラーを上回る速度での走行が可能となる。紅音の判断は速やかに戦場へと身を投じ、ターゲットを殲滅するためのものと言えた。

だが、彼女の判断には一つの致命的な欠陥を孕んでいる。

「ここから出水市に到着するまでに消費する〈刃血〉の量が多すぎる。そもそも〈FG〉の運搬にトレーラーや航空機を使う理由は、無駄な〈刃血〉の消耗を避けるためだろ！」

『そんなことは分かっているよ。だから、ずっと計算してたんだし』

「……計算だと？」

『吸血鬼の大群を殲滅するのに必要な血液量と、出水市の肥薩山脈までの距離を走り切るのに必要な血液量。自信ならあるよ。ここから走れば、血液の残量だってギリギリ足るはず』

通信に紛れ込むパチン！ という雑音。彼女が集音器マイクの近くで指を弾いたのだろう。

『それに、これは君のための提案でもあるんだから』

「俺のため？ 悪いがアンタの提案は『〈刃血〉を無駄遣いした挙句、貧血で死ぬ』って言っているように聞こえるんだけどな」

『けど、それは君がいつもみたいな戦い方をした場合の話でしょ？』

自らを斬りつけ、夥しい量の鮮血を纏いながらに戦う。

それが鋼太郎が“狂犬”と呼ばれるようになった所以でもあった。

『と言うか。私が走ろうって提案したときに、君もしれっと計算したでしょ？ いつもの戦い方をするのに十分な血液量が余るかをさ』

「それは……」

彼女の指摘に、鋼太郎は口ごもる。

『凶星って奴かな？ 確かにあの戦い方は悪くない。けどさ、やっぱり発想がマトモなんだよ。狂ってるように見えるだけで、理性的かつ合理的なんだ』

キツく握りしめた操縦桿に要らぬ力が入っていた。一つずつ自分の中に苛立ちが積み重ねられていく。

同じことを言われるのだから、これで何回目だろうか。

「結局、アンタはまたそれかよッ！」

『そうだよ。私は君の隊長なんだ。君が成長するために必要なことは何度だって繰り返すし、君が出来るようになるまで何度だって同じことを指摘する。——何度でも言うけどさ、君は勿体ないんだよ』

〈ハツキ〉が旋回し背を向けた。敢えて言葉にはしないまま、自分に付き従うかを、その背で鋼太郎へと問いかける。

『理性的かつ合理的なのは大いに結構さ。だけど、それじゃあ君は、いつまで経って居場所を見つけれないと思うんだ』

蔓延した〈吸血鬼症〉によって人々は生存圏を奪われ続けて来た。美しい景色も。賑やかな街並みも。大切な人達と過ごした温かな場所さえも。

その全てを血肉を喰らう化け物たちによって蹂躪されたのだ。

『居場所ってのは勝ち取るものじゃないかな？ 強くなった君が、その手でさ』

通信越しに聞こえる〈ケロベロス小隊〉隊長の声は、うっすらと笑っていた。

『選択は君に任せるよ。だけど、君が私について来てくれるなら見せてあげる。本当の“狂犬”の戦い方って奴を』

08

出水市・肥薩山脈

午前四時

出水市は十月中旬から翌年の三月にかけて約一万羽のツルが飛来する渡来地として広く知られていた。しかし、それも〈吸血鬼症〉ザアンバマイア・シンドロームが広まる以前のこと。生存圏の縮小と環境の急激な変化によって、飛来するツルも著しく減少したのだ。

市の東部には矢筈岳やはすだけを主峰とした肥薩山脈が北東に走る。そこへ先行した紅音あかねの〈ハツキ〉は、木々の影に身を潜ませながらに各種センサー類を起動させた。

「パルスリーダーとサーモグラフィックカメラを併用。探索範囲を広域モードに拡張」〈ハツキ〉の収集する膨大な情報量がモニター上に叩き出された。それを元に紅音はざっくりとした戦況を俯瞰する。

下級吸血鬼が三十体以上に対して、抗戦する行動予備隊の〈FG〉は八機。

病原菌を内包した生物は皆等しく不幸と理不尽を運ぶ。〈吸血鬼症〉の罹患者であれば、一体を取り逃がしただけでもそこから人喰いの化け物が次々と増えていく。

「ふむ……なるほどね」

吸血鬼を山脈の一点に抑え込もうとする味方の配置と、まだらに点在する二十以上の×マーク。それは継戦が不可能になった、或いは大破した〈FG〉を示すものだ。

辺りは廃油をぶちまけたような黒々しい闇に包まれていた。傾斜と凹凸が激しく、木々が密集とした山中は〈FG〉にとって最適の戦場とは言い難い。アスファルトに比べ脆す

ぎる地面は確実に足元を取りにくる。

「お世辞にも善戦してるとは言えないな。けど、」

そんな状況下でも、吸血鬼を市域に逃すまいと抗い続けた出水市の行動予備隊は十分に健闘したと言えた。

紅音は静かに操縦桿の握り心地を確認する。次いで踏キックペダル板の跳ね返りや、推進器スラストの微細な角度を。そのまま、モニター上で孤立している吸血鬼の一体に狙い定めた。

「——あとは私に任せてよ」

〈刃血じんけつ〉の流れを脚部アクチュエーターに集約。それを脚力へと変換し、〈ハツキ〉が戦線へと躍り出た。

半円の弧を描きながらに飛来する〈ハツキ〉は、吸血鬼が空中に逃げることを許さない。関節同士の掠れ合う異音に振り返った吸血鬼の頭部を、その脚裏で踏みにじってみせた。

腐った果実を踏み潰してしまったかのような、不愉快な感触。その場から足を引き抜けば、赤黒い血肉が装甲べったりとこびり付く。

「まずは一体」

それでも紅音は表情の一つさえ変えない。両腰に備えられた二丁のハンドガンを引き抜き、〈ハツキ〉は素早くそれを構えた。

まだハンドガンには銃弾が込められていない。その代わり、紅音は闇に広がった虚空へと狙いを定め、立て続けにトリガーを引いた。

当然ながら宙を舞うのは空砲である。全くの無意味。ただ二丁の銃声が、遠吠えのように木々の隙間を反響するだけに思われた。

「ワォーン！ ……なんちゃって」

だが、それも違う。吠える銃声に周囲の吸血鬼が反応したのだ。

紅音は自らの五感と機体のセンサーが観測した情報を頼りに、接敵のタイミングを押し測る。

「ざっと、二〇秒かな？」

ハンドガンに弾倉を挿し込み、乾いた唇を舌先でそっとなぞる。そうすれば、ついさっきの自分がやったように木々の隙間の闇から吸血鬼たちが飛び出してきた。

血走る怪物の瞳は、鉄の装甲の内側を流れる〈刃血〉を求めて。

大きく羽を広げ、舞い踊りながらに鋭い牙を突き立てる。

「ふふん♪」

紅音はキックペダルを蹴って、それを避わした。最小限の動きと、最小限の〈刃血〉消費でだ。

牙は（ハツキ）の脆弱な装甲に僅かながらになぞるも、火花を散らしながらに勢い付いた巨体を御しきれず転倒。起きあがろうとするそこへ、ぽっかりと穴の開いた二門が突き付けられた。

発砲。ハンドガンによるゼロ距離射撃は、吸血鬼に再生の暇を与えることもなく、その内側を食い破る。

「これで二体……けど、機体の反応がちょっと遅いかも。帰ったらエノン先生に調整してもらわなきゃ……」

同類が一方的に葬られようと吸血鬼は次々に彼女の元へと襲い来る。そこへ向けて、
本当の狂犬^{紅音}の銃声^{みたび}が三度吼えた。



鋼太郎^{こうたろう}はただ、彼女の戦い方に驚愕させられた。

まるでダンスのステップを刻むように。急静動を繰り返しながらも、ほとんど一方的に吸血鬼を葬っていく紅音と、彼女の駆る紅と白の攪拌した（ハツキ）のシルエットはあまりに異様なものであった。

「何だよ、アイツは……」

カメラアイを暗視モードに。さらに捉えた暗闇がAIによって補正されることで、その躍動をよりハッキリと目撃することになる。

ほとんどのパイロットは（FG）の主兵装として、汎用性に長けた突撃機銃^{アサルトライフル}を選ぶ。鋼太郎のようにブレードを選ぶパイロットは異端者とも言えた。

二丁のハンドガンを携える紅音もまた一人の異端者である。しかも、その立ち回りは一定の間合いを保ちながら弾数によって応戦する銃撃手^{ガンシンガー}のそれではない。相手の懐へと飛び込み、或いは敵をいなしながらに、渾身の一撃を狙う拳闘士^{ファイター}そのものだ。

ハンドガンは取り回しに長けるも、威力に欠ける試作兵装。その欠点を補うべく、距離を詰めているという理屈こそ理解できた。

しかし、その戦略を思い付いたとしたも、実行に移せるパイロットがどれだけいるのだ

ろうか？

モニター上からは次々と吸血鬼を示す反応が消えていく。銃声に惹かれては、彼女によって屠られていくのだ。空になった弾倉を吐き捨てては、次弾を装填。また迫り来る吸血鬼を密着した銃口から放たれる〈聖塵〉製の弾丸が食い破っていく。

だが、鋼太郎はモニターに映り込む〈ハツキ〉を見ながらに一つの違和感を抱いた。吸血鬼の動きがあまりに直線的過ぎるのだ。

銃声に反応していたとしても、その足元には無数の死骸が転がされている。

確かに下級の吸血鬼には理性がない。だが、あれだけ死の気配を前にしては生物としての本能が近づくことを阻むはず。

「まさか、あの弾ッ！」

鋼太郎は吸血鬼の拳動が、ハンドガンを射線上をなぞっていることに気付いた。

彼女のハンドガンに装填される弾丸は、〈ケロベロス小隊〉の技術顧問エノン・ブラウンによって提案と試作が成された特殊弾頭だ。

弾芯を形作るのは当然ながら、磁場によって吸血鬼の運動能力を著しく阻害する〈聖

塵〉である。通常の対吸血鬼弾と異なるのは、その弾芯を覆うこととなる被服^{メタルジャケット}。そこ

には彼女自身の〈刃血〉が織り交ぜられていた。

ハンドガンから撃ち出された弾は紅く煌めく。

射線上で仄かに香るのは硝煙と〈刃血〉の匂いだ。吸血鬼の五感は人間を大きく上回る。そして微かな血の匂いも嗅ぎ分け、抗えぬ本能のままそれを貪ろうとする。

紅音と鋼太郎。二人の自らの血を使い吸血鬼の本能を逆手に取ろうとするプロセス自体

は似通っていた。だが紅音の方がよほど合理的かつ理性的で、それでいて直感^{センス}と独創性^{オリジナリティ}に溢れていた。

『これで二〇体』

不意に通信が拾い上げたその声に、思わずゾツとした。わずか数分で敵の半数以上を喰ったのだ。

通信越しの紅音は息一つ切らさない。まるで呼吸そのものを忘れてるように。

「あれが“本当の狂犬”なのか……」

鋼太郎は思い出す。シミュレーターで圧倒的なスコアを叩き出し、自分よりも早くパイロットの資格を勝ち得た同期の少女がいたことを。

〈ケロベロス小隊〉隊長・天璋院紅音^{てんしょういん}二等陸。彼女は己の持てる才覚の全てを戦うこと

に集約させていた。

ただ死にたがるだけでは「狂気」と呼ばない。形振りを構わずに戦うだけでは、「狂気」と呼ぶに程遠い。

合理性も理性も。センスもオリジナリティさえも。その全てを目の前の敵を葬ることだけに費やし、戦うこと以外を思考から排斥した彼女こそ、ただ目の前の獲物に喰らい付くうとする「狂犬」と呼ぶに相応しい。

09

これで二五体目。紅音^{あかね}は残るハンドガン弾数と〈ハツキ〉を巡る血液残量に目をやった。

〈刃血〉^{じんけつ}を織り交ぜた特殊弾頭は予備の弾倉を含め十発を下回ったのに対して、血液の消費量はごく僅かに押さえられている。

「残るターゲットはたった五体か」

ほんの一瞬だけ、気が緩んだ。

いけない。戦うことに集中しなければ。今の私は〈ケロベロス小隊〉の隊長なのだから。

「……しつかりしろ、天璋院紅音^{てんしょういん}。……こんなんじゃ、隊長みたいになれないぞ」

彼女が操縦桿を掴み直すと同時に、コックピット内をアラートが包んだ。

眼前へ現れたのは、その全身を異様に肥大化させた吸血鬼だ。

「でっかいなあ」

並の吸血鬼が八メートル前後なのに対して、その個体は二十メートルを悠に超えていた。耳が殊更に肥大化しており、それが両腕の翼と合わせて四枚羽のようにも見える。

人であったはずの蝙蝠の怪物は、ついに蝙蝠という形からも外れてしまったのか。

紅音はこのモニター上で、この〈四枚羽〉が飛び出してきた方角を見やった。そこに表示されるのは複数の×マークだ。

「……味方の数も減ってる。……それにコイツの大き過ぎる体は」

その口元からは赤い鮮血がてらてらと滴っている。それだけでも大まかに事のあらましを察することができた。

吸血鬼は人間の生き血を吸って成長する。なかでも〈刃血〉を吸った吸血鬼は、その身体を二倍近くまで巨大化させた例が報告されていた。

「流石にアレに弾は通らないな」

ここまで成長してしまった吸血鬼には、仮にゼロ距離でトリガーを引いたとしても、分

厚い筋骨に弾を阻まれる。それどころか仄かに香る〈刃血〉の匂いが、この〈四枚羽〉をより興奮させてしまうリスクさえあった。

「さて、どうしよっかな」

キックペダルを蹴って加速。スラスターの噴射を一点に絞り、〈ハツキ〉は〈四枚羽〉の頭上にまで跳躍した。

「っと！」

肘を構えて、後方へ向けたハンドガンの引き金を引く。マズルフラッシュが爆ぜると共に、その利用した裏拳が〈四枚羽〉の顔面を捉えた。

頭蓋を押し潰す感触が操縦桿越しにも伝わる。カメラアイに付着した返り血が、モニター上には無駄に大きく表示された。

「チッ……画質修正」

吸血鬼の持つ再生能力は筋繊維の修復に長けている一方で、砕けた骨を繋ぎ合わせるのには時間が掛かる。砕かれた骨の隙間同士に、膨張した筋繊維が食い込み、上手く結合がなされないのだ。

四枚羽の顔は半分が陥没した。しかし、それだけでは仕留めるに至らない。

顔を潰されながらも〈ハツキ〉目掛けて、両腕を振り回し始めた。

「……！」

装甲の薄い〈ハツキ〉では受けきれない。紅音は機体を旋回。小刻みにスラスターを吹かせながらもスリップディングアウエーの要領で、迫る衝撃を彼方へと逃した。

軽やかな着地と同時に、彼女は頭の中で幾つかのシュミレーションを思い浮かべる。

「残弾……八。残る下級吸血鬼に一発ずつ弾を使うとして」

戦況や互いの状態を直感で思考へと当て嵌め、全てのリソースをただ目の前の敵を屠ることだけに集中する。

「スラスターの噴射角を再調整。……設置圧をマイナス二〇。照準修正……うん。余裕♪」

それはまるで、狂犬が牙を剥くかのようなだった。操縦桿のスイッチに指を掛け、ハンドガンのトリガーを引き絞ろうとした途端、

『——退いてろよ、狂犬ッ！』

割り込んだのは、ブレードを八相に構えた〈フミツキ〉だ。そのカメラアイは目の前の〈四枚羽〉を冷然と睨む。



迫る牙を〈フミツキ〉のブレードが受け止めた。

「このッ！」

脆い山中の足場では充分にロクに踏ん張りも聞かなかった。肥大化した吸血鬼の重量を押し付けられて、機体はジリジリと後退を余儀なくされる。

「こんな化け物に喰われるくらいならッ！」

リミッターの一部を解除。機体を巡る〈刃血〉の流れを両腕部アクチュエータへと集中。

「〈フミツキ〉^前に俺の血をくれてやるッ！」

動脈深くに突き刺さったチューブが鋼太郎の鮮血を啜った。機体が低い唸り声を上げて、〈四枚羽〉を力任せに押し返す。

『ウソっ!? 鋼太郎くん!?!』

聞こえて来たのは、紅音の素っ頓狂な声だ。まさかこのタイミングで自分が乱入してくるとは予想していなかったのだろう。

鋼太郎は少し勝ち誇ったように、ニツと犬歯を覗かせる。

「俺もアンタに学ばせて貰ったよ」

彼女の戦い方は存分に見せて貰った。本当の「狂気」とは何かを。持てる全てを戦いに費やした「狂犬」とは何かを——

「俺はどんな手段を使っても東京に帰るんだ。それがアンタの戦い方を真似させて貰うことでもなッ！」

〈フミツキ〉が刃を逆手に構える。それを手首の関節部へと当てて、浅く引いた。

「さあ、餌だぞ」

ブレードには〈刃血〉が付着している。それを勢いよく振るえば、血の滴が辺りの木々に飛び散った。

鋼太郎はすぐに機体の出血箇所より、少し上の辺りをもう片方の腕で握り締める。人間で言う「止血」の要領で、フレーム内を巡る〈刃血〉の流れを止めた。

「あとは、」

そのまま〈フミツキ〉は木陰へと飛び込むと、エンジンの火を落とした。

『ああ、なるほどね』

紅音もそれで意図を察した。同じように木陰に飛び込み、息を押し殺す。

『私の血の弾丸のパクリか。ちよつとの血でも吸血鬼の意識を割くには十分だからね。刀身に滴たせさせた血を勢いで飛ばして、その隙に自分は隠れながらに体勢を立て直す。——

——これまでの戦い方よりも、無駄な〈刃血〉の消費も抑えられてるし……まあ、七〇点ってとこかな?』

「偉そうに採点すんなよッ! これでも色々と考えたんだからなッ!」

『それで、次はどうするの? 確かに吸血鬼の意識は私たちから逸れたけど、ここから、あの化物をどうやって殺すの?』

鋼太郎はコックピットの天蓋を押し上げて、静かに〈四枚羽〉の様子を伺う。

木々に付着した〈刃血〉僅か数滴。人工血液が多分に混ざったバツタものだと言うのに、〈四枚羽〉はそれを啜ろうと必死に木々へしがみ付いていた。

『わあ、なんかカブトムシみたい！ ほら、昨日ハチミツを塗っておいた木に虫が集まっているみたいな！』

「……思ったけど言うなよ……緊張が解けるからさ」

『隊の緊張を解すのも、隊長の役目だからね。それに一度味を締めた吸血鬼ほど、もっと濃い〈刃血〉を求めるようになるんだよ』

より強大に。

より強靱に。

それは生物として進化を追い求める本能と言えた。

「だったら尚更にアイツはここで楽にしてやらねえと……さっきも言ったが俺は手段を選ばない。それが例え、どれだけムカつくアンタの力を借りることもな。だから、助けてくれ。紅音“隊長”」

『……隊長ね。ふふ、そうなんだ。……それじゃあ、仕方ないなあ！』

今度は紅音の方が勝ち誇ったかのように笑った。

『いいよ。私が動きを合わせて上げるから、好きにやりなよ』

「だったら——」



〈四枚羽〉を挟み込むよう、前後に分かれた二機が飛び出す。

鋼太郎の振り上げる刃が、蒼白に煌めく。まるで狂犬が牙を剥いたように。

「行くぞッ！」

向き合う〈四枚羽〉もまた鋭い牙を突き立てた。先に喉元へ喰い付いた方が鮮血を浴びる。

鋼太郎の緊張は極限まで研ぎ澄まされていただろう。——それがこれまでの鋼太郎ならば。

「ハッ……本当の“狂犬”は俺じゃねえ。テメエの後ろだ」

狂犬は何度だって吠えた。

紅音のハンドガンが銃声を上げると共に、〈四枚羽〉の発達した両耳を食い千切る。

『そこなら弾も通るでしょ？ それじゃあ、あとはお好きにどうぞ』

鋼太郎は落ち着いていた。ただ冷静に目の前の敵を斬ることだけに意識を紡ぐ。

「——あばよ、バケモノ」

背後から両耳を撃ち抜かれた〈四枚羽〉は大きくバランスを崩していた。そこに叩きつけられる刃を防ぐ手段はない。弧を描いた銀閃は、目の前の吸血鬼を二つに切り伏せた。

10

——七月二十六日。午前五時三〇分。出水市・肥薩山脈へと襲来した三〇体の下級吸血鬼は、救援に駆け付けた正規小隊と〈ケロベロス小隊〉の活躍によって速やかに殲滅された。



コックピットの外は微かに白んでいた。そういえば時刻はちょうど陽が昇る時間帯だ、と鋼太郎は今更ながらに欠伸を噛み締める。

ふと目をやれば通信を求めるランプが点灯していた。向こうにいるのは当然、紅音だ。

『お疲れさま、鋼太郎くん。ケガはしなかった？ 気分とかは悪くない？』

「……アンタは俺をどれだけ馬鹿にすれば気が済むんだよ」

『むっ！ 誤解されたくないから言っとくけど、戦闘後の隊員の安否確認だって隊長の義務なんだから』

「それで何の用だよ？ 前はいきなり繋いできた癖に、今回はやけに律儀なもんだ」

『別に大した用事でもないからね。ただ、隊長として君に聞いてみたいことがあってさ——

——ねえ、鋼太郎くん。君はどうして、そこまでして東京に帰りたいと思うの？』

彼女はそんな質問を投げかけた。

『君の居場所は鹿児島じゃないってことはもう分かった。けどさ、君がどうして東京に拘めるのか、それをまだ聞いてなかったな——って』

「……別に面白い話でもないぞ。〈吸血鬼症〉の蔓延が広まった頃、親父たちはまだ

幼かった俺を、鹿児島親戚の元に預けたんだ」

『鹿児島疎開って奴だね』

鋼太郎は口を少し噤んでしまった。

「当時じゃ珍しくもない話だ。けど、その一週間後だったんだ。東京に最上級吸血鬼が現れたのは」

最上級吸血鬼——それは最初に〈吸血鬼症〉を患った「始まりの怪物」にして、現在は七体が確認された規格外の超巨大吸血鬼を区分するためのカテゴリーだ。

十年前。「暴食」のコードネームを冠した最上級吸血鬼〈グラトニー〉は英国に甚大な被害を与えた後に、東京へと飛来した。

〈グラトニー〉の血肉への渴望が満たされることはなく、目に映るもの全てを喰った。その食べ残しが下級吸血鬼へと転じ、間もなくして東京は地獄と化す。

都市は〈グラトニー〉によって引き潰され、そこに住まう人が化物へと成り果てたのだ。「吸血鬼に成り果てれば、身元を特定することも困難だ。俺の両親や友達はどうなったかも分からねえ。……ちゃんと人として死ねたのか、それとも今も化物として叩かれる時を待ってるのか……ただ、」

ただ、鋼太郎にとっての全ては東京あの街にある。

見知った情景も。大切だった人も。

その全てを置き去りに鋼太郎は逃げて、今日まで生き延びたのだ。

「だから俺は帰らなきゃいけないんだよ。……置き去りにしたものにケジメを付けるために」

鋼太郎の瞳が青白く燃ゆる。それがただのモニターの照り返しなのか、憎しみや後悔なのかは鋼太郎自身にしか分からない。

「アンタは俺に言ったな？ 居場所ってのは勝ち取るものだって」

『確かに言ったね』

「俺はどんなことをしてでも、〈グラトニー〉を倒して、居場所を奪い返す」

世界中に散らばった最上級吸血鬼の撃破例は未だ、一つたりとも報告されていない。〈FG〉のマシンスペックにも、パイロットを務める鋼太郎自身にも確かな限界がある。

自分がどれだけ無謀な願いを抱いていることを自覚しながらに、言葉が続けた。

「だから、これからもアンタには教えて貰いたいんだ。……例え、それが狂気と呼ばれるようなものでも。俺にはアンタの強さが必要なんだよ」

『そっか……なら、ひとまずはさ〈ケロベロス小隊〉が君の居場所ってことでどうかな？

これは受け売りなんだけどさ、戦う理由ってのはポジティブな方が良さらしいよ』

それに君は手段なんて選ばないだろ？ と紅音は続けた。

そんな得意げな彼女が何故だか、とても可笑しくて。

「ははっ、アンタはいつも唐突に訳のわかんねえことを言い出すな」

『それが〈ケロベロス小隊〉隊長にしてスーパー最年少エリート・紅音チャンだからね!』
彼女の声はパツと明るく、そして鮮やかに色付いた。
『ねえ、鋼太郎くん。君が皮肉や嫌味を抜きに笑ってくれたのはこれが初めてじゃないかな?』

鋼太郎はそこで初めて、自分の表情が解けていることに気づいた。
モニター画面に映り込んだ顔は穏やかなものだ。こんな顔が出来たのは何年ぶりだろうか。鋼太郎は小さく呟く。

「ありがとな、紅音隊長」

『ん? ノイズが混じってよく聞こえないんだけど ……あつ! もしかしてスーパー可愛い紅音チャンにハートを撃ち抜かれちゃったり?』

「は……?」

『ならしょうがないよねえ、好きな女の子の前じゃ声が出なくなっちゃってさあ!』

「んな訳ねえだろツ! 鹿児島オタクのバカ女ツ!」

恥ずかしさを誤魔化すように、紅音との通信を切り落とす。

まだ早朝だというのに、コックピットの中が異様に蒸し暑く感じるのは何故なのか? その答えを敢えて考えまいと、機体の空調を強めた。



「鹿児島オタクのバカ女って……随分、個性的な罵倒文句だな」

鹿児島オタクなのは認めよう。三度の飯より、かすたどんに奄美の鶏飯。一番好きな大河ドラマは「篤姫」と。地元大好き紅音チャンなのだ、自らに言い聞かせた。

「まっ……鋼太郎をイジるのもこのくらいにして」

それよりも彼女には気がかりなことがある。窮屈なコックピットシートから身体を少し浮かせ、ある人物へと通信を繋いだ。

「聞こえる、西郷さん?」

『ああ、聞こえているよ。君たち〈ケロベロス小隊〉の活躍は、僕もついさっき聞かせてもらったばかりだ。ご苦労だったね、紅音二等陸尉』

「はい、はい。そういうのは良いからさ、今回の吸血鬼の数って明らかにおかしいよね? それも出水市に現れるなんてさ」

県内に迷い込む下級吸血鬼のほとんどは防壁を越えたとしても、砲台の防衛システムに被弾し、そのまま飛び続けた挙句に、鹿児島市や垂水市たるみずといった県の中心部へと墜落する。

「私ね、吸血鬼と戦うときは絶対に空に逃さないようにしてるんだ。あのグライダー状の翼は一度飛翔されると、かなりの距離を稼がれるから」

「だからこそ、県内でも端の方に位置する出水市に吸血鬼が現れることは極めて不可解であった。」

「私にはさ、今回の一件で吸血鬼が飛来したというよりも、防壁に穴を開けられたように思えるの。それなら砲撃システムを掻い潜れたことにも出水市に現れたことも納得できる」

『はあ……相変わらず、君の勘の鋭さにはいつも驚かされるよ。公式に発表するのは、まだ先になると思うが、君には先に伝えておこうか』

通信の向こうで隆月たかつきは少し溜息をついていた。

『〈ゲラトニー〉襲来から本土の生存圏をほとんど失うまで、鹿児島県が積極的に避難民を受け入れていたことは君も知っているね？』

「ウチにもそういう隊員が多いからね。当然知ってるけど」

『それと同時期に防壁の建造も行われたんだ。けれど避難民を受け入れる関係上、すぐに防壁で他県を阻むことはできなかった。主要な国道や、九州新幹線が防壁によって閉鎖されるのは随分とギリギリになってしまったんだ』

出水市は九州新幹線の通過ルートでもある。

ギリギリで封鎖工事を完了させたために、その周辺の防壁が他よりも脆くなっていることにも納得がいった。ただ、やはり解せない。

「いくら手抜き工事と言っても、防壁は鉄板とコンクリートを何層にも重ね合わせて、さらに〈聖塵〉も混ぜて作られてるんだよ。その辺りがいくら他より王策脆くても、吸血鬼の巨体を通れるほどの大穴を開けるには相応の時間も掛かる。……ていうか、西郷さんなら絶対に気付いて対処してるはずだよな？」

『ああ、僕だって防げる被害なら、事が起こる前に対処したさ。ただ、今回はそれが間に合わなかったんだ』

隆月が一枚の画像データを〈ハツキ〉へと転送する。探査ドローンによって撮影されたものであるう防壁の画像には、ひとつの大穴が開けられていた。

「……なにこれ？」

紅音が眉を顰める。

そこにあつた穴は力任せに掘り進めたというよりも、何か熱によって溶け落ちたようなものだった。

コンクリートは焼き焦げ、内に仕込まれた鉄板はドロドロに融解されている。

『まるでSF映画に出てくるレーザー兵器で焼かれたようになってるだろう。壁の内側に仕込まれている警報システムまでも焼き切られてしまったから、発見が遅れたんだ』

「冗談でしょ？ 理性を失った化物たちがレーザーを作れるのなら、エノン先生はとっくにタイムマシンを発明してるんだから」

『確かに並の下級吸血鬼ならそうだ。ただ、上級吸血鬼の仕業ならだろうか？』

「それは、」

紅音はしばし思案する。規格外の存在である最上級吸血鬼には及ばずとも、単体で十分な脅威を齎す上級吸血鬼なら、或いは――

『〈サツマハヤト〉のしばらくの方針としては、この大穴を開けたと思われる上級吸血鬼を特定し、速やかに殲滅することになる』

隆月はその意地に賭けてでも、吸血鬼たちに遅れをとるわけには行かなかった。通信越しにでも、その覚悟と気迫は十分に伝わる。

『ひいては、君たち〈ケロベロス小隊〉にも調査のために熊本や宮崎へと遠征に出むいて貰うことになるだろう。そこで明日には、』

「げえっ……どうせ、事前の作戦会議やら何やらにも、私も出席しろって言うんでしょ？」

紅音は心底面倒臭いと言いたげに返した。

「西郷さん。〈ケロベロス小隊〉は新しい兵器をテストするための実験部隊だよ。増して隊長の私は“狂犬”だ。殺すべき敵は殺すけど、難しい作戦を考えたり、他の隊の隊長と議論を交わすのは得意じゃないの」

『そうは言ってもだな』

「とーにかーく、私はそういう面倒臭いには参加しないからね！ それに明日の予定だってもう決まってるんだから！」

向こうから、さらに一際大きなため息が聞こえた。

紅音が無茶を言うたび、隆月はいつもこうやって頭を抱える。鋼太郎の噂を聞きつけ、隊に欲しがった時もそうだった。

『……一応、僕は君の上官でもあるんだけど？』

「私のとこの隊員も階級差とか無視してタメ口だし。それに私と西郷さんの仲じゃん」

『それなら、せめて君の用事を聞かせてくれ。その用事が果たして、大事な作戦会議を蔑ろにするほどのものなのかを教えて貰いたいんだ』

「別に良いけどさ。実はね――」

11

八月二日 午前十時三〇分

〈ケロベロス小隊〉隊舎

「止まらたまえ、鋼太郎くん。ここであつたがなんとやらだ。紅音隊長と良好な関係を築くのもいいが、私のことも忘れないでくれよ」

ガレージの前を通り掛けに鋼太郎は、やけに上機嫌なエノンに捕まってしまった。
〈ケロベロス〉小隊に訪れてからは、既に一週間が過ぎようとしていた。それなりに本部基地での生活にも慣れて、今朝も早々に午前の訓練プログラムをこなした後。隊舎へ戻ろうとしているところで、ホクホク顔の彼女に呼び止められたわけだが……

「その異様なテンション……まさか今日は朝っぱらから飲んでるんじゃない……」

「おいおい、人の機嫌がちよっといいからって、そうやってすぐに飲酒を疑うのは止めてくれないか。私だって人並には傷付くんぞ」

「なら少しは日頃の言動を省みたらどうか？」

「うぬぬ……ぐうの音もでないとはこのことか」

エノンがサングラス越しにこちらをジッと睨む。

彼女の背後。奥のガレージの暗がりです静かに鎮座するのは、整備のために装甲を引き剥がされた〈フミツキ〉と〈ハツキ〉だ。

二機のフレームを構成するパーツには多くの共通点が見られる一方で、〈フミツキ〉の改修機カスタムモデルに当たる〈ハツキ〉にはより高出力のジェネレーターを搭載している点が目立つ。47

二丁拳銃を構えながらに近接戦闘を行うという、一見矛盾したような紅音のスタイルを支えるのもこれらのパーツ群である一方、過剰なまでの性能の追求はかえって機体の出力バランスを崩す要因にもなり得ていた。例えるならば、自動車にジェット機のエンジンを組み込むようなものだ。

だからこそ、そんな欠陥機を手脚のように操ってみせる紅音の異常性もより際立った。

彼女の強さはハッキリ言ってイカれているのだ。たった一人で戦場を掻き回し、最後には覆してしまう存在など異分子イレギュラーと言う他ない。

恐らく並の部隊では彼女の強さを持って余ってしまうだろう。

いつだったか、西郷隆月さいごうたかつきが「手段を選んでいらないのはボくらだって同じ」だと口にしていたことを思い出す。〈ケロベロス小隊〉はそんな彼女が実力を最大限に発揮するため設備や人材を整えた部隊でもあるのだろう。

では、その小隊の一員に相応しい強さが自分にはあるのか？

その疑問に鋼太郎はまだ頷くことが出来なかった。

「それで？ 先生はどうして、そんなにハイテンションなんだよ？」

「ふっふふ、私の後ろの〈FG〉たちを、もっとよく観察してみろ」
そう言われて鋼太郎もすこし目を凝らす。

〈フミツキ〉と〈ハツキ〉。その両機のコックピットからは何やらコード類が伸びていて、エノンのPCに繋がれていた。画面上には「データ解析中」ともある。

「先日の肥薩山脈での戦闘データを引き上げてるのか？」

「そうさ。遠征任務以外であれだけの数の吸血鬼とやり合うことも滅多にないからね」

エノンの金髪からは寝癖が跳ねていた。きつと、休息も忘れてデータの解析作業に没頭していたのだろう。

「特に鋼太郎くんの〈フミツキ〉からは良いデータを取ることが出来たよ」

「俺から？ ……紅音隊長の〈ハツキ〉じゃなくて？」

先日的一件でほとんどの吸血鬼を殲滅したのは紅音だ。〈ハツキ〉の兵装は二丁のハン
ドガンと殊更に珍しく、〈刃血〉じんけつを織り交ぜた特殊弾頭まで使用する。

その一方で鋼太郎は新しい戦い方のヒントを得ながらも、ほとんど活躍の場を彼女に持
っていかれたのだ。機体に蓄積された戦闘データだって彼女の半分に及ばないはず。

「はあ……これだからダメダメ素人な鋼太郎くんは」

「どうでも良いけど、ダメダメは言い過ぎだろ……」

「いいかい？ 私は〈ハツキ〉の戦闘データを嫌というほど見てきたんだ。〈サツマハヤ
ト〉オブレインシステムで採用されている戦闘 O S だって、元はあの娘の戦闘データを参照して、私

が組み上げたくらいなんだから」

しれっとエノンが凄いいことを言う。

要はそれだけ紅音の戦闘データを見飽きたということだ。だからこそ技術者視点の彼女
には、新たに〈ケロベロス小隊〉へと加わった鋼太郎のデータの方が新鮮に映るのだろう。
「紅音隊長の無茶苦茶な戦闘に追従できるパイロットなんて、正規隊員にも殆どいないん
だ。それに君は思い切りが良い。迷いを切り捨てるのが早いと言えば良いのかな？」

東京育ちながらも、父に示現流を教わっていたのが要因だろうか。身体に染みついた剣
術のノウハウは、操縦のクセとして〈FG〉にも反映される。

示現流は初太刀に全て込め、一撃のもとに敵を斬り伏せるという剛剣だ。その精神性が
鋼太郎の在り方にも直結しているのだろう。

「けど、確か〈ケロベロス小隊〉にはもう一人のメンバーがいるんだろ？ その人の方が
俺より先輩なんだし、紅音隊長の無茶にも付いて行けるんじゃないか？」

「ああ、彼女か。……彼女かあ」

エノンの表情がずんと曇った。ため息混じりに彼女は答える。

「彼女の機体もまたちょっと特殊だからね。君も時間があれば戦闘記録を見てみるといい。新しい兵装のテストにも積極的だし、悪い子じゃないんだけどな。——彼女もなかなかの変人だから」

彼女が白衣から差し出したのはUSBメモリだ。日本語ペラペラ、お酒大好きアメリカ人のエノンに「変人」と言わしめる隊員がどんな人物なのか？ 考えるだけで、また頭痛がしてきた。

「ま……まあ、気が向いたら」

「よろしい。それで少し本題から少し逸れてしまったが、君にはコレを見て欲しいんだ」
次いでエノンが差し出したのは、一冊のスケッチブックだった。

「まだロクな図面も引けてないんだけどね、気に入ったものがあれば教えて欲しいんだ」
彼女に促されるままページを捲れば、その中には新たな兵装やそれに伴う〈フミツキ〉の改修案が、描き殴られては綴られていた。

兵装の増設やセンサー類の強化。近接特化の為の脚部見直しから、追加装甲のプランまで。そのどれもが機体のスペックを、鋼太郎の戦闘スタイルに合わせて、大きく向上させるものである。

「はあ……やっぱりアンタは凄い人だよ。どれも使えるようなアイデアばかりだ」

「それは光栄だね。ところで、呼び止めた私が言うのも難だけどさ。君はこんなところで油を売ってても良いのかい？」

今日の訓練は午前中で終わる。今日の鋼太郎には特別な用事もなかったはずだ。心当たりがないか脳内を検索するも、空振りに終わる。

それでもエノンは、まるでたった今思い出したかのように首を傾げた。

「——だって君は今日、紅音隊長とデートに出かけるんだろう？」

12

午後二時三〇分

中央駅・アミュープラザ鹿児島

「あっ、鋼太郎くん！ もう遅いよ、今日の一時にアミュープラザの広場で待ち合わせて、そういう約束でしょ！」

そんな約束は聞いていない。

慌てて高速バスに飛び乗ってきた鋼太郎は、人工芝の上でこちらへと手を振る紅音^{あかね}を恨めしそうに睨んだ。

「……いや、そんな約束をした覚えは」

「だいたいさ、何で隊服のままなの？ 今日デートなんだよ」

「……いや、だから、そんな約束をした覚えは」

「はあー、これだから鋼太郎くんは。けど、今日の私はスーパー最年少エリートじゃなくて、スーパー美少女紅音ちゃんだからね。美少女らしい寛大な心で許して上げる♪」

「だからッ、そんな約束をした覚えはないって言ってんだろッ！ 少しは話を聞けよッ！ このアホ女がッ！」

怒鳴る鋼太郎へと、周りの白々しい視線が注がれる。

〈サツマハヤト〉の隊服を着た鋼太郎と私服姿の紅音。二人の様子だけを端から見れば、軍人が一般人を恫喝していると勘違いされたっておかしくはない。

堅苦しい表情の鋼太郎に対して、紅音の容姿が可憐なせいで、周囲へ与える誤解はより深いものになる。刺すような視線はあまりに痛かった。

鋼太郎は一度胸を撫で下ろし冷静になる。そして冷静になった上で白い目を向けられる原因にもなった彼女を、キツク睨みつけた。

「……頼むから説明をしてくれ鹿兎島女。……一から十まで全部わかるように」

「説明も何も簡単なことだよ。私が君とデートをしたいと思った。だから今日の一時に待ち合わせの予定を立てて、それを君には伝えなかった」

途中まではまだ辛うじて理解できた。……いや、殆ど理解が追いついていないのだが、最後の一言だけは絶対におかしい。

「だから、何でその約束を俺に知らせないんだッ！」

「だって、私が素直に君を誘っても『別に行かなくても良いだろ』とか『何でアンタと出かける必要があるんだ』とか。そんな風に無愛想な理由を付けて断るんでしょ？ だってらいつそ予定を伝えず強行してやろうかと」

紅音から見れば、鋼太郎もまだまだマトモな常識人だ。彼女が奇天烈な行動を取れば、判断力は鈍り、結果として振り回されてしまう。

思い返せば、エノンがデートの件を思い出すタイミングも都合が良すぎたように思えた。初めから二人はグルで、鋼太郎をここまで誘導できればあとは何だって良かったのだ。

「だとしても強行が過ぎるだろッ！ ……大体、よりにもよって何でデートなんだよ？ 別に俺たちは付き合ってるわけでもあるまいし」

「別にそれでもいいんじゃないかな？ 確かに、鋼太郎くんと私の関係は部下と隊長だよ。けどさ、例えば部下と隊長の関係でも、楽しく二人でお出かけして、美味しいものを食べて、

有意義な時間を過ごす。これはデートと言ってもいいんじゃないかな？」

紅音が悪戯っぽニヤけて、そしてワザとらしく小首を傾げる。

(……ああ、この女はまた俺をからかってやがるな)

私服姿の彼女はカジュアルに纏められていた。

ジーンズ生地の上着とパンツに赤のカーディガン。いつもは一括りに纏めているポニーテールも、今日だけはロングになびかせていた。

いつもの可愛げがない隊服とは違う。少女らしい紅音の姿から、鋼太郎は視線を外した。「可愛い？」と言いたげな彼女の思惑通りになっていることが悔しくて、それでいて妙に気恥ずかしいのだ。

「とか言って、本当は可愛い服を着たり、美味しいものを食べる大義名分が欲しいだけなんだろう？」

「げっ……なんでバレてるの」

額には青筋が浮いた。指を一本ずつ懇切丁寧に折りたたみ、拳を握る。

「ヨシ、歯を食いしばれ。隊長だとか関係なしに泣かせてやる」

「待って！ 待って！ 他にもちゃんと理由はあるから！」

紅音は肥薩山脈での功績を認められ、〈サツマハヤト〉から勲章を授かっていた。曰く、そのお祝いに付き合っただけのことだ。

戦果を上げたものには相応の報酬を支払う。領地や食料、或いは金品と時代によって報酬は変化しても、その考え方自体は変わらない。

ただ資源が限られたこの現状では、与えられる報酬も小さなバッジと肩書きだけに限られてしまった。

現に〈サツマハヤト〉のなかで勲章持ちというのはさほど珍しくもない。問題児として知られた鋼太郎でさえ、幾つかの勲章は持っているのだ。

——では、紅音は一体何のために戦っているのか？

そんな疑問が思考の隅をよぎった。

「どうしたの、急に難しい顔して？」

丸っこい瞳が鋼太郎を間近に覗き込む。唇が触れ合うかどうかの距離に、思わず後ずさってしまった。

「あっ！ もしかして口ではツンツンしながらも、本当は私服な紅音ちゃんに惚れちゃったり？」

「そんなわけねえだろ！ 大体、人が考えて事をする時にいきなり話しかけてくんじゃ

ねえッ！」

13

アミュプラザから天文館本通りのアーケードまでおよそ二十分程度。バスや市電に乗る方が早いのだが、紅音あかねはそれを使おうとしなかった。

「せっかくのデートなんだから、歩いた方が楽しいじゃん」とのことらしいが。

天文館は県内最大の繁華・歓楽街だ。カラー舗装された網目状の通りには、昔ながらのおもちゃ屋から洒落たブティックまで様々な店が立ち並ぶ。

多くの飲食店が凌ぎを削りあっているのも特徴の一つで、昼夜を問わず多くの人が賑わうこの一帯が、静けさに包まれるなんてことは、まずあり得ないのだろう。

「ところでさ！ どうして天文館の通りはアーケードの屋根に覆われてるか、鋼太郎こうたろうくんは知ってるかな？」

通りがけに購入したかすたどんを食べ歩きながらに、彼女が問いを投げかけてきた。

「どうしてって……雨や雪を気にしなくていいようじゃないのか？」

鋼太郎は少し眉間に皺を寄せながら答えた。

そもそも日本のアーケード街とは、天気を気にせず買い物ができるよう、商店街の歩道を屋根で覆ったものを指すのだ。

「うーん、惜しいなあ。回答にまだまだ鹿児島愛が足りてないね。ほら鹿児島といえば、特有のアレがあるじゃん！ 私たちも普段使ってるアレが！」

鹿児島特有で普段使うアレ。そう言われて鋼太郎もピンと来た。

「〈聖塵せいじん〉いや、この場合は素直に火山灰って答えた方がいいのか」

今日も桜島は噴煙の柱を上げていた。アーケード街の屋根が降り注ぐ火山灰から商品を汚さないように守っているというのは、確かに鹿児島ならではの理由だ。

「正解！ それでは正解者の鋼太郎くんには、ご褒美にかすたどんをプレゼント！」

「……いや、別にいらねえんだけど」

今は甘いものを口にする気分でもない。またも好物を阻まれた彼女はクリームを口元につけたまま、表情を驚愕に固めていた。

「なっ……そ、それじゃあ！一緒に一緒に買っておいた焼きドーナツは？」

「それもいらない」

「ぐぬぬっ！ならば、美老園の煎茶や抹茶を使ったスイーツ類ならどうだ！」

ここまで来れば、鋼太郎も詰まらない意地を張るつもりはない。ただ、何の偶然か盛り付けられたフルーツの配置がちょうど小熊の顔のように見えてしまったのだ。

輪切りにされたバナナが両耳、蜜柑が口で鼻はさくらんぼ。目の位置にはちょうど小豆が二つ分。これを崩してしまうのは、どうにも忍びない。

「なんなら、このスーパーム少女紅音チャンが食べさせて上げよったか？ ほら、あーん」
紅音がスプーンの手で一口分を掬い上げ、鋼太郎へと差し出す。

ワザとらしく自分の唇に指を添えているのは、「間接キスだね♪」とでも言いたいのか。

「あーもう！ 食べば良いんだろ、食べばッ！」
差し出されたスプーンを無視して、自分の分を頬張る。崩れてしまった小熊の表情に思

いを馳せるのも、束の間。口の中に広がるのはさっぱりとした甘さだ。
「……コンビニに売ってたカップアイスの方なら食ったことがあるけど……これは少し口当たりが違うな」

「でしょ！ 甘い練乳が口の中で溶けた練乳と程よく混ざり合う瞬間は、店じゃなきや味わえないんだから！」

紅音の表情がまた緩んだ。何故だか誇らしげで、それでいて嬉しそうにはにかんでいる。思えば彼女は笑顔を絶やしたことがない。愉快なほど表情をコロコロと変える彼女だが、その口元はいつだって薄っすらと吊り上げられていた。——それは例え戦場に身を投

じた時でさえ。〃狂犬〃が牙を剥くように、天璋院紅音てんしょういんあかねは嗤うのだ。

「それで？」

「ん……なにかな？」

鋼太郎は大量のフルーツトッピングと格闘を繰り返す、彼女へと目をやった。

「とぼけるなよ。わざわざデートなんて思ってもないことを理由にしてまで、どうして俺をここに誘ったんだ？」

勳章を貰ったお祝いに、食べ歩きをしたいのならば一人ですれば良い。

そもそも彼女ほどの能力と才能があれば、貰ってきた勳章だって数え切れないはずだ。それを今更祝うとも思えない。

「うーん、そんな大した理由でもないんだけどなあ。……例えば、鋼太郎くんにも好きなアニメとか漫画とか、とにかく何だって良いけど、好きな物くらいあるでしょ？ そしたら、皆にもそれを好きになって貰いたいと思わない？」

「まあ、そのくらいなら、」

「それとほとんど同じような感覚だよ。私は鹿兒島こさが好きだから、君にも鹿兒島こさを好きになって貰いたい。これが理由じゃダメかな？」

「……ダメではないと思うが。……それなら疑問がまた一つ増えたな」

「あのさ、もしかしてたけど、これは自意識過剰とかじゃなくて。……鋼太郎くんって結構私に興味があるの？」

彼女にしては珍しく、頬を赤ながらに鋼太郎から目を逸らした。

興味がないと言えば嘘になる。その異常とも言える強さにも、掴み所のない人柄にも。彼女は何かもが自分とは違うのだから。

何より、大切だった居場所を失った鋼太郎と、今も大好きな居場所にいる彼女は対照的な位置に立っていた。

「俺には分からないんだよ。アンタにはちゃんと居場所がある。貰えるのだからチンケな勲章くらいだ。それなのにアンタはどうして戦うんだ？」

紅音にとって強さを維持するためのモチベーション。

それが何なのかを鋼太郎は問いたです。

「私は鋼太郎くんほど難しくものを考えないし、上手く自分のうちにある感情を言葉にできる自信もない。ただ強いていうなら、ここが借り物の居場所……だからかな？」

「借り物だと？」

彼女は少し困ったように答える。

「ほら。人から借りたものを壊したり汚したりは出来ないでしょ。それと同じだよ」

そう言われても、鋼太郎には肝心な部分が多からなかった。敢えて根幹となる部分を言葉で濁されたようにも聞こえてしまう。

「なら、アンタは」

「ねえ、鋼太郎くん」

彼女がそっとスプーンを置いた。少しの金属音。それでも異様に研ぎ澄まされた迫力は、十分に鋼太郎の言葉を遮った。

「ここからはちょっと、スーパー美少女の紅音ちゃんじゃなくて、スーパー最年少エリート
の紅音ちゃんとして話そっか」

先日の肥薩山脈での戦い。あの数の吸血鬼を鹿児島に招き入れた上級吸血鬼がいるかもしれない。〈サツマハヤト〉では近いうちに、その上級吸血鬼を探しだし、殲滅するため遠征任務が実施されるであろうことと、その遠征任務に他ならぬ〈ケロボロス小隊〉も抜擢されるであろうことを紅音は足早に説明した。

「防壁の外の吸血鬼たちは、鹿児島に迷い込んだ奴らとも決定的にレベルが違う。そこから得られる戦闘データは価値のあるものだし、何より皆が私の戦力に期待してくれるから」
紅音は一騎当千の戦力だ。

だが、自信に満ちた言葉とは裏腹に、彼女の態度はどこか他人事を貫いているようにも

思えた。

「まあ、何が言いたいかって言うとき。ちょっと面倒なことに巻き込まれそうってこと。

——だからさ、君と私で一つ約束をしておこうと思ったんだ」

小指を立てて、彼女が提案をする。

「……なんか、凄く死亡フラグっぽいと思うのは俺だけか？」

「死さえ乗り越える強さ。それもまた君の欲するものじゃないかな？」

うつすらと口の端を吊り上げて、楽しげに嗤う。

その言葉は紛れもなく〈ケロベロス小隊〉の隊長としてのものだ。

「はあ……隊長がそういうのなら。けど何を約束するんだよ？」

「簡単さ。次の任務が一段落ついたらさ、また今日みたいに楽しくデートをする。それだけの簡単な約束だよ」

14

八月九日 午後三時

出水市・肥薩山脈。防壁の周辺

鋼太郎たちの目の前に聳えるのは、コンクリートと鉄筋からなる重厚な壁。日本での

〈吸血鬼症〉の蔓延に際し、最後の生存圏たる鹿児島と他県を隔絶するように建造

された三〇メートルを超える防壁だ。

防壁には多くの〈サツマハヤト〉が集結していた。十二の正規小隊と〈ケロベロス小隊〉に加えて、彼らの〈FG〉と調査機材を積んだトレーラーが続々と到着する。

その目的は、以前に紅音が説明した通り。

「この壁に穴を開けたであろう上級吸血鬼の調査とその殲滅か、」

鋼太郎はカロリーメイトを齧りながらに、トレーラーの荷台へと横たわる紅音へと目を遣った。

いつも笑みを絶やさない彼女にしては珍しく、ムスツとした顔で眉根を寄せていた。

鋼太郎も含めた、多くの隊員が表情を強張らせる中、不貞腐れた態度を貫く彼女は周りからも一際には浮いている。

「ねえ、聞いてよ、鋼太郎くん」

「……」

「スーパー最年少エリートの紅音チャンがどうして不機嫌なのか聞いてってば！」

手足をバタバタとさせる紅音。彼女がどうしてここまで不機嫌なのか、鋼太郎にはおよその察しがついていた。

「どうせ少しの間でも鹿兒島を離れるのが嫌とか、そんなところだろ？」

「むう……そこまで分かっているなら、慰めてくれてもいいのに。頭を優しく撫でてさ」

「誰がするかよ。むしろアンタの気まぐれに付き合わされる俺の方が誰かに慰めてもらいたいくらいだよ」

「それなら隊長である私が！」

それは断固としてお断りする。乾いた口のなかをミネラルウォーターで潤すと、鋼太郎は改めて防壁の方へと視線を戻した。そこにあるのは膨大な熱によって溶かされたような痕跡と、直径八メートル程度の大穴だ。

「ほんと派手にやってくれたもんだよ。ところで鋼太郎くんは、上級吸血鬼の連中を見たことがあるんだっけ？」

「資料や記録で存在を知っている程度だ。つい、この間まで行動予備隊だった俺に、そんな大物と対峙する機会なんてねえよ」

「そっか。まあ、そうだよね」

紅音のような優秀な隊員には度々、遠征任務が課せられる。防壁の外へと駆り出して、下級吸血鬼の分布状況や環境の変化を調査するのだが、彼女にはその過程で上級吸血鬼とも遭遇した経験があった。

「大分で二回。佐賀と福岡でそれぞれ一回ずつ。まだ眷属化していない上級吸血鬼とは殺し合ったことがあるんだけどさ。そんな私に言わせれば、コレをやったヤツは上級吸血鬼って括りの中でもかなりの上澄みだと思うんだ。——上の上とでもいえば良いのかな？ 多分、そんなヤツと遭遇したのなら、私たちの半分は死ぬだろうね」

彼女の強さが異常というだけで、今回の遠征を共にする正規小隊の面々は精鋭ぞろいだ。吸血鬼との戦闘経験も、〈FG〉の操縦練度も鋼太郎を上回っているだろう。

そんな正規小隊ですら、上位吸血鬼を前にすれば半数が殺されるといえるのか。

質の悪い冗談と笑いたかったが、そう断言する紅音の顔は真顔そのものだった。

「驚いたよ。まさかアンタでも弱音を吐くことがあるなんて」

「もちろん、私は負けないよ。隊長として絶対に負けるわけにはいかないから……たださ、どうにも気が進まないんだよねえ」

「狂犬」の嗅覚とでも言えば良いのか。彼女はむず痒そうに鼻のあたりを擦った。

「——あつ、そういえば！」

彼女の表情がいつものニヤけ面に戻る。

わざとらしい態度と言い、おそらくはまた何か重要なことを故意に黙っていたのだろう。「今日はここで、もう一人の〈ケロベロス小隊〉のメンバーとも合流します！」

トレーラーの影から、タイミングを合わせたように一人の少女が現れた。栗毛色の髪をショートに切りそろえた小柄な女性隊員だ。

彼女はこちらへと歩み寄ると、瞳を細めながらに鋼太郎を睨んだ。

「紹介するね、彼女は帯刀小夏^{たてわきこなつ}。私に勝るとも劣らない優秀な隊員だよ」

そう紹介された小夏は表情の一つ変えないまま、やはりこちらを睨んでいる。

「え、えつと……よろしくいいのか……？」

困惑しながらも、鋼太郎は小夏へと手を差し出した。親睦を深めようと握手を求めただけで、他意はない。

だが、彼女はその手を弾いて、自らの拳をキツく固める。

「うぐツッ！」

あまりに唐突すぎてガードする余裕もなかった。彼女の打ち出す拳はそのまま、溝内へ突き刺さる。

「い、いきなり何すんだよッ！」

「フン。なんじゃ、この弱虫^{やっせんぼ}は？　ちっと殴っただけでギャーギャーと」

いや、明らかにちょっと殴った程度ではない。腰を入れて打った拳には、確かな捻りが加えられていた。

鋼太郎は顔を青くしながらも、それでもさつき食べたものを吐き戻さないよう必死に堪える。その隣で爆笑している紅音はムカつくが、一旦無視をすることにした。

「喧嘩なら買ってやるぞ、チビ女」

「ほう？　そりゃ面白いのう。まずは口の利き方から教えてやらんとな」

互いに睨み合う二人の間には、見えない火花が散っていた。

一触即発。次にどちらが手を出したっておかしくはない状況で、紅音がパン！　と手を打ち合わせる。

「はい、そこまで！　いくら鋼太郎くんが愛想のない不幸面だからって、いきなり殴るのはダメだよ、小夏ちゃん」

「オイ、誰が愛想のない不幸面だって……というか、俺はそんな理由で殴られたのかよ！」
苛立ちを隠せない鋼太郎の傍らで、小夏は次に紅音の方をジッと睨んだ。その表情は先ほどよりも険しい。

「久さ方ぶりじゃの、紅音隊長……」

「うん。久しぶりだね、小夏ちゃん。そんなに私の方を見つめてどうしたのかな？」
すると、彼女はいきなり紅音の胸元へと飛びついたのだ！ 隊服越しに顔をうずめて、
にんまりと頬を緩める。

「……んっ。久しぶりの紅音隊長の匂いじゃ」

「わっ！ 今、汗かいてるから。あんまり嗅がないでほしんだけど！」

「もう少し。もう少しだけ、隊長の甘酸っぱい香りを嗅がせて欲しいのじゃ」

そんな奇妙な様子を眺めて、鋼太郎はある違和感を抱く。

彼女が聞きなれない古風な鹿児島弁で喋るのも違和感の要因の一つだろう。ただそれ以上、
に紅音への接する態度が、どこかおかしいのだ。

先ほどまでの凶暴性も何処かに消え失せて、小夏の後ろには、本来はあるはずもない尻
尾をブンブンと振っているようにも思えた。



ふと鋼太郎が思い出したのは、エノンから渡されていた彼女に纏わる戦闘記録だ。

『——これは、ちょっと面倒なことになったなあ』

記録となる映像は〈ハツキ〉のカメラによって、紅音視点で撮られたものとなる。

吸血鬼の生態調査と、データ収集のため遠征へと駆り出した〈ケロボロス小隊〉は、下
級吸血鬼の大群と遭遇。そのまま他の遠征部隊から孤立し、戦闘を繰り返すことになっ
た。

鹿児島の外に潜む吸血鬼たちは、下級と言えども 〈聖塵〉によって発生する磁場の影

響を受けていない分、その動きも俊敏だ。ハンドガンの射線上から逃れかと思えば、一瞬
で間合いを詰めてくる。

時折カメラの脇に映りこむ何十もの死骸と、ばらまかれた空薬莖が、彼女がどれだけ長
い時間を戦ってきたかを物語る。

関節は擦り切れて、機体の中を巡る〈刃血〉も残るも僅かだった。

『あちゃ、流石にそろそろ弾切れか…… 〈ハツキ〉は長期戦になると、少しキツイんだよ
な……』

〈ハツキ〉は紅音が満足するだけの機動力を獲得するために、あらゆる要素を切り詰めた

機体だ。

重量増加の際たる要因になりうる装甲は当然のことながら、〈刃血〉や弾薬も最低限量しか積載されていない。

『ならば、私の出番みたいじゃのう!』

そこへ一機の〈FG〉が弾丸のような勢いで滑り込む。FG—ゼロフカー零肆〈ミナツキ〉

——小夏の駆る機体だ。

『私の紅音隊長に近寄るなよ。やつせんぼの下級吸血鬼がッ!』

〈ミナツキ〉は右腕で担いだ ライオットシールド 大 盾を斜に構え、紅音へと襲い掛かろうとする吸血鬼を強引に押し返した。

『ナイスアシストだよ、小夏ちゃん』

『えへへ……じゃなくて! それよりも、こいを使うて下さい!』

シールドの裏面に積載されるのは、人工血液を蓄えた簡易パックと予備の弾薬だ。

〈ミナツキ〉はそれらを素早く掴み取り、〈ハツキ〉へと投げ渡した。二機はそのままピタリと背を合わせ、辺りを取り囲む吸血鬼たちと対峙する。

小夏のシールドが吸血鬼たちを阻み、そこを紅音が撃ち抜く。両者間には互いに前衛と後衛としての確かな役割が成立していた。



「紅音隊長! 貴女の帯刀小夏はもう離れたりしもはんからな!」

「き、気持ちはいれしんだけどなあ……ちよつ、ちよつと鋼太郎くん! 私を助けてはくれないかな!」

〈ミナツキ〉はその型式からも分かる通り、〈フミツキ〉や〈ハツキ〉よりも一世代前の旧型機だ。

整備性や〈刃血〉のエネルギー変換効率も次世代機には一歩劣り、全身を覆う装甲も直線的かつ無骨で、粗が目立つ。

それでも小夏が〈ミナツキ〉を搭乗機に選んだのは、他ならぬ紅音の隣で戦うためなのだろう。

確かに〈ミナツキ〉のスペックは、どのスペックも他の機体に劣る。だが、ただ一点。重厚なフレームに秘められた馬力ならば、他の追隨を許さなかった。その馬鹿力で総重量が五トンにも及ぶシールドを取り回し、〈ハツキ〉の弱点たる装甲の薄さと継戦能力を補

う。彼女の機体は、紅音が最大限のパフォーマンスを發揮するためと言っても過言ではない。

「ねえ、鋼太郎くんってば！ 聞いているの!？」

久しぶりの再開にじゃれ合っている(?) 二人を見ながらに、鋼太郎はそれとなく帯刀小夏という人物を理解した。

階級は自分よりも一つ上の陸士長。紅音が認めるだけの操縦センスを持ちながら、彼女とそれ以外では接する態度もまるで違う。

紅音が〈ケロベロス小隊〉の「狂犬」だと言うのなら、小夏は主人のために全てを捧ぐ「忠犬」と評するのが相応しい。

15

八月九日 午後二三時

みなまたし なかおやまこうえん
水俣市・中尾山公園『跡地』

十二の正規小隊と〈ケロベロス小隊〉からなる遠征部隊は、防壁に開けられた大穴を潜って、熊本県へと踏み込んだ。部隊はそのまま、残された九州新幹線の線路を辿るように歩みを進め、仮設拠点を置くこととなる。

トレーラーで運んできた機材を広げ、テントを設置し終わる頃には、すっかり辺りは夜の闇に包まれていた。

吸血鬼は夜目が効く。個体差こそあれど、他の五感だって人間よりも優れている。だから下手に暗闇の中で動くのではなく、本格的な上級吸血鬼の搜索は明日の早朝から行うことが決まっていた。

既にほとんどの隊員は明日に備えて、早々と寝袋の中に包まっている。

こうたろう
鋼太郎も搜索範囲の地図を頭に叩き込んで、眠りにつこうとしていた。

「……」

瞳を伏せて、微睡へと身を委ねる。

寝袋に多少の狭苦しさを覚えるも、電子機器を所狭しと詰め込んだ〈FG〉のコックピットよりは数段マシだ。辺りは静けさに包まれて、いつ睡魔に吞まれたとしても、おかしくはない。

それなのに、なかなか寝むれないのはどうしてだろうか？

寝返りを打ちながらに考える。――熊本もまた、自分の居場所ではないと。

防壁を乗り越え、鹿児島の外に出れば何かが変わるかも思っていた。しかし、実際はそんなこともないらしい。強いて言うのなら、桜島の火山灰やその日の風向きを気にしなくてもいい程度だ。

「はあ……エノン先生に貰った資料にでも目を通すか」

このまま寝袋に包まっただけでも、眠れないことを悟った鋼太郎は上体を起こした。

すると、テントの向こうに人影があることに気付く。ほんの一瞬、警戒心が研ぎ澄まされるも、鋼太郎はその小さな背丈に見覚えがあった。

「まさか……」

他の隊員たちを起こさないよう、足音を潜めてテントから顔を出す。

そして、案の定と言うべきか。淡い月明かりに照らし出された、その小さな人影は帯刀

小夏のものだった。

「起きていたのね、島津鋼九郎」

「鋼九郎じゃなくて、鋼太郎な。……それで、こんな時間に何のようだよ？ 女性隊員用

テントはあっちの方だろ？」

彼女の瞳はまたも、鋼太郎をキツく睨みつけている。

会話らしい会話をしたのも、昼間のあれっつきり。以降の彼女はずっと紅音にべっとりだった。トレーラーの荷台では紅音の隣を陣取って、そこから離れようとしもない。

そんな小夏がどうして、このタイムミングに自分の元を訪ねてきたのだろうか？

彼女はおもむろに背を向けた、自らの背を指さした。

「あなたには見せておきたいものがあるの。だから、私に着いてきなさい」



中尾山公園はコスモスの華によって彩られる自然公園だった。しかし、それも人の手によって管理を成された状態でのこと。幾つかに区画化されたエリアは、無秩序に植物や木々が繁茂し、鬱蒼とした密林を作り出していた。

そんな植物の群れを掻き分けながらに、小夏は小さな体でズカズカと進んでいく。鋼太郎も置いていかないよう、彼女の背中を追いかけた。

「というか……アンタ。昼間は随分と古臭い鹿児島弁で喋ってたクセに、さっきは普通の

標準語を使ってたよな」

「紅音隊長の前じゃないからね。それとも何？ 文句でもあるの？」^{あかね}

「いや、文句って程でもねえけど……まさか、あの女の気を引くためだけに鹿児島弁で喋ってたのか？」

「そうだけど。ほら、コレ」

毅然と言い放って彼女は隊服のポケットから何かを取り出した。

「鹿児島観光ガイド・方言マスター編」とあるそれは、^{ツアンバイア・シンドローム}〈吸血鬼症〉が蔓延する以前の駅や空港に置いてあるような小冊子だった。

鹿児島弁というのは酷く難解であり、県民であっても田舎のお年寄り世代の方言が分からないという話はよく耳にする。太平洋戦争の最中には敵国からの盗聴を防ぐため、鹿児島弁を暗号代わりに使っていたなんて逸話も残っているくらいだ。

「……マジかよ、このチビ女」

彼女はそんな鹿児島弁をわざわざ覚えたのか。

旧世代の〈ミナツキ〉を愛機に選んだ理由といい、彼女が紅音へと向けるこだわりには、やはり異様なものがある。

「何よ？ それじゃあ、私も言わせてもらうけどさ。あんたの方こそ、その口の利き方はなんとかならないの？ 私は一応この隊の先輩なのよ」

階級が九つも離れている紅音も、兵器工学の権威であるエノンも、基本的には鋼太郎の不遜な態度を容認している。だから、いまさら口の利き方について咎められるのは少しの違和感があった。

いや、この点に関しては、あの二人が適當過ぎるだけかもしれない。〈サツマハヤト〉もまた〈FG〉を用いて吸血鬼を殲滅する一つの軍隊なのだから、小夏のように上下関係を重視するほうが自然なのだ。

もつとも彼女の紅音に対する接し方が、問題があるように思えたのだが。

「……じゃあ、改めまして小夏センパイ。……これでよろしいのでしょうか？」

「なんか、絶妙に舐められてるような気がしなくもないけど。まあ、今はそれでいいわよ」
紅音はそこで歩みを止めた。平坦な声のまま、彼女はこちらへと振り返る。

「それで。やっぱり貴方も聞きたいんでしょ？ 私がどうして、ここまで紅音隊長に拘るのかを」

それが気にならないと言えば嘘になる。ただ、鋼太郎なりに大まかな察しを付けることも出来た。

天璋院紅音^{てんしょういん}は掴み所のない人物だ。その大胆な態度にはどこか芝居がかっていて、それでいて内側には確かな狂気を秘めている。そんな彼女に誰かをここまで引き付ける要素があるとするならば、その紛いのない強さを置いて、他ならない。

「アンタも『狂犬』に魅せられたんですね。あの人^{隊長}には危うくも人を惹きつける、刃物のような魅力があるから」

「あら、言うまでもなく分かってるじゃないの」
小夏がくす、と笑った。

「私はね。ちょっと前まで、〈FG〉の操縦なら誰にも負けなれないと思ってたの。この小さな身体も、狭いコックピットで動くのにはちょうど良かったし。何より私の〈刃血〉^{じんけつ}は他の人よりも濃かったから」

〈FG〉を稼働させる要素でもある〈刃血〉には差異がある。同じ一滴であっても、その濃度によっては機体の動きの雲泥の差が生じた。

血液が〈聖塵〉^{せいじん}の発する磁場の影響を受け続けた結果として〈刃血〉は生まれる。ならば鹿児島人の血を引く人間同士でも、より長い期間を〈聖塵〉の蓄積した地域で過ごした人間の方が、より高濃度な〈刃血〉を内包するのだった。

「桜島で生まれ育った私は〈ケロベロス小隊〉に派遣されるまで、そのまま行動予備隊の一員として桜島にある〈サツマハヤト〉の基地を守ってたの」

彼女は〈刃血〉の濃さにだけでなく、類い稀なる〈FG〉の操縦のセンスを携えていた。特に重量のある武器を用いた戦闘のセンスは、群を抜いていたと言う。

「私にとつての強さとは、ある種の誇りだった。私たちが鹿児島を護ってるっていうプライドが、あの頃の私を支えてくれたから」

「……別にアンタの自慢話は聞いてないんですが」

「そういうつもりじゃないんだから黙って先輩の話聞きなさい。ぶっ叩くわよ」

「……………はい」

〈ケロベロス小隊〉に派遣されて、小夏はすぐに本物の『狂犬』というものを知ることとなった。実験部隊という異質な環境の中、殆ど装甲を纏わないような機体と二丁のハンドガンだけで戦場を駆け抜ける、その存在を――

「正直、私と同じくらい歳の女の子がアレに乗っているだなんて思えなかった。多分、私が同じ機体に乗ったとしても、あんな戦い方は出来ないと思う。」

その意見には鋼太郎も黙って同意した。〈FG〉を駆る紅音の躍動を初めて見たとき、

ほとんど同じ感想抱いたのだから。

「だから、ここまで隊長のことを慕うようになったんですか？」

「いいえ、それも違うわね……始めは嫉妬の方が強かったから。それでまた、実力の差を見せられて、自己嫌悪になったくらいよ」

小夏は自嘲気味に吐き捨てる。あの「狂犬」の強さは数日やそこらで追いつけるようなものではない。それを彼女は嫌というほど判らされた。

「私が隊長を慕う一番の理由はね——」

彼女は人差し指を指して、そのまま息を潜めるようにジェスチャーを送った。木陰へと身を潜めて、草木を掻き分けながらに向こう側を見るよう視線で促す。

そこにはある程度の開けた空間があった。その真ん中で一人の「狂犬」が軽やかに舞い踊る。

夜の闇と冷たさに身を溶かすよう、消音器付きの二丁拳銃を構えて、トリガーを引き絞る。

撃ち放たれたゴム弾は、吸血鬼に見立てた簡易的弾を弾いて、地に落ちた。

「……ハア、ハア。……まだ余裕なんだからッ」

呼吸の荒さで、それが彼女の強がりであることはすぐに分かった。それでも彼女は素早く次弾を装填し、次の的に狙いを定めた。

〈FG〉の操縦は、本人のセンスによって著しく左右される。それは二丁拳銃の扱いに当たって例外ではない。

彼女は密かに牙を研いでいたのだ。

「私の隊長はいまでも凄く強いのに、まだ強くなろうとしてる。そんな姿に私は焦がれて、彼女の隣で戦いたいと思ったの」

小夏は誇らしげにそう語った。——きつと、彼女の居場所は天璋院紅音の隣なのだろう。それが吸血鬼の跋扈する戦場であろうとも、奪われ廃墟と化した生存権であろうとも。〈ケロベロス小隊〉の「忠犬」たる彼女は主人にどこまでだって付き従う。

「つまり私が何を言いたかったっていうとね」

背丈では負けてしまう鋼太郎を見下そうと、何とか爪先を伸ばして、小夏がにんまりと勝ち誇った表情を浮かべた。

「そんなカッコいい一面を知る私の方が、隊長の隣にいるのにふさわしいの！ 大体、私の方が隊長と過ごした時間だって長いんだから。数日ちょっと隊長に構ってもらった後輩風情が調子に乗らないことね！」

「……もしかして。……わざわざアンタが俺をここまで連れて来た理由ってのは」

「ん？ 当然、紅音隊長に関する知識と、その想いで貴方にマウントを取るためだけど？」

鋼太郎は呆れて、言葉を失った。

そんなブレない「忠犬」の襟首を誰かがガッチリと掴む。

「おやおや小夏ちゃん、それに鋼太郎くんも。けど人の特訓の盗み見とは感心できないなあ」

二人が恐る恐るに振り返れば、そこには悪戯っぽい笑顔ではにかむ紅音の姿があった。

16

いつの間にか紅音に背後を取られてしまった。

彼女は鋼太郎と小夏の二人をそれぞれ交互に見渡して――

「いや、別にこうやって隠れて特訓してることを見られるのは構わないんだけどさ。それにしてもお二人さん。昼間はあんなに陰悪だったのに、随分仲良しになったじゃん」

「誰がこんな奴とー!」

二人の返答がピツタリ重なった。

そんな様子を見て、さらに紅音はニヤニヤと笑う。

「私は紅音隊長一筋じゃ! 本当のことじゃから、誤解せんどいてけえ」

小夏はすぐに口調を鹿兎島弁へと戻していた。先ほどの小生意気な標準語を話す彼女を見たあとだと、尚のこと違和感が酷い。

「はいはい、小夏ちゃんの気持ちは誰よりも、私がかかってるから」

「そんな勿体無いお言葉を! ありがとうござんます、紅音隊長!」

小夏の表情がバアツと明るいものに変わった。

「まあ、明日も早いわけだし。今日の特訓はここまでにしとくよ」

紅音は先ほどまで握りしめていた二丁の銃をホルスターへ戻そうとして、そこで鋼太郎は妙なことに気づく。

彼女の握りしめる拳銃の片方は、機構の内部に〈刃血〉を注ぐことで貫通力を増した対吸血鬼用の特殊拳銃であり、〈サツマハヤト〉の隊員の標準装備でもある。だが、もう片方の拳銃は見慣れないものであった。

幾つもの小さな傷がついた九ミリ拳銃。それはまだ〈サツマハヤト〉が組織される以前に、自衛隊で用いられていた自動拳銃である。

「……どうして、アンタがそんな古い銃を?」

鋼太郎の視線はその九ミリ拳銃へと注がれていた。小夏もまた興味深そうに視線を送る。「……あれ、そういえば小夏ちゃんにも話したことがなかったけ？」

紅音はしばらく、瞳を伏せて考える。

そして観念したかのように、少し寂しげな口調で語り出した。

「ねえ、鋼太郎くん。君には以前、私のこの居場所が借り物だっという話をしたのを覚えてる？」

以前に天文館へ出掛けたときも、彼女はそのようなことを口にしていた。

「これはね、私にこの居場所を貸してくれた人の。——前の〈ケロベロス小隊〉隊長の私物なんだ」

鋼太郎も小夏も決して、鈍い方ではない。

それだけ言葉でも、ボロボロな拳銃と、普段は決して他者に見せないであろう紅音の態度を見れば、その裏に隠された意味を読み取ることは容易なことだった。

「それじゃあ、その古い銃はアンタにとつての形見の品なのか？」

「……形見か……けど、それも少し違うかな」

紅音の口元が、うっすらと吊り上げられる。

それはまるで三日月の弧を描くかのように、鋭い歯を剥いて。

「これはね、言うなれば因縁だよ。私に『狂犬』とは何かを教えてくれた、あの人とのね」

17

八月十日 午後一時三〇分

みなまたし しおみちよ
水俣市・汐見町跡地

人の手から離れたかつての市街地は、荒れ果てた廃墟と化していた。

〈ファミツキ〉と〈ミナツキ〉。二機の〈FG〉は互いに、周囲を警戒しながらも歩みを進める。

この街も〈吸血鬼症〉の蔓延によって奪われた生存圏の一つに過ぎない。亀裂の

走ったアスファルトも、ヒビ割れたガラス窓も、資料で似たような写真を何度だっ見てきた。人の築いた都市や、その営みが存外脆いことも理解していたつもりだ。

「……」

ただ、それでも。鋼太郎は物哀しさを覚えずにはいられない。

一方で前方を歩む〈ミナツキ〉は感傷に耽ることもなく、淡々と進んでいく。

小夏は遠征任務にも慣れていった。

そもそも彼女だけがしばらくの間〈ケロベロス小隊〉から離れていた理由だって、遠征に出ていた他の小隊の救援に応じた結果だった。その実力を高く評価された彼女は部隊の護衛役に抜擢され、今回の騒動を機に紅音の元へと呼び戻されたというわけだ。

彼女にとってはこんな光景も見慣れたものなのだろう。或いは、今更思いを馳せたところで、どうにもならないことを理解しているのか。

『……イライラするわね、鋼シロウ』

「鋼シロウじゃなくて鋼太郎な。何だよ、その北斗神拳の継承者みたいな名前は」

『別にあんたの名前なんて、どうでもいいの。それより敬語はどうした？ 敬語は？』

通信から返ってきたのは、明らかに不機嫌そうな標準語だった。彼女がどうしてここまで機嫌を損ねているのか。それはこの場に〈ケロベロス小隊〉の隊長である紅音が不在なことに起因していた。

吸血鬼の移動能力は決して侮れるものではない。その翼を広げれば、長距離を移動するのも容易なことだ。従って、防壁に大穴を開けたと思われる上級吸血鬼の搜索範囲も相応に広いものとなる。

「……小夏センパイだって納得したでしょう。……搜索の効率を上げるために、さらに隊を分割することに」

三人からなる各小隊を隊長と隊員の二つに分割。さらに一人となった隊長同士でペアを作成することで、上級吸血鬼を搜索する二〇のチームが出来上がった。

小隊をさらに分割するのは〈サツマハヤト〉の隊員たちにとっても異例の措置だが、上級吸血鬼が潜伏しているであろう範囲全てを短期間で搜索するための苦渋な選択でもある。

『流石の私でもその点に関しては納得してるわ。けど私が我慢ならないのはね、隊長が一人だけで上級吸血鬼を探すことになったことよッ！』

〈ケロベロス小隊〉も加え十三個の小隊からなる、遠征部隊を先程の分け方で分割しようとするれば、どうしたって一人の余りが出る。

その余りになることを紅音は自ら志願したのだ。

自分はスーパー最年少エリートだからいつもの調子で。それも中尾山公園なかおやまに設置した仮設拠点から最も離れた危険区域の搜索担当をだ。

それは「狂犬」らしい選択とも言える。並の吸血鬼が相手ならば、彼女が遅れをとることもないだろう。ただ一抹の不安を拭えないのも事実だ。

『もしも紅音隊長に何かあったら、私はこんな馬鹿げた作戦を考えた西郷陸将補^{さいごう}たちをぶつ殺すから。その時はあんたも手伝いなさい』

「はあ!? いやいよ頭がイカれたんですか!？」

『私はいつだって正気よ。まず、あんたが〈フミツキ〉で囮役をやるの。それで守りが薄くなったところに私の〈ミナツキ〉を突っ込ませるから』

「しかも、やり方が理不尽極まりねえな、おいッ!」

小夏の発言はテロリストの何ら変わりない。もしも機体のレコーダーに残った発言を、上層部の人間に聞かれることがあれば彼女は干されるどころではすまないだろう。

「……上に提出する前に、今のやり取りはエノン先生に頼んで削除してもらわねえとな」

こういうことを考えるのも〈サツマハヤト〉の一員としてどうかと思うが、いっそ数体の下級吸血鬼に襲ってきて貰いたかった。そうすれば小夏の苛立ちも少しは解消されるはず。

ただ、鋼太郎の期待に反して〈フミツキ〉のレーダーが何かを捉えることもない。先行させた調査用ドローンたちも、吸血鬼の姿を見つけられずにいた。

廃墟と化した市街地は、吸血鬼が潜伏するのにも優れている。跨道橋の下やビルの残骸が、下級吸血鬼の巣穴代わりになっていることだって珍しくはない。それなのに、この辺りは妙に閑散としていた。他の捜索チームは、すでに一度か二度、下級吸血鬼と交戦になっているというのにな。

鋼太郎は機体に備えられた各種電子機器に気を配る。細心の注意を払い、己の五感全てを集中させた。

「小夏センパイ。少し止まって貰えませんか。機体のエンジンを切って、静かにしてください」

ズゾツ……と。

挿入したイヤホンから、妙な音が聞こえた。機体の足音や、各部の関節が軋む音でもない。もっと生物らしい音が一定間隔で、鋼太郎の鼓膜を小さく振るわせるのだ。

『なによ、そんなに私がうるさいっての?』

「そうじゃなくて。センパイには聞こえませんか」

『……何がよ? ……私には特におかしな感じはしないけど』

「風の音と言えればいいんでしょうか。……それに建物が揺れるような音も。とにかく一定間隔で雑音が混ざるんです」

そう言われて、小夏も機体の計器類に目をやった。〈ミナツキ〉に搭載されたセンサー類をはじめとした機器も、エノンによって最新鋭のものへと換装されている。探查能力ならば鋼太郎の〈フミツキ〉にも劣らない。

「確かに。とどころに妙なノイズが入るわね、あんたの言うように風みたいな。けど、これがどうしたのよ？ たまたま今日は風が強い日だったってことでしょ」

いや、そうとは思えない。それにこの音は、風というよりも、

「——何かの息遣い」

鋼太郎はすぐにモニター上へと、この辺り一体のマップを表示した。機体のセンサーに感知できない条件下にあり、何か大きなものが潜める空間がないかを。

「センパイも探してください！ きつと何かがいるはずなんです！」

『……なら地下って線はどうかしら？ ……まだ吸血鬼達の侵攻が本州で留まっていた頃に、熊本や宮崎では大規模なシエルターの建設計画があったの。結局、シエルターの建設は間に合わなかったらしいけど、その際に掘り起こされた広大なスペースが今も残ってるとしたら？』

〈FG〉に搭載された計器のほとんどは、敵の襲来や戦況をいち早く操縦者へと伝えるためのものであり、その索敵範囲は地下深くまでは届かない。

確かに、それならばセンサーに引っ掛からなかった理由にも頷けた。だが、地下深くに潜むナニカの息遣いが地上にまで届くものだろうか？

「……嫌な予感がします」

『けど、気づいたからには調べないわけにはいかないでしょ。何か地下に降りる手段を探すわよ』



地下へ通じる通路は、随分と簡単に見つかった。シエルターを掘るために機材や重機を搬入する大型エレベーターの位置が、マップ上に残されていたのだ。

そこには地下へ続く、垂直直下の大穴があった。電力の供給が途絶えたせいでゴンドラ部が地下に残ったままになっているのだろう。少なくともエレベーターとしては完全に死んでいた。

鋼太郎たちは次いでゴンドラ部を上げ下げするためのワイヤーへと目をやった。それが〈FG〉一機分の重さに耐えられることを確認し、懸垂下降の要領で下へと降りる。

シエルターは二人の想定よりも完成間際といった状態にあった。周囲は重厚なコンクリートで覆われ、すでに食料や生活水を蓄えたコンテナも運び込まれていた。

そして、地上で聞いたあの音もより一層大きくなる。

辺り一面で反響しているのだろう。それはもはや呼吸というよりも唸り声に近い。

『鋼太郎、あんたは私の後に続きなさい。先輩命令よ』

「……は？ どうして？」

『ほら、目の前に一本の通路があるでしょ。この音は向こうから聞こえてるみたいだし、私たちもここを通らなきゃならない。——けど運悪く私が背中から襲われた時には、丁度いい肉壁が必要でしょ？ いや、〈FG〉に載っているんだから鉄壁かしら？ とにかく何だっついていいわ』

表面上は普段通りの憎らしい態度を貫く小夏だが、通信越しに聞こえる声には僅かな緊張が滲んでいた。それに、この得体の知れない音の正体と遭遇するのだから、前方に行く機体の方が早い。

それでも彼女は敢えて、前に行くことを選んだのだ。

「……アンタ、一応センパイらしいところあるんですね」

「フン。余計なお世話よ」

二機の〈FG〉はそのまま一本の通路を進む。今更になって各種計器が前方に何かが見えていることを訴え始めた。それはある種の警告であり「ここから先へ進むな」と言われているような気分になった。

「……」

『……』

通路は思いの外短く、すぐに開けた空間へとたどり着く。そこで二人は目の前にある光景に目を疑った。

『………何なの、コイツは』

〈フミツキ〉の双眸が捉えたのは一面に広がる赤黒い肉の壁だった。それが一定間隔に膨れては萎み、その度にシェルター内には轟音が反響する。

何か巨大な生物がこの空間いっぱい押し込められている、と鋼太郎はそんな印象を抱いた。うっすらと浮いた赤黒い血管には、呼吸と同様に一定間隔で心臓から血液を送られているのだろう。

人間の胸が呼吸の度に隆起すると同じように、その肉塊は全身をさらに巨大へと膨らませる。その度に空間へと収まりきらなくなった質量がシェルター全体を軋ませた。

「お前は……ッ！」

理性的な嫌悪感と、本能からくる恐怖の板挟みに押し潰されそうになる。それでも、鋼太郎はその肉塊の正体を知っていた。そこに冠された忌名を忘れられるわけがないのだ。

「——最上級吸血鬼〈グラトニー〉」

水俣市・中尾山公園跡地

帯刀小夏・陸士長。並びに島津鋼太郎・二等陸士が汐見町跡地に建設中だったシエルター内部で、最上級吸血鬼〈グラトニー〉を目撃。

その報告を受けた西郷隆月陸将補は上級吸血鬼の捜索を一時中断。部隊を撤退させ、充分な装備を整えた後に〈グラトニー〉を殲滅することを決定した。



〈グラトニー〉は十年前、兵庫県で観測されたのを最後にその行方が分からなくなっていた。

二十年前に東京都へと飛来し、日本全土に〈吸血鬼症〉を撒き散らした厄災の権化は、冠された名の通り、数多の血肉を喰らいながらに西日本へと侵攻を始める。

吸血鬼はより多くの血肉を喰えば喰うほどに、身体は大きく肥大化し、強靱な化物へと進化させて行くのが通例だ。〈グラトニー〉もその例に漏れず、最後に観測された時の全長は、初めて東京で観測された時の倍近くまで進化を進めていた。

だが、鋼太郎たちがシエルターで目撃した肉塊にその面影は見られない。恐らくは肥大化した自重を、遂に骨格が支えきれなくなってしまったのだろう。〈グラトニー〉は人知れず熊本まで侵攻するも、全てを喰らい尽くしてしまったせいで、これ以上自力で動くことが出来なくなってしまったのだ。

閉ざされたシエルターを寝ぐらに、ただ息をすることしかできない様はある種の皮肉めいた結末を辿ったとも言えよう。

「……けど、あの野郎の絶対的な畏怖は、醜く肥え太り、動けなくなろうと、そのまんまだった」

鋼太郎はコックピットに腰掛けたまま、青白く発光するモニター画面を睨んでいた。

きっと自分が〈グラトニー〉と遭遇したのなら、迷わず罵声を吐き捨て、切り掛かるであらうと思っていた。或いは怒りの余り、何も口にしないまま、その心臓に刃先を突き立てるかもしれない。

シエルターの〈グラトニー〉はろくに身動きを取ることも出来ない。

殺すなら絶好のチャンスでもあったはずだ。

では、実際はどうだろうか？ 自分の居場所を奪った怨敵を前に、鋼太郎は撤退することしか出来なかった。

有効な武装がないなんて言うのは、ただの言い訳だ。その言い知れぬプレッシャーに押し負け、仲間たちに情報を持ち帰るのが精一杯であった。

「……クソ………クソッ!!」

握った拳が小さく震えている。それは不甲斐ない自分への怒りか、それとも〈グラトニ〉への恐怖なのかは自分でも分からなかった。

「——ちょっと、いいかしら？」

コン、コン、と誰かが外側から〈フミツキ〉のコックピットを叩いた。駐機状態で片膝をついた〈FG〉をよじ登るのも、〈サツマハヤト〉の隊員であればそう難しくはない。

「とりあえず、上への報告は私がしておいたから。それで、遠征部隊は一度撤退することも決まったわ。今の機体や兵装で最上級吸血鬼とやり合うのは流石に厳しいだろうからってね」

声の主はきつと小夏であろう。

「他の区域に搜索に出ているチームも続々と戻ってきてる。あとは紅音隊長が戻ってくれば、すぐにでも鹿兒島に引き返すことになるでしょうね」

「……そうですか」

「それにしても、らしくないわね。あれからずっと機体の中に閉じこもって。いつもだったらクソ生意気に皮肉の一つでも言ってる頃でしょ？」

クソ生意気なのはアンタもだろ、とは敢えて口に出さなかった。今はそんなことを口にする気分にもなれない。

「まあ……私としてはそれで別に構わないけど。可愛くない後輩が黙ってくれれば、隊長とイチヤイチャランデブーと洒落込めるわけだしね。……だから、今から私が言うことはただの戯言だと思って聞き流しなさい」

そう前提したうえで、彼女は続ける。

「体調からあんたの大まかな事情は聴いてるの。んでもって、〈グラトニ〉はあんたの居場所を奪った仇なんでしょ？ それなのにウジウジしてどうすんのよ」

「……小夏センパイ……もしかしてアンタなりに俺を励まそうと、」

「なに言ってるの？ これは、ただの戯言っていったでしょ」

小夏はあくまでもつつけんどんな態度を貫いた。

「俺の仇……か、」

鋼太郎は震える拳に目をやった。

自分のこの手が何のために、あるのかを思い出す。ひたすらに剣を握り、血が滲むまで操縦桿を握りしめたこの腕が何を成すためにあるかを――

「あっ！」

小夏の声がツートン上がった。可愛らしく弾んだ声を故意的に作っているのだろう。その理由も単純で、こちらにゆっくりと歩いてくるシルエットを見つけたのだ。

不要な装甲を取り払った、赤と黒の攪拌する軽装な〈FG〉。そして肩には三つ首の猛犬が鎖を噛みちぎるエンブレムも描かれている。

「紅音隊長！ 戻ってきたとですね！」

それは紛れもなく紅音の〈ハツキ〉なのだろう。

けれど、鋼太郎は何か違和感を抱いた。彼女の機体が戻ってきたのであれば、何故のモニター上に〈ハツキ〉を示すアイコンが表示されないのか。

「……待ってください、小夏センパイ。……ソイツ、何かがおかしい」

肩に乗っかっていた小夏をそっと地上に下ろし、〈フミツキ〉は腰部からブレードを抜き放った。

「――何なんだ、お前ッ！ 紅音隊長じゃねえよなッ！」

『ああ……まさかこんなにあっさりと見破られるとは……ふふっ』

それは通信の音声とは明らかに違う。まるで脳内に直接話しかけているような違和感と、音の代わりに微弱な電流が弾けるような不快感が混在していた。

〈ハツキ〉を中心にあたりの景色が歪む。その後ろには爛々と輝く幾つもの瞳があった。血に飢えた下級吸血鬼たちの瞳だ。

十、二十……いや、仮説拠点を取り囲む下級吸血鬼たちの数はそれよりもずっと多い。

「なっ……」

どの個体も口から涎を滴らし、襲いかかるタイミングを推測しているのだろう。

休息をとっていた〈サツマハヤト〉の隊員たちもすぐに、異様な気配を察知する。

互いに睨み合いが続くと思われたその状況で、口火を切ったのは小夏だった。

『……おいコラ？ 私の前で紅音隊長を騙るとは良い度胸じゃないのッ！』

きつと隙を見つけ、機体に搭乗したのである。

怒号と共に ライオットシールド 大 盾 を構えた小夏の〈ミナツキ〉が突っ込む。紅音の姿を偽ったこと

彼女が逆鱗に触れたのだ。

だが、振るわれたシールドは空を切った。攻撃の軌跡の上には確かに偽物の〈ハツキ〉がいた筈だ。

それなのに〈ハツキ〉の姿は闇の中へと霧散する。

『嘘っ……消えた!?!』

鋼太郎は思い出す。自分たちの探していた上級吸血鬼がどうやって、県境に聳え立つ防壁に穴を開けたのかを――

「コンクリート壁を融解させるほどの熱を操れる……それに、さっきの景色の歪み」
思えば〈ハツキ〉の偽物が現れた時から違和感もあった。あの偽物からは何の音もしなかった。〈FG〉らしいエンジン音も、関節が擦れ合う音や、足音さえも。なまじ現実感が感じられない。

あれは紅音の姿形を真似ていると言うよりも、「幻」と言った方が適切に思えた。

「まさか……蜃気楼かッ！」

空気を熱し、光の屈折率を変動させる。それならば虚構の紅音を作り出すことだって不可能ではない。

「小夏センパイッ！ カメラをサーモグラフィックモードに切り替えて下さい。そうすれば、異常な熱量の変化で蜃気楼を見破ることはできる」

『おや……また、あっさりと手品の種がバレてしまったな。ちょっとしたおふぎけで混乱を招こうと思ったが、どうやら五感に長けた隊員が混ざっていたようだ』

またも目の前の景色がぐにやりと歪む。鋼太郎と小夏のちょうど間に、ボロ布を纏う女の姿が現れた。

『久しいな〈サツマハヤト〉の諸君。――私が君たちの探していた上級吸血鬼だ』
〈吸血鬼症〉に罹患した場合、その多くが理性を失い、血肉だけを求める化物に成り果てる。だが、極めて低い確率で体内に〈吸血鬼症〉のウイルスを内包しながらも、人の姿と理性を保ったままの例が報告されている。

それこそが上級吸血鬼――人の姿のまま、人ならざる力を手にした、血肉を喰らう化物である。

19

鋼太郎はざっくりと戦況を整理する。仮説拠点を取り囲んだ下級吸血鬼は、既に〈サツマハヤト〉の隊員たちと交戦状態にある。

駐在する〈FG〉の数でこそ吸血鬼たちに劣るもの、隊員の質ならこちら方が上だ。寧ろ今、一番警戒すべきは――

「お前が上級吸血鬼……ははっ。実物を生で見るのは初めてだな……」

上級吸血鬼の定義は大きく分けて二つ。〈吸血鬼症〉に罹患しながらも人の姿と理

性を保ち続け、下位の吸血鬼を先導できること。

そして、何らかの超常的な固有能力を保有することだ。

「……」

これまでの断片的な情報を判断材料とすれば、彼女の能力自体は酷くシンプルなものであろう。

熱量の操作。その応用で防壁に穴を開けるほどの熱線^{レーザー}を放ち、蜃気楼で人を欺くのだ。

彼女が何を考えているかは分からない。

それでも上級吸血鬼には、理性と知能が残っている。それが〈サツマハヤト〉の仮説拠点をリスクも承知で襲ったのだ。そこには「何らかの目的」と「勝てる算段」があるのだろう。

「小夏センパイ。コイツを一人で殲滅するのはキツイ。だから手を貸して下さい」

後手に回ることだけは明確な悪手だ。

姿形は人であれ、あれはもう化物だと。そう自らに言い聞かせた鋼太郎は、迅速に彼女を殲滅することが最適解であることを理解した。

『……分かった。……ただし、タイミングは私に合わせなさいッ！』

〈ミナツキ〉のカメラアイが二度明滅する。今のが合図だ。

二機の〈FG〉が息を合わせて同時に駆け出す。それぞれが目の前のターゲットから前後の退路を奪うようにして、互いの武器を構えた。

『挟み撃ち……か。集団である利点を活かし、吸血鬼を各個撃破する。〈サツマハヤト〉の中でも基礎的な戦術だな』

上級吸血鬼の両腕に赫灼に燃ゆる。

熱で大気を膨張させ、その圧で迫る鋼太郎たちを押し返した。

『フッッ！』

さらに彼女は指先で小銃を形作った。そこから狙い放たれるのは、一〇〇〇度を越えるレーザーだ。

『まずは勘のいい方を潰させて貰う！』

鋼太郎も咄嗟に回避行動を取る。敢えて推進器^{スラスタ}は用いず、最低限の〈刃血〉^{じんけつ}消費とコンパクトな動作でレーザーを避けた。

「コイツ！ 下手に大きな動作で避けたら、その隙を狙ってやがるなッ！」

周囲に設置されたテントや機材の類に注意を払う余裕はなかった。第二、第三のレーザーが休む間もなく放たれるのだから。

『なかなか上手いじゃないか。次はフェイトを織り交ぜてみるのも悪くないな』

彼女の口の端がうっすらと吊り上がる。
だが、次のレーザーが鋼太郎に向くことはなかった。



鼻腔を突いたのは濃厚な〈刃血〉の匂いだ。

振り返れば、〈ミナツキ〉の構える大盾ライオットシールドがあった。分厚い装甲板を幾重にも重ねた彼女のシールドは、一部が展開し、そこから甘美な〈刃血〉の香りを放出している。

「これは……」

『ほら、来なさいよ？ この盾は特注品でね、内側にはたっぷりと私の血が充填されてるんだから』

その盾はただ守るだけに在らず。——シールドの内側は、〈刃血〉で満たされている。一部の装甲を開放することで、辺りに〈刃血〉の匂いを充満させ、吸血鬼たちのヘイトを強引に自分へと向けるのだ。

「チッ……」

吸血鬼は血肉を何より優先してしまう。その欲求に逆らえないのは上級の自分であっても同じだった。

『くたばりなさいッ！ バケモノめ！』

彼女が盾の裏側からハンドガンを素早く引き抜く。それは万一、紅音の操るハンドガン故障した際の予備として、〈ミナツキ〉に積載された同型機種であった。

「どうしたって血に惹かれてしまう……煩わしいものだな、吸血鬼の特性というのは……」
焼けるような灼熱間とともに腕が吹き飛んだことを理解する。

けれども、この程度であれば再生は容易であった。

「だが、貴様らは上級を嘗めすぎだ」

瞳を艶やかに輝かせ、〈ミナツキ〉との間合いを侵略する。

熱操作の応用で気流を制御。その勢いに身を乗せたのだから、鈍重な機体での急回避も間に合わせない。

「捕まえたぞ、ご自慢の盾をな——！」

〈吸血鬼症〉の罹患以前に、猫を撫でたことがあった。それと同じ要領で盾の表面なぞれば、容易くに分厚い装甲版を破ることができる。

『嘘だろ……』

「ははっ！ 〈刃血〉を浴びるのもいつぶりだろうなッ！」
破られた盾の内側から〈刃血〉が溢れ出す。

その血を存分に浴びた背中からは歪な翼が発現し、そのシルエットを禍々しいものに変えた。

「形態構築——クシザシ」

現した翼の一枚を自ら引きちぎれば、それは形を変えて巨大な槍を形作った。

槍先には陽炎が踊り、シールドごと〈ミナツキ〉の脇腹を穿つ。今の衝撃で、機体の

姿勢制御装置ポジションサを壊したと確信できた。

「それじゃあ……まずは望み通り、君から引導を渡してやろうか」

姿勢制御装置が壊れてしまえば「FG」はもう立ち上がれない。槍を振り上げ、操縦席を穿とうとした時だ。

背後から、研がれた殺気が迫る。

『——させるわけねえだろッ!』

それは敢えての横風であった。

きつと自分を〈ミナツキ〉から引き剥がす為の。互いが互いを救うために戦う姿は〈サツマハヤト〉らしい、高潔な精神の表れだ。

「けれどな」

それ程まで振りが大きくなれば、「カウンターが欲しい」と言っているようなもの。

お望み通り、鋭利な閃光とともに右目カメラアイを抉り取ってやった。

『この、クソ野郎がッ!』

「ああ、そうだったね。久々の血の匂い充てられて、思わず君のことを標的から外していたよ」

20

「このクソ野郎がッ!」

鋼太郎は、ブラックアウトしたモニターの右半分と、自分自身の無力さに苛立ちながらも吐き捨てた。

それでも〈フミツキ〉は、倒れた〈ミナツキ〉を庇うようにして上級吸血鬼の前に立つ。槍の形成、アレもアイツの能力か? いや、それも少し違うな……」

十分な血液を摂取した吸血鬼は成長する。

上級吸血鬼にもなれば、自らの身体をどのように成長するかを、ある程度までは自由に定められるのだろう。

『ねえ、鋼太郎……聞こえてるわよね?』

通信の向こうから届いたのは小夏こなつの声だ。

さっきの衝撃で額を強く打ち付けたのであろう。通信には血がポタポタと滴り落ちるノイズが混ざっていた。

『あいつは多分、ここにいる誰が相手をしたとしても手に余る』

時折、痛みから来る呻き声が混ざりながらも、彼女は声を搾り出すようにして続ける。

『だから良い? 私が時間を稼いであげるから、あんたは今すぐ、回れ右して逃げるの』

「……………」

鋼太郎は黙ったまま機体の損傷率を確認した。潰されたのは機体の右目だけ。〈刃血じんけつ〉

の残量にだって余裕がある。

『ねえ! ちょっと聞いているの!』

「聞いてますよ、小夏先輩。……:というか普通、逆ですよ。動けないアンタがどうやって、あの化物を相手に時間を稼ぐんです?」

『……そっ、それは……:こうズギヤーン! って感じで!』

それでは説明になっていない。多分、具体的なことまでは考えていなかったのだろう。呆れながらに鋼太郎は溜息を吐き出した。

「アンタの盾は俺を守るためにあるんじゃないやねえだろ」

“忠犬”が付き従うは、いつだって本物の“狂犬”でなくてはならない。

今の何にも成りきれない鋼太郎は、せいぜいが野良犬止まりだった。

「さっさと行ってくださいよ。正直、足手まといなんで」

『……:ほんと、クソ生意気な後輩なんだから。……:後でその態度について説教してやるから、必ず生きて戻ってきなさい』

〈ミナツキ〉のコックピットが開く。

小夏は額に負った傷を庇いながらも、機体のあらゆるデータが記録されたディスクを手
に這い出した。

「……………」

これで良いのだ。戦闘記録を小夏が持ち帰りさえできれば、上級吸血鬼への対策を立てられる。だから自分が彼女が逃げ切れるだけの時間を稼げば――

『私がそう易々と、標的を逃すと思うかッ!』

「テメエこそッ! 簡単にここを通れると思うなよッ!」

研ぎ澄まされた槍先と、ブレードの鋒が激しくぶつかる。

「ぐッ……!!」

小夏を追おうとする上級吸血鬼の一撃を真正面から受け止めたのだ。衝撃にフレーム全体が悲鳴を上げた。

きつとブレードを握る両腕に〈刃血〉を集約させていなければ、今の衝撃をいなしきれなかっただろう。

『ふむ……どうやら、この香りから察するに、君の〈刃血〉は薄いようだね』

彼女の鼻先がスンスン、と動いた。

『平均の半分程度と言ったところか？ 両親のどちらかが、鹿児島人ではないんだろう。それにしても上手く遣り繰りしてる方だが』

「ああ……そりゃ、どうもッ!」

ブレードを八相に構えて、荒々しく振り下ろすのは薩摩さつま示現流しげんりゅうの剣筋だ。

〈刃血〉の濃さは確かに重要だが、あくまでも戦闘を構成する上では一要素でしかない、と鋼太郎は自らに言い聞かせた。

サーモングラフィーを介して熱量の変化を観測すれば、蜃気楼や、彼女の大まかな攻撃タイミングを看破することは難しくない。

それに今は乱戦なのだ。既にモニター上では、仮説拠点を取り囲んでいた下級吸血鬼の数が続々と減りつつある。〈サツマハヤト〉の隊員たちが戦況を押し返しているのだろう。このまま戦況が長引けば、数的不利になるのだから敵の方だ。

ならば今の鋼太郎にできるのは時間を充分に稼ぎ、少しでも目の前の化物に痛手を負わせることだった。

『この剣速は示現流だな』

振り上げられた銀閃が上級吸血鬼の頭上に至るまでは、コンマ数秒も掛からなかった。だが彼女はそれだけの剣速を目視で把握し、冷静に対処してみせる。

「ふふっ」

半歩退かれて、ブレードの先を簡単にあしらわれた。すぐに刃の軌道を切り返すも、同じことだ。

『君が辛うじて私と戦える要因には、優れた五感に加え、熟達した剣術の才もある。指導者の腕もよかったんだろうな』

「御託をベラベラと並べやがって。その減らず口がいつまで続くか試してやるよッ!」

鋼太郎がニヤリとほくそ笑む。

〈フミツキ〉の携えるブレードもまた、エノンによって新調されたものなのだから。――

――〈対吸血鬼用ブレード型兵装・鬼灯ほおずき一型〉。見てくれはこれまでのブレードと同じ

日本刀を模していても、その内側はまるで違う。

「爆ぜろッ！ 鬼灯ッ！」

鋼太郎は操縦桿に増設されたスイッチを弾いた。

〈鬼灯〉の刀身には細い管が張り巡らされ、内側を〈刃血〉が巡る。そこに微弱な電流を流すことで、刀身は破裂。強靱な爆風を引き起こすのだ。

示現流の一振りには、知性の残る上級吸血鬼ほど適確に対処される可能性がある。だからこそ、想定外からの「初見殺し」がより有効な一撃になり得た。

舞い上がった粉塵と共に砕けた刀身が、鋭利な破片となって彼女の全身に突き刺さる。四方八方から散弾のように降り注ぐ金属片を避けしきることは、その動体視力を持ってしても不可能だった。

「ここで仕留めてやるよッ！」

〈フミツキ〉は爆ぜた〈鬼灯〉をすぐに投げ捨てて、拳を固める。

中途半端なダメージではすぐに再生されてしまうだろう。鋼太郎は冷徹に狙いを定めた。合理性も理性も。

センスもオリジナリテイさえも。

殺すために、自分の持てる全てを集約させる。あの「狂犬」のように――

『……あまり調子に乗ってくっつけてくれるなよ？』

ある種の悪寒が鋼太郎の脳髄を穿った。

電圧低下。エンジン回転数、減少。

『私がいつ、熱量を上げることしか出来ないと言った？』

機体の内側を流れる〈刃血〉が凍り付き、〈フミツキ〉は静止した。

「なっ……………」

彼女は手を閉じていた。そこには周辺の熱が全て集約される。レーザーや蜃気楼と同様に、これも熱操作の能力を応用したに過ぎない。

対象から熱を剥奪し、凍結させる。それならば温度の上昇ばかりに意識を裂いていた鋼太郎の虚を突くことも容易であった。

青白い冷気は機体の表面だけに留まらず、コックピットの内部にも広がった。それは血管に繋がったチューブを介して、鋼太郎の身体さえも凍てつかせる。

「このッ……………」

咄嗟にチューブを引き抜くも、それでは遅い。踏板に密着させた爪先から氷結は広がり、半身の自由を奪い去った。

『私は能力を使うにも、傷を治すにも相応の体力を持っていかれる。特に熱を奪うのはあまりやりたくないんだ。奪った熱を体内に内包しなければならぬのだが、その過程で体内にダメージが生じるからな。それを治す再生する過程でさらに体力を使うんだ』

だから迅速に決着をつけようと、彼女の構えた槍先は再び熱を帯びて、〈フミツキ〉の頭部を抉った。

幾度も振り下ろされる槍先は、内部機構を庇護する装甲板を荒々しく引き剥がし、簡単に〈フミツキ〉を解体してゆく。

その最中に鋼太郎が思い浮かべたのは、ある感覚だ。

「……………俺は、死ぬのか？」

それは随分と今更な感覚でもあった。

当然、自分の中で戦いに身を投じると言うことの意味は分かっていたつもりだ。そこには絶えず「死」が付きまとうことも。

だが、こうやって現実を前にして鋼太郎はようやくと痛感する。死とは理不尽なものであると。

絶対的強者から突然にもたらされる、その恐怖に初めて身震いがした。

『ん…………？』

唐突に彼女の手が止まる。その槍先で鋼太郎の囚われたコックピットを貫こうとする寸前で、〈フミツキ〉の機体に描かれたエンブレムマークが目にとまったのだ。

『三つ首の犬…………ああ、だから、通りで…………ふふつ、それならば私も納得だよ』

彼女のリアクションは、その前後で明らかに違う。

『どうやら君は、紅音あかねの部下のようだな』

「は…………？」

思い返せば、彼女が紅音の蜃気楼を作り出したこと自体が不自然なのだ。

あれは紅音が〈ハツキ〉に搭乗すること、そして彼女が赤と黒をパーソナルカラーに選んでいることを知らなければ、蜃気楼を作り出すこと自体が不可能なはず。

『ああ…………それにしても、懐かしいな。天璋院紅音てんしょういん。何度、その名前を呼んだだろうね』

そして以前に紅音から見せてもらったポロポロの拳銃。

彼女はそれを「形見」ではなく、わざわざ「因縁」とまで称したのだ。

「まさかテメエは…………」

『いや、失礼した。改めて私の自己紹介をさせて貰おうか。——私は上級吸血鬼・

大久保利恵おおくぼりえ。〈ケロベロス小隊〉の“元”隊長にして、君たちの隊長に“狂犬”とは何かを教え込んだ女だ』

〈サツマハヤト〉に属する人間で、大久保利恵の名を知らない者はいない。

十年前、西郷隆月さいこうたかつきが一個小隊を指揮して前下級吸血鬼を一五〇体、並びに上級吸血鬼を二〇体殲滅した。その小隊に属し、戦場を駆け抜けた尖兵こそが彼女なのだから。

『……となると、さつき逃した方も紅音あかねの部下だったのか。これは失態だったな。もっと早くに所属を確認しなかった私の落ち度だ』

利恵は最古参の〈FG〉パイロットとしても、〈サツマハヤト〉に貢献し続けた人物だ。ロールアウトされたばかりの第一世代機で一定の戦果を挙げながらも、様々な問題点を提示し次世代機の開発に繋げた。

今〈フミツキ〉があるのだから、彼女の功績と言っている。

「お前が、あの大久保利恵だと……」
そして〈サツマハヤト〉に属する人間であれば、誰もが夢想する。「もしも、彼女が、生きていたら」と。

もしも彼女が生きてさえいれば、〈サツマハヤト〉は今頃、九州の全土を奪還できていただろう。或いは最上級吸血鬼を下し、人類が反撃に出るキツカケを作っていた筈だ。そう確信させるほどに、彼女の強さは絶対的であった。

「……笑わせんじゃねえよ！ その人なら、もうとつくに死んでんだよっ！」

『そこまで難しい話でもないだろう？ 私は死の間際に〈吸血鬼症ヴァンパイア・シンドローム

だとしたら、最悪の冗談だ。かつての英雄が、化物として現れたのだから。利恵の細い指が、凍り漬けにされた機体のコックピットへと伸びる。

彼女は、人ならざる怪力で装甲を引き剥がし中の鋼太郎こうたろうを見下ろした。

「せっかくこうして対面できたんだ。思念で語りかけるのも止めましょう。ところで、紅音は今どうしてるんだい？ それから、エノン先生の酒癖の悪さは相変わらずなのかな？」

「……お前みたいな化物と話すことなんて、何もねえよ」

「まだ強がれるか。けれど君はその状況からどうするつもりだ？」
半身は未だ氷漬けにされたままだ。

それに、もし手足が動いたとして、この化物に素手で対抗する手段はない。

「これはちよっとした質問なのだが、君はどうやって人が上級吸血鬼に転ずるかを知っているか？」

「……んなこと、知りたくもねえよ」

上級吸血鬼が誕生するのは極めて稀なことだ。何らかの条件が有るのか、或いは罹患した人間に本来備わっていた素質か、研究者たちの間でも見解は幾つかに別れている。

「私も確信があるわけじゃないんだ。ただ、私と同じように上級吸血鬼と化した同胞に話を聞くことがあつてだな」

形状構築——クビキリ。

彼女は背中から発現した翼を、扱い易い刀剣に変えた。人の首程度なら容易に落とすであらうソレは鋼太郎の腹部へと振り下ろされる。

「うぐッ……!？」

えぐり込まれた刃は執拗に傷口を搔き回した。より痛みが広がるよう、より多くの鮮血が流れるよう。

「上級吸血鬼に転じた同胞は皆、脳と心臓以外の臓物を全て潰されているんだ」

熱を持った痛みが鋼太郎の表情が歪む。堪えようとしたがダメだった。刃を握る利恵が手首を捻るたびに、苦悶の声が漏れてしまう。

「私は説明が苦手だからな。上手く伝えられる自信もないのだが……例えるのなら、そう

だな。君たちの駆る〈FG〉だって脳CPUと心臓エンジンがあれば動くのだろうか？」

「なっ……」

「私たち上級吸血鬼はあくまでも『端末』に過ぎない。ならば不要な部品をわざわざ身体の中に残しておく必要もないと思うんだ」

利恵は一度刀剣を引き抜き、その鋒で鋼太郎の全身をなぞった。

肺を、胃を、肝臓を、脾臓を、腎臓を。胆嚢を、小腸を、大腸を。丁寧に一つ一つを潰していくという意を込めて。

流れ出す〈刃血〉は、彼女にとって芳醇な香りを放つ美酒と同じだ。腹部に開いた風穴だって、咲き誇る紅い大輪と変わらない。

利恵は本能に従って、すぐにでも鋼太郎の首元に喰らい付きたかった。

だが彼女は敢えて、そうしない。

「私の目的は天璋院紅音てんしょういんを上級吸血鬼にすることだ。ただ、彼女一人を吸血鬼にするだけじゃ、寂しい思いをさせてしまうかもしれない」

再び刀剣が振り上げられる。十分に血に濡れた刃は月明かりを受けて、紅く煌めいてい

た。

「だから、君たちも上級吸血鬼にするんだ。そうすれば朱音が寂しい思いをしなくても済むだろう」

鋼太郎の意識は徐々に薄れていく。失血性ショックによる意識の混濁だ。主張を増す痛みとは対照的に、見える景色には靄が掛かってゆく。

死がすぐそこにあるような感覚だ。手を伸ばさずとも、どれだけ逃げようと、その結末は必ず訪れるのだろう。それこそ人の括りから外れた化物にでも、成り果てない限りは。

——パンツ！

薄れゆく意識のなか、鋼太郎は最後に一発の乾いた銃声を聞いた。

闇夜の空に向けて、放たれたそれは紛れもなく“狂犬”の声だ。

『動くなッ！』

暗闇の向こうから、狙いを定められる。

「ああ……この声は。懐かしいなあ」

利恵が振り返れば、そこにはハンドガンを構えた（ハツキ）の姿があった。

『ねえ……質問なんだけどさ。それは、君なりに利恵隊長の真似をしているつもりなの？』

その声には存分に憐憫の念が込められていた。紅音はそこにありったけの憎悪を乗せて、らしくない口調で吐き捨てる。

『だとしたら、全然似てねえんだよ、この化物がッ！』

22

外は雨が降っているのだろうか？ 冷たい雨粒が窓を殴りつけては、滴り落ちてゆく。

「……………ここは？」

鋼太郎こうたろうが目を覚したのはベッドの上だ。清潔感のある白い病室で、身体からは何本もの

管が医療機器に向かっては血管のように伸ばされていた。

「確か、俺は大久保を名乗る吸血鬼に殺されかけて……うぐっ！」

混濁していた意識も徐々に明朗になってゆく。それと同時に焼けるような腹部の痛みを自覚した。

まだ傷が塞がっていないのだろう。巻かれた包帯には赤黒い血が滲み出す。

「あの野郎……やってくれたじゃねえか」

思い出すのは、あの女の憎らしい薄ら笑いだった。そう吐き捨てた鋼太郎が次に目をや

ったのは、ベットの脇に置かれたデジタル時計だ。

八月十二日 午後十時四五分

鹿児島市 鹿児島大学病院

「俺は三日も意識を失ってたのか……」

額からは嫌な汗が伝ってゆく。あの戦闘で意識を失ってから何がどうなったのか？

紅音あかねや小夏こなつは無事なのか？ 湧いて出る疑問が尽きることはない。

「厳密には二日だよ。君がここに運ばれてきた時には、ちょうど日付を跨いでいたから」

病室の扉側にはエノンが立っていた。小脇には下の売店で購入したであろうジュースと菓子の類が握られている。

「ん……これかい？ これは私のだ。病み上がりの君には上げられないぞ」

「……酒は買ってこなくても、良いのかよ」

「私にもお酒を飲みたい気分のとくと、そうじゃない気分の時があるってことさ」

そう笑う彼女の顔にも、色濃い疲労感が滲んでいた。

「まさか……ずっと俺に付き添ってくれたのか？」

「少し違うな。私と紅音隊長と小夏ちゃんの三人で代わる代わる君の見舞いに来ていたわけだが、ちょうど私の番で君が目覚めただけのことさ。……本当なら皆で君の安否を見守りたかったんだが、生憎とそれどころではなくなってしまっただけ」

何か意味を含んだような言い方だ。口調は重く、彼女は雨の降りしきる夜の方へと、視線を逃した。

「……何かあったのか？」

「順を追って話そう。ただ覚悟をしたまえ」

彼女は鋼太郎が大学病院に運び込まれるまでの経緯を簡単に語った。

紅音の〈ハツキ〉が単機で、利恵の撃退に成功したのだ。その後鋼太郎も含めた重傷者たちは病院へと担ぎ込まれた。

「危うくドクターヘリや救急車両の数が足りなくなるところだったよ。まあ、あれだけの数の重傷者を出しながら、誰一人として〈吸血鬼症ヴァンパイア・シンドローム〉に罹患しなかったのは不幸中の幸

いだったか……」

どうにも先程からエノンの歯切れが悪い。普段のマイペースな彼女の人柄を知っているからこそ、違和感も次第に大きくなっていった。

「さて。それじゃあ、ここからが本題だ」

「驚くな」そう前置きした上で、彼女は衝撃的な事実を口にした。

「——間も無く、鹿児島は最上級吸血鬼（グラトニー）によって跡形を残らず食い尽くされるだろう」

「これを見たまえ」

差し出されたタブレット画面を、鋼太郎は食い入る様に覗き込む。

その映像は報道ヘリによって上空から撮られているのだろう。カメラのレンズには絶えず雨滴が叩きつけられ、リポーターの声には絶えずローターの轟音が混ざる。だが、そんな要素が気にならなくなるほどに、向こう側に映り込んだ存在は絶対的だった。

県境に聳え立つ防壁。その先で四十メートルを超えるであろう、肉の塊が蠢いた。まるで山一つが侵攻するように、堅牢な外殻に覆われたソレは口元に鋭利な牙を備えながら歩みを進める。

往々しい翼を振りかざし、大地を踏み砕きながら進む様は四脚の巨龍を思わせた。

かつては東京に飛来し、熊本の地下深くでずっと息を潜めていた災禍の化身。最上級吸血鬼の姿がそこにある。

「なんで、コイツが……あのシエルターの中で動けなくなっていた筈じゃ!?!」

「驚くなど前置きしたろ。……残念ながら私たちはずっと、この化物の掌で踊らされていたんだよ。肥薩山脈での一件から、上級吸血鬼・大久保利恵との邂逅、そして今に至るまでな」

回収された戦闘記録からは利恵に纏わる多くの情報を得ることが出来た。だが初めにエノンが違和感も抱いたのも、そこで得られた情報からだ。

利恵は（ハツキ）と会敵してすぐに、残っていた下級吸血鬼を引き攀れて、闇夜に姿を消したのだ。

紅音の戦闘力を脅威に感じたからこそ、退いたという可能性もある。ただ、そうだとしでも逃げるまでの判断がいささか早過ぎるように思えらしい。

それはまるで、既に目的を達成したと言わんばかりに。

「まず上級吸血鬼とは何なのか？　そして、利恵がああタイミングで君たちの前に現れた理由を紐解こう。話はそれからだ」

上級吸血鬼とは人の姿と理性を保ちながらも、人の血肉を喰らう怪物。

その認識で間違えはない。ただ、彼女らにはもう一つの側面があるのだ。

「上級吸血鬼が理性を持って、下級吸血鬼を思うがままに扇動できよう。最上級吸血鬼もまた理性を持って、上級吸血鬼を手足のように操ることができるんだ」

以前に利恵は自らを「端末」と称した。彼女も所詮、〈吸血鬼症〉に罹患した化物なのだ。一見すれば人の姿をして、意思疎通が取れるように思える。

しかし、その実態は最上級吸血鬼の端末として、脳に残存する情報を頼りに人柄や話し方を再現されているに過ぎなかった。

「きつと〈吸血鬼症〉に罹患した彼女を見つけた〈グラトニー〉は歓喜したことだろうね。肥え太り動けなくなった身体の代わりとして、最強の〈サツマハヤト〉を手に入れたんだから」

座礁した鯨が自重で身動きが取れず、死に絶えるように。大量の血肉を喰らった挙句に身動きがとれなくなってしまう〈グラトニー〉は、間違えなく進化の過程に失敗したと言えよう。

「きつと奴の目的は進化をやり直すことなんだ。再び大量の鮮血を吸り、より強靱で、強大な存在へと自らを昇華させようと、ずっとチャンスを探っていたのさ」

「その為に大久保の身体を利用して、俺たちの仮説拠点を襲ったのか……けど、それがどうして進化をやり直すって目的に繋がるんだよ？」

〈グラトニー〉があれだけの巨大に膨れ上がったのは、それだけの血肉を喰らったからだ。そうやって膨れ上がった身体を再び起き上がらせるには、自重を支えられるだけの骨格と筋力が、ひいては自身の肉体に更なる進化を齎せるだけの血肉が不可欠であった。

「……よく思い返して見たまえ。君たちのマシンがどういう理屈で動いているかを」

〈FG〉は〈刃血〉^{じんけつ}に内包された膨大なエネルギーによって稼働する。そして〈刃血〉を喰らった吸血鬼もまた、その存在をさらなる脅威へと進化させるのだ。

仮説拠点へと運び込まれた資料の中には、電子機器や食料の類に加え、巨大な燃料タンクがあった。長期間の搜索を想定し、〈FG〉の動力を補う為に用意された中身は、色鮮やかな〈刃血〉である。

「まさか……大久保が俺たちを襲って、あっさりと逃げた理由は!？」

「混乱に乗じて、君たちから〈刃血〉の詰まったタンクを奪うためだろうな。上手く、君たちの注意を惹き付ければ、タンクの強奪はコントロール下に置いた下級吸血鬼にだって出来る」

エノンの推察は十中八九、当たっているのだろう。その証拠に、大量の〈刃血〉を飲み干した〈グラトニー〉が再び、立ち上がったのだから。

恐らくは、利恵をコントロール下に置いたのも最近のことなのだろう。ここまでの情報を整理すれば、その企みの意図を読み解くことだってそう難しくはない。

まず彼女の能力を利用し、聳え立つ防壁に大穴を開ける。

次に調査に訪れた遠征部隊から、大量の〈刃血〉を奪い取る。

エノンの言ったように、自分たちは本当にまんと踊らされていた訳だ。

「〈グラトニー〉は利恵の脳に残された情報を読み解いたんだらうね。お陰で私たちはまんと奴のデリバリーをやらされたって訳だよ」

表面ではケラケラと笑うエノンだが、その目は少しも笑っていないかった。

当然だった。利恵はかつての〈ケロベロス小隊〉の隊長なのだから、エノンとも面識があつたのだらう。

「はあ……本当に笑えるね」

かつての友人をこんな風にご利用されたエノンの内心が、穏やかであるわけがないのだ。

「……エノン先生。……俺の〈フミツキ〉は動かせるか」

「派手にぶっ壊してきたのは、どこの誰だったかな？　そもそも、そんなことを聞いて、どうするんだい？」

「んなの決まってるんだろッ！　あの化物どもをぶっ殺す為だよッ！」

鋼太郎はベットから身体を起こした。うざったい管を引き剥がして、痛む傷を抑えながらも立ち上がる。無茶をしている自覚ならあつた。きっとエノンが自分を止めようとすることも。

だが、彼女が次に口にしたのは全く別なことだった。

「外を見たまえ」

「雨が降ってるみたいだが……それがどうしたんだよ……」

降りしきる雨は止みそうにない。

止めどなく雨滴が弾ける音が煩いくらいだった。

「君も鹿兒島が〈吸血鬼症〉の脅威から、今日まで生き延びた理由を忘れた訳じゃないだ

らう？　〈刃血〉と〈聖塵〉^{せいじん}。そのどちらが欠けてしまえば、^東ここも君の居場所^原の二の舞

を辿ることになる」

〈聖塵〉は桜島の噴出物に含まれる特殊鉱物だ。その磁場は吸血鬼の運動能力を抑制し、殲滅を容易にした。磁場の影響は恐らく最上級吸血鬼にも有効であろう、という学説だつてある。

だが、それが雨によって流されてしまっていたら？

「勿論、全部の〈聖塵〉が雨によって流れたわけじゃない。一部はそのまま、地層になるんだから最低限度の効果もあると思う。けど——」

その影響は快晴時の四割にまで減少する。防壁に備え付けられた砲台の照準システムだって、レーザーが雨滴に反射することで狙いが狂わされるだらう。

今日まで鹿兒島を守っている全てが、逆手に取られてしまったような絶望感が鋼太郎を

襲う。

何から何までもが最悪な状況であった。

「言ったろ？ 今に至るまで、私たちはあの化物の手の上で踊らされているって」

鋼太郎は、利恵の固有能力が熱の操作だったことを思い出す。

「彼女の能力が大気を熱し、天候にまで影響を及ぼすのなら、これから先、〈グラトニ〉が鹿児島への〈刃血〉を飲み干す時まで、この雨が止むこともないのだろう。」

「私は思うんだ、こんな雨空の下で、泥に塗れて死ぬのはあまりに惨めだね。それに君は十分に頑張ったじゃないか。だから」

「だからって、香気にベットで寝てるわけにもいかねえだろ」

それは鋼太郎をこの場に留める理由になり得なかった。

結ばれた決意は固いまま、曇天の空を睨む。

「まあ、君はそういう選択をするタイプだよな。どうせ私が止めたって聞きやしないんだから……」

エノンの言葉にはありつたけの不満が込められていた。扉の前から退くも、その態度は決して納得した様子ではない。

「あー、もう面倒くさいッ！ せいぜい君の思うようにやればいいさッ！」

「……悪いな、先生」

「フン！ どうせ謝るくらいなら、もう少し私の話に付き合え。外に車も用意してやるから」

そう吐き捨てて、彼女は蒼い瞳を伏せた。

「君と私は似た者同士だと思うんだ。だって私らは大切な居場所を失った者同士だろ？」

彼女の祖国
アメリカは「憤怒」のコードネームを冠した最上級吸血鬼〈ラース〉によって焼き尽く

された。

大好きだった家族も、愛おしい恋人も、その全てを――

「どうして私だけが生き残ったのかを何度だって自問した。それでも答えを見い出せずに、死んでやろうと思ったことだって一度や二度じゃない……君だって似たようなことを考えたんじゃないか？」

鋼太郎は言葉に詰まらせる。

以前の自分が、そして今の自分でさえも、そんな考えを抱いていることをエノンには見透かされていたらしい。

「けど、生憎と私の居場所は一つだけじゃなかったらしい。結局は辿り着いた場所で、やり甲斐のある職務や、騒がしい仲間たちにも囲まれてしまったからな」

だから、と彼女は青い瞳を大きく見開く。

「鋼太郎くん。君が死ねば、私の居場所は少し寂しくなる。せっかくのお酒も不味くなるんだ——だから、生きて帰ってきてはくれないか」

「……」

鋼太郎は答えなかった。伸ばされた手も振り払い、病室を立つ。

「……なあ、エノン先生」

だが去り際に少し、彼女の方を振り返って

「アンタの書いた『転生したら美少女技術者だった件！ ロボットを作って無双しなきゃいけないのに、お酒が美味すぎて仕事ができません！』ってヤツ、今度は俺にも読ませろよな」

23

最上級吸血鬼〈グラトニー〉はさらなる進化と〈刃血〉を求め、歩みを進める。

〈サツマハヤト〉は防壁周辺に部隊を展開するも、上級吸血鬼・大久保利恵おおくぼりえの能力によって齎された悪天候も相まって、いまだに有効な反撃手段を見出せずにいた。

〈グラトニー〉が戦線を突破するまでに残された時間も、刻一刻とすり減っていく。秩序と日常を踏み躪るであろう災禍の化身は。もうすぐ、そこに——



八月十二日 午後十一時三〇分

〈ケロベロス小隊〉ガレージ

紅音あかねの手元にはバラバラにされた小銃があった。彼女はそれを手に取って、パーツの一つ一つを丁寧に磨き上げてゆく。

「ふう……やっぱ、定期的にメンテしないと、汚れも溜まるねえ」

戦力を温存するため、〈ケロベロス小隊〉には待機命令が下されていた。敵の底が見えない以上、こちらも切り札を使うわけにはいかないというのが上層部の決定である。

その決定自体に異論はない。ただ、誰かが戦っているというのに、自分たちだけ何も出ないのもどかしかった。

「……ねえ、利恵隊長……こんな時、隊長ならどうするんだろうね？」

うつすらと浮かべた笑みに宿る感情の正体を伺うことは叶わない。ただ、自分にはそれを理解する必要もない。

——ただ、目の前の敵の喉元に喰らいつく。それこそが彼女から教わった“狂犬”の在り方なのだから。

「……」

ふと、背後に気配を感じて振り返れば、そこには小夏の姿があった。その額に巻かれた包帯は痛々しい。

「ああ、小夏ちゃんか……その傷は大丈夫？ 痛くない？」

「鋼太郎こうたろうに比べちゃ、こげん傷も、かすり傷みたいなんじゃけん」

「そっか。けど良かったよ、二人が生きていてくれて。さっきエノン先生から連絡を貰ったんだけど、鋼太郎くんも意識を取り戻したってさ」

こちらに向かっていそうだから、もう暫くすれば合流できるだろう。

「ほんとっ！」

彼女の表情がパツと明るくなる。

思わず飛び出したのは、標準語の本音だった。

「……あっ、いや。今のは違うんじゃない……フツ、フン！ あの生意気な後輩め。今回はくたばり損なったようじゃのう」

「小夏ちゃんのそういうとこ、私は大好きだよ。それで、私に何かようかな？」

小夏は猪突猛進に見えても、自分の邪魔になるようなタイピングで話しかけてくることは滅多にない。彼女の表情が少し硬いのは、問い掛けるのを躊躇っているからだろう。

話しやすくなるよう、少しおどけてみるか。

「なんでも聞いていいよ。今日のスーパー最年少エリート紅音ちゃんは機嫌が良いからね、秘密のスリーサイズから、初恋まで、なんだって答えてあげる」

「じゃ……じゃあ！ どげんして隊長はあの時、大久保利恵と言葉も交わさなかったんじゃない！」

仮説拠点での交戦時。利恵の態度は紅音の〈ハツキ〉が乱入する前後で明らかに変わっていた。冷酷に遠征部隊を壊滅にまで追い込んだ上級吸血鬼が、あの時ばかりは人間らしい表情を浮かべたのだから。

一方で紅音は最初に彼女を「化物」と罵ったキリ。あとは何を呼びかけられても無視を貫き、ハンドガンのトリガーを弾き続けた。

何の躊躇いもなく、一方的なまでにだ。

「……あれは利恵隊長に残った記憶をなぞって、ヘッタクソなモノマネを披露しているに

過ぎないからね」

紅音は、らしくないもない淡白な口調で吐き捨てた。

「というか私、隊長と特別仲が良かったわけでもないし」

利恵は多く隊員に〈FG〉の操縦技術を教えていた。西郷を筆頭に、自分より付き合いの長い隊員だっていくらでもいた筈だ。

「隊長は、ただ……………」

大久保利恵は、ただ自分に居場所を与えてくれただけの人物にすぎなかった。

紅音の両親は共に医療従事者であった。具体的に何をしていたのか、どんな顔をしていたのかも、もう覚えてはいない。二人は〈吸血鬼症〉の蔓延に際して、東京へと招集され、そのまま帰ってこなかったのだから。

その日から紅音は孤独になった。自分を引き取った親戚の元にも居場所はなく、そのまま逃げるように〈サツマハヤト〉へと入隊した。

——一匹でも多く吸血鬼を殺して、私も死ねたなら。

最年少ながらも、シミュレーションで異例のスコアを叩き出した少女の内心は、とても穏やかなものとは言い難い。

当時は大切な何かが壊れていたんだろうと、自分でも自嘲してしまう。

そんな折、利恵と出逢った経緯にも運命的な要素はない。ただ、その異例なスコアが彼女の目に留まって、〈ケロベロス小隊〉の一員に抜擢されただけなのだから。

「利恵隊長はよく分かんない人だったからなあ……デタラメに強いけど、どこか投槍で、何を考えているかもよく分かんない」

ただ一つ言えるのは、とても面倒な人であったことだ。

「美味しいものを食べなさい」、といつも紅音を連れ出しては、ご当地名物を食べさせられた。

「歴史を学びなさい」、と仙巖園や霧島神社せんがんえん きりしまじんじやに連れて行かれたのだから、一度や二度ではない。

「人との縁を大切にしなさい」と、西郷やエノンとの仲を取り持ってくれたのだから他の誰でもない彼女だった。

「……………」

そうこうしているうちに、いつしか鹿^カ児^コ島は紅音にとつての居場所になっていたのだ。

「初めての遠征でヘマをしたときに、吸血鬼の一撃から隊長が私を庇ってくれてさ。後で彼女の機体だけが回収されて、コックピットから遺体が消えてたことを聞いたとき……そのときから覚悟はとづくに決まってるんだよ」

紅音は組み上げた銃を構える。

引金に指をかけ、肺の中身を絞り出すように吐き戻した。

「私をあの人を殺さなきゃいけないんだ」

これ以上、あの手クソな物真似を見せられるのは我慢ならなかった。ならばこそ、彼女に戦い方を教わった自分が全ての因縁にケリを付けなければ。

「まあ……けど、正直勝てる気もしないなあ……隊長は私より強いし、もし負けちゃって私までもが化物になったなら、その時は」

「嫌じゃからなッ！」

食い気味に小夏が否定する。彼女の鋭い眼差しはジツと、紅音を睨んでいた。

「私も鋼太郎も、そげんことは絶対にしたくない。いくら隊長じゃろうと、許さんからのッ！」

小夏に言葉を遮られたのも、こんな風に面と向かって刃向かわれたのも、紅音にとっては初めてのことだった。

それが少し意外で。強張る指が少しずつ解けた。

「……そうだよね、ごめんね小夏ちゃん。……ヨシっ！ 暗い話は終わりにしようっか！」
パン！ と手を打って。紅音はガレージに格納された三機の〈FG〉に目を遣った。

「それにしても、エノン先生は凄いな。私たちが遠征に行っている間も予備パーツの調達や、改修プランを進めておいてくれたんだから」

紅音の〈ハツキ〉は足回りのパーツを高品質なものへと換装し、小夏の〈ミナツキ〉の盾もより重厚さを増していた。

蓄積された戦闘データをフィードバックした結果、彼女たちの機体はよりそれぞれの専用機にふさわしいマシンへと生まれ変わったのだ。

「けど、アレばっかりはズルいよね」

二機の隣。そこには見慣れぬ〈FG〉が鎮座する。

ブレードをより速く振うため、フレームが大型なものに再設計がなされているのだろう。それに比例してフレームを覆った装甲も分厚さと積載量が増し、黒く彩られた全身は合戦の最中を駆け抜ける豪傑の武者を思わせた。

データとして蓄積された薩摩示現流の戦い方を再現するための、最適な形だ。
「FG―零漆・試作型〈カンナツキ〉。一人だけ新型を貰えるなんて、鋼太郎くんも妬けちゃうなあ」

24

八月二一日 午前一時
水俣市 みなまたし 矢筈岳 やはすだけ・防壁周辺

これ以上、〈グラトニー〉を止めることは叶わない。既に幾つもの戦線は突破され、そこには大破した〈FG〉の残骸が残るだけだった。

防壁が倒壊すれば、それで鹿児島は終わりなのだ。都市はあの巨大によって踏み躪られ、人々は雪崩れ込んできた下級吸血鬼の群れによって食い漁られる。そうなれば、ここはもう誰の居場所でもなくなるのだろう――

最上級吸血鬼〈グラトニー〉の殲滅。それが温存された戦力に言い渡された命令であった。

温存された戦力は正規小隊が三つと、行動予備隊が五つ。今も尚、戦闘を続けている部隊の数を合わせれば、少しはマシな数字になるのだろうが、それでも充分な戦力とは言い難い。

だが、勝算が尽きたわけではない。温存された戦力はもう一つ。三ツ首の獣の如く、敵の喉元を食い破らんとする〈ケロベロス小隊〉が残されていた。

『いいかな、二人とも？ 私たちの目標は上級吸血鬼・大久保利恵 おおくぼりえを殲滅し、この雨を止めることだからね』

雨が止めば、狂っていた照準システムが回復する。そうなれば防壁に備えられた主砲の大火力によって、一気にこの戦況を押し返せる。

いくら〈グラトニー〉が巨大といえど、主砲はただ撃てば良い訳じゃない。狙いを定め、その急所に〈聖塵 せいじん〉からなる弾頭を振じ込む。そのためにも照準の回復は不可欠であった。



〈ケロベロス小隊〉の〈FG〉はそれぞれが駐機状態のまま、防壁側面の輸送台に胴体を固定されていた。

機体を固定するためのアーム部と、防壁のてっぺんに向かって伸びたレール部からなる輸送台は簡素な作りながらも、〈FG〉の巨大を上昇させ防壁の外へと送り出す設備だ。ただ、その有り様は高層ビルを清掃するためのゴンドラとそう変わらない。

「……本当にこんなので大丈夫なのかよ」

防壁は堅牢であることを何よりも優先して建設された。主砲やこの輸送台も所詮は後付けの代物であり、見てくれも悪い。鋼太郎が不安を覚えるのも当然である。

『何ビビってんのよ？ 前がレアなケースってだけで、防壁を超える遠征任務じゃ、この輸送台を使うことも珍しくないの。それとも戦闘機を使って空から降下する？ 途中で撃ち落とされても知らないけど』

通信の向こうから聞こえてきたのは、こちらを小馬鹿にしたような小夏こなつの声だ。

「……センパイは相変わらずセンパイで、なんか安心しました」

『何よ、その含みのある言い方は？ というか、あんたはもっと心配することがある筈でしょ。ぶつつけ本番の新型よ、ほんとにちゃんと乗りこなせるの？』

鋼太郎に与えられた新たなマシン〈カンナツキ〉。そのコックピットには回収された〈フミツキ〉のパーツが転用されている。

操縦桿の握り心地も、シートの硬さも、そのどれもが鋼太郎にとっては馴染み深いものである。チューブから〈刃血じんけつ〉を抜き取られる感覚さえも——

「……………」

強いて懸念事項を挙げるのならば、装甲各部に積載される新装備を使いこなせるかどうかだ。

鋼太郎の戦闘データを元に作成され、今の〈ケロベロス小隊〉に欠ける要素を補うための新装備は、当然自分だけのワンオフ品だ。ざっとマニュアルを読んだが、前例なんてない。使いこなせるかどうかは、ほとんど幸太郎のセンスにかかっていた。

だが、選ぶ答えもすでに決まっている。

景気付けとまでは言わないが、いつも愛食している携帯食料を口にしようとしてポケットを弄った。

「やるっきゃねえだろ……ぶつつけ本番だろうと、なんだろうと。ここで死ねば、全部終わりなんだ」

『潔い良いね、鋼太郎くん。……けど、私はそういうのは好きになれないかな』

会話に割りこんだのは紅音だ。彼女は二人の機体を交互に見遣る。

『慣れない分は小夏ちゃんがサポートしてもらいなよ。これは隊長命令だから、文句はいわせないよ』

『むう……そいが隊長の望みだと、言うのなら』

『任せたま。……ところで二人とも。ちょっと上を見あげてごらん♪』

その声を聞くだけでも〈破月〉の Cockpit で、紅音がニヤニヤとした笑みを浮かべている姿は容易に想像できた。

頭上にまで配された計器類やケーブル。その隙間に出来上がる物陰に何かがある。簡単には外れないようテープで固定されているのを見る限り、彼女が故意的に仕組んだもので間違えはない。

『じゃーん！ 鹿児島名物、かすたどん！』

それは鋼太郎にとっても見慣れたお菓子であった。小綺麗な包装紙を剥がせば、そこには柔らかな生地でクリームを包んだ「かすたどん」がちょこんと乗っている。

『お腹が空いてはなんとやらってね！ この状況なら君も食べる以外の選択肢は選べないだろう、鋼太郎くん？』

少し、笑みが漏れてしまった。それが彼女たちに出会う前の自分であれば、「ふざけるな」と一蹴していたことだろうに。

鋼太郎は取り出した携帯食料をポケットの奥へと押し戻して、口の中に「かすたどん」を放り込む。

ほんのり広がったのは優しい甘さだ。口元の食べカスを軽く拭って、通信越しに言葉を返した。

「一つじゃ足りません。これじゃあ、余計に腹が減りますよ」

『そう？ なら、今回の一件が片付いたら、次はもっといっぱい用意しておくよ』



『……それじゃあ、そろそろ行こっか』

輸送台がゆっくりと上昇を始める。そのスピードは徐々に勢いを増し行き、全身には大きな重圧が押し掛かる。

「このッ……」

奥歯を噛み締めて、負荷を堪える。そして三人はそれぞれの操縦桿をキツく握った。

『電圧よし。油圧よし』

『エンジン回転正常。^{ノーマル}関節機構ロック解除っ！』

「^{オペレーティングシステム}OSプログラム起動。——アクティベート・スタンバイッ！」

それぞれのカメラアイに淡い翡翠色の光が灯る。〈ケロベロス小隊〉が今、戦場に解き放たれたのだ。

25

先陣を切るのはいっだって小夏^{こなつ}だった。〈ミナツキ〉の堅牢な装甲は突き立てられた牙をへし折り、構えた大^{ライオットシールド}盾は眼前の敵を薙ぎ払う。

次いで飛び出したのは、紅音^{あかね}の駆る〈ハツキ〉だ。モニター上の標的に照準^{レイトイクル}を合わせてから引き金を引くまで。そこに一才の躊躇はない。

立て続けに三度引き金を引いては、標的の頭部だけを精密に弾き飛ばす。

戦場は数百を超えるであろう下級吸血鬼の群れで溢れていた。それが〈グラトニー〉によつて、ここまで扇動されてきた個体なのか。それとも、この戦場で〈^{ヴァンパイア・シンドローム}吸血鬼症〉

に感染した〈サツマハヤト〉の隊員かを伺い知る術はない。

烟る血と雨の匂いは戦場の凄絶さを物語る。

辺りは敵味方を問わず死に満ちて。絶えず足元を取られるのが、泥なのか、血溜まりなのかもハッキリしない。

『気に入らん。不愉快じゃ！』

『そうだね、小夏ちゃん。……けど、私たちは私たちの役割を全うするしかないんだよ』今の二人にできるのは、ただ目の前の敵を打ち倒すことだけだった。

そこに中途半端な優しさはいらない。一刻も早く、人の成れの果てを屠ることこそが、最大の誠意であった。

そして、雨滴に濡れたブレードが淡く煌めく。踏^{キックペダル}板を強く踏んで、鋼太郎が疾駆する。

「———テメエの性能を見せてみやがれ、〈カンナツキ〉ッ！」

木々の隙間を縫いながら、軌道上に据えた下級吸血鬼を袈裟に切り払った。

その一閃は、紅音とは小夏だけの〈ケロベロス小隊〉に欠けていた戦場での突破力を補

うものでもある。

「ツツ……!!」

〈カンナツキ〉は馬力は〈ミナツキ〉に劣らない。単純な瞬間出力だけならば、高機動をコンセプトに置いた〈ハツキ〉にも追いつく程だ。

そこまでのオーバースペックを確立する要因は、予め幾つかの制限装置リミッターを廃していることにあるのだろう。

そんな無茶をすれば当然、パイロットにも相応な負荷が振り掛かる。

Gによる反動。

ダンパー吸振器によって緩和しきれない衝撃。

そして両腕に繋がれたチューブからは、いつも以上の〈刃血〉が吸い上げられた。

「やっぱ……どっちが吸血鬼かわかんねえな、お前はッ！」

呑気にブレードを振っている余裕はない。もっと集中を研ぎ澄ませ。

「けど気に入ったぜ、クソ野郎ッ」

三機は互いに背を合わせ、周囲を警戒する。

『鋼太郎くん、彼女は……上級吸血鬼・大久保利恵おおくぼりえは見つけられそう?』

〈ケロベロス小隊〉は、〈グラトニー〉と他の部隊が交戦を繰り広げる真っ只中から少し離れたポイントに戦力を展開していた。

〈グラトニー〉だって、ここで利恵という端末を失うわけにはいかない。

〈サツマハヤト〉がギリギリまで〈ケロベロス小隊〉という駒を温存したように、彼女も戦場からは少し外れて、ジッと息を潜めているであろうというのが紅音の見解である。

だが、肝心なモニターは情報で溢れていた。

絶えず味方が倒れては、下級吸血鬼の反応を示す「X」のアイコンが次々と増えてゆく。さらには悪天候、山中、夜間という悪条件下で、たった一つの標敵を見つけ出すことは困難を極めた。

「下級吸血鬼の数が多すぎて、正直それどころじゃ、」

『なら、私と隊長がフォローしてあげる。それにあんたの新装備なら、やれるはず!』

〈カンナツキ〉の分厚い装甲が、数枚剥離する。僅かながらの〈刃血〉を蓄えた装甲達は、折り畳まれた翼を展開し、宙に浮かび上がった。

ドローンビッド——各種センサーを搭載した自律型情報収集端末だ。

鋼太郎の真骨頂はその鋭利な五感にこそある。〈刃血〉の濃さでも戦闘経験でも周囲に半歩劣る鋼太郎が、〈ケロベロス小隊〉の面々に並び立てるのは、その鋭い感覚があつて

こそだ。

〈カンナツキ〉の開発を行ったエノンは、そんな鋼太郎の性質を早期に見抜いていた。そして、紅音と小夏だけの〈ケロボロス小隊〉には、敵を見つけ出す索敵能力が欠けていたことも。

〈カンナツキ〉はブレードを振るうための強靱な構造と、情報収集に長けたドローンの操作機能を兼ね合わせることで〈ケロボロス小隊〉の先鋒として完成されたのだ。

六機のドローンたちは、蜘蛛の子を散らしたように飛び去っていく。

その間に、〈カンナツキ〉の防御性能は著しく低下するものの、より広範囲を詳細に索敵することが可能となった。

「全部わかるぜ……風切り音……それに僅かな熱量の変化も、」

ドローンたちは全て、拡張された鋼太郎の視覚であり、聴覚であり、嗅覚である。

そして、解き放たれたドローンたちはこちらに迫る気配をすぐに捕捉した。

「————ターゲットは、隊長のすぐ後ろだッ！」

振り返ろうとした〈ハツキ〉の左脚を、鋭利に研ぎ澄まされた翼の鋒が掠める。闇の中で息を殺し、真後ろにまで接敵していたのだろう。

『各機、散開ッ！』

紅音の指示が早いのか、三機は同時にその場を離れた。獲物を失った利恵の翼はそのまま地面に叩きつけられ、大きくうねる。

『釣れないな。せっかく、また会えたのに』

今のは明らかに紅音に向けた言葉であろう。

だが彼女は無視に徹した。あれはもう大久保利恵であって、大久保利恵ではないのだから。

『利恵隊長……貴女の身体をこれ以上、化物の好きにはさせないから』

いくら懐かしそうな瞳でこちらを見つめたって、それは残された記憶を元にした猿芝居に過ぎない。

『二人とも、プラン通りに行くよッ！』

『了解ッ』

たしかに利恵の熱操作は万能にも思える能力だ。上げるも下げるも思いのまま。攻撃は勿論、防御や攪乱にだって応用できる。だが、いくら万能であっても底無しだなんてことはない。

利恵の能力は今、気流や湿度を熱によって故意的に変動させ、雨を降らせ続けることにリソースを裂かれていた。

彼女には他に能力を用いる余裕がないのだ。その証拠に彼女は先程から翼の形を変化させるだけで、熱操作による攻撃を行わない。それどころか彼女の動作自体が、以前遭遇し

たときより単調になっているように思えた。

「ここまでも紅音隊長の読み通りッ！」

鋼太郎は二機のドローンを突っ込ませた。あくまでも情報収集に特化したドローンには攻撃力が備わっていない。だが、その詳細を知るのもまた鋼太郎たちだけだ。

利恵にとっては未知の装備。急に爆発しても、隠された刃によって切り付けられても、不思議じゃない。変則的な軌道で襲うドローンは彼女の警戒心を分散し、相応のストレスを与えた。

『チッ……目障りな、羽虫だ』

三人で絶えず攻撃を行い、利恵には一切の余裕を与えない。数で勝る利点を最大限に活かしたプランだ。

このまま押し切れれば良し。彼女が熱操作を用いて反撃しようすれば、雨を降らせ続けることも不可能になるのだから、砲台の照準システムを回復させるという目的も達成される。

どちらの結末に転げようと、“狂犬”が率いる〈ケロベロス小隊〉は戦果を残すことになるだろう。

『せっかく、紅音と再会できたんだ。邪魔をしてもらいたいんだがな』

「そんな、テメエの都合を俺が知るかよッ！」

〈カンナツキ〉が推進器^{スラスター}を吹かせて、加速する。

ブレードの先端があと僅かで喉笛を切り裂かんとする直前で、利恵は横向きに大きな回避運動を取った。

『その剣術ならもう見切った。爆発する剣先も』

彼女は〈鬼灯一型〉^{ほおずきいちがた}の爆風と、その破片の飛距離までを計算したのでろう。――そ

れがブラフであるとも思わずに。

「リベンジと行こうぜ、小夏先輩ッ！」

『あんたが私に命令すんなっつーの！』

〈カンナツキ〉はブレーキをかけないまま利恵の脇を抜く。そして、その直線にはシールドを固定した〈ミナツキ〉がいた。

小夏は各部の間接機構を取って固定し、こちらを待ち構えている。

『「いつせーのでッー」』

鋼太郎は操縦桿を手前まで引き込んで一八〇度旋回。シールドの側面を蹴って、強引に機体の軌道を切り替えた。

スラスターは青白い尾を引いて、再び薩摩示現流の剣筋が迫る。

『ぐうう……………!!』

利恵もまた刀剣状に変化させた二枚の翼で、その一撃を受け止めた。

互いに譲ることはない。雨滴に叩かれながらも、刀身同士が小さな火花を散らす。

「爆ぜろッ！ 鬼灯一型ッ！」

「させないッ！」

形状構築——シバリ。もう二枚の翼が包帯状に変化して、ブレードを包みこんだ。

これならば爆風も封じ込められる。そう確信した彼女が最後に残った二枚の翼を鋭利に研ぎ澄ました瞬間。——視界の端が紅と黒のシルエツトを捉えることになるのだろう。

本命の一撃は〈カンナツキ〉のブレードでも、〈ミナツキ〉の盾でもない。

『二人の作ってくれたチャンス。無駄にはしないから』

背後へと回り込んだ〈ハツキ〉が、利恵の背に照準を合わせ、引き金を引いた。

26

墮ちた葉莢は熱を帯びて。撃ち放たれた弾丸は利恵の首から下を消し飛ばした。

手足は四散し、〈ハツキ〉は存分に返り血を浴びる。足元に転がる首はそのまま、あまりにも呆気なく動かなくなった。

「……………これで良かったんだ」

操縦桿を握る腕は、微かに震えていた。

〈FG〉の動力源が〈刃血〉であったことは幸いかもしれない。抜かれていく血液と共に、

胸に渦巻く感情も少しずつ整理をつけられるのだから。

紅音はもう一度、「これで良かった」のだと言いつき聞かせた。

鋼太郎の変則的な斬撃から、自分が引き金を引くに至るまで。地味ながらもファインプ

レーを見せてくれたのは小夏であろう。

彼女の 大盾は装甲が微かに展開していた。そこから香る血の匂いが、自分の接近

を直前まで利恵に悟らせなかったのだ。

「……」

利恵が倒れたのだから、この雨も長くは続かない。そうならば、〈ケロベロス小隊〉の次なる目標も自然と定まる。侵攻する〈グラトニー〉と、それに付き従う下級吸血鬼の軍勢だ。

「弾も血もまだ充分にある。……推進剤やバッテリーだって」

だが、不意に機体のセンサーが妙な反応を示す。

前方——残された利恵が頭部だけで微かに動いたのだ。

『おかしいな、紅音？ 上級吸血鬼を殺すとき、最優先に潰すべきは心臓ではなく、頭だと。私は口酸っぱく君に教えたはずだぞ』

形状構築——シンゾウ。傷口から無数の血管が伸びて、それが結び合い、拳代の肉塊を形作る。

吸血鬼の再生は心臓を起点とする。だから真っ先にそこを狙うのが、吸血鬼を殲滅する上でのセオリーとして確立された。

だが、上級吸血鬼を相手取る場合はその限りではない。再生の起点となるのは心臓でも、どの程度修復を行うか、またどのタイミングで修復を行うかを決めるのは、頭蓋に内包された「脳」なのだから。

『ああ、なるほど。口ではどんなに強がっても、内心では紅音だって、私のことを殺したくないだね』

形状構築によって作り出された心臓を起点に、利恵の再生が始まる。

まずは骨格を形成し、次いで筋肉を。最後に吸血鬼の象徴ともいえる翼を。

『ッ……!?!』

紅音は咄嗟に〈ハツキ〉を後方に下げる。

『ハンドガン撃つのに充分な間合い。うん。良い判断だね、私の教えた通りの』

ほんの一瞬遅れながら、鋼太郎たちもそれぞれの武器を構えた。

『コイツ、不死身かよッ……!?!』

「ごめん、鋼太郎くん……せっかくの二人が作ってくれたチャンスを、私は……」

どう考えても、今のは自分のミスだった。

さっきの一瞬で心臓から脳に照準を合わせ直すことなど造作もない。なんなら、握りしめた二丁のハンドガンで頭部と胸部の両方を同時に撃ち抜けた筈。

「……何が、覚悟はできていたよ。……笑わせないで」

彼女は無意識のうちに殺意にブレーキをかけていたのだ。

『「狂犬」は目の前の獲物に喰らい付いてこそ、と教えたんだが……どうやら、今の君にはそれが出来ないらしい』

そんな本心を見透かしたかのように、利恵は笑う。

「だからッ……似てないんだって言ってるでしょッ！」

『そうかしら？ 貴女の前に立つ上級吸血鬼・大久保利恵は、笑い方も、声のトーンも、そして、その在り方さえも貴女にとっての“狂犬”の筈よ』

照準修正。〈刃血〉の流れを両脚部に集約。各部機能のリミッターと安全装置を解除。〈ハツキ〉は目の前の怪物を、全力で迎え討つつもりだった。

『それに君たちは一つ誤解をしていないか？』

だが、利恵は踏み出そうとしない。その両腕には僅かに陽炎が揺れて、

『確かに私の熱操作には相応の集中力が必要だし、今はその殆どを天候操作に費やしている。だから熱膨張によって空気を押し出すことも、蟹気楼によって幻を作ることも、その逆に熱を奪い取ることも難しい……けれど、私が一度でも熱を操れないと言ったか？』

彼女の周辺に降り注いだ雨が一瞬にして蒸発する。

両腕から放たれる膨大な熱波は、鋼太郎の〈カンナツキ〉を、次いで小夏の〈ミナツキ〉をこの場から弾き出した。

「鋼太郎くんッッ！ 小夏ちゃんッッ！」

『ほら、余所見をしない』

利恵が一瞬にして間合いを詰める。垂直に跳んで、機体の頭部を翼で打ち付けた。

「くっっ……！！」

今ので視界の左半分を潰された。モニターには砂嵐が吹き荒れ、警告がうるさいくらいに鳴り響く。

『怖がらなくてもいいんだ。紅音ならきつと、強い上級吸血鬼になれる。私が保証してあげよう』

次いで、紅音を襲うのは赫灼の熱線だ。右肩を穿つ衝撃に、軽装な〈ハツキ〉は軽々と弾き飛ばされた。

木々を薙ぎ倒しながらに二転、三転。泥に塗れて、彼女は計器に額を強く打ち付けた。辛うじて体勢を立て直すも視界の半分が血に濡れる。全身が軋むように痛んで、口の中には錆びた鉄の味がじんわりと広がる。

「……………べっ！」

ああ……痛みの中でようやくと思ひ出した。

かつての〈ケロベロス小隊〉の隊長が、どうして自分に“狂犬”としての在り方を教えたのかを――



今の一撃で〈ハツキ〉は随分と戦場を離れてしまった。それは、先ほどの熱波を受けた鋼太郎たちも同様であろう。

「さっきので通信機能も完全に死んじゃったか……狙いは私たち分断、と言うか私を孤立させることみたいね」

利恵が〈ハツキ〉の頭部を狙ったのもその為であろう。

〈FG〉の頭部はセンサー類や通信機器が集約されている。そこを叩けば助けを呼べなくなることも、元〈サツマハヤト〉である彼女は当然知っていた。

「……ねえ〈ハツキ〉。私の血なら全部上げるから。だから、私を勝たせてよ」

フレームを軋ませながらも、操縦者の声に応えるよう〈ハツキ〉は立ち上がる。

そして紅音は、一步、また一步と、こちらに歩み寄る上級吸血鬼をキツく睨んだ。

『やはり、まだ立てるか』

「当たり前でしょ。私は〈ケロベロス〉小隊の隊長で、『狂犬』なんだからッ！」

構えた二丁のハンドガンは、目の前の標的を捉える。立て続けに三度引き金を引いて、撃ち放たれた弾丸にはそれぞれの狙いがあった。

一発目はあくまでも牽制。二発目は左への回避を促すブラフ。そして、最後の一発が左へ飛んだ標的の頭部を撃ち抜く本命の弾丸である。

ほんの一瞬で組み上げた勝利へのプロセス。

だが、それは皮肉にも、目の前の怪物に教わった戦法であった。

『いけない。つい、懐かしさと甘い香りに誘われそうになってしまう』

利恵もまた翼を円盤状の盾に変え、弾丸を弾いた。

「まだだッ！ まだ弾は残ってるッ！」

〈ハツキ〉はハンドガンの引き金に指をかけ。それをめいめいっばいの力で投げ捨てる！

どうして、そんなことをするのか？ それはほとんど直感だ。

薬室にはまだ〈刃血〉の充填された特殊弾頭が残されていた。それを自ら放棄するなど、自殺行為だが、紅音は己のが直観でそうすることを選んだ。

「乗りなさいよ、挑発に！」

利恵の意識がほんの一瞬だけ、投げ捨てられた銃の方に向く。どうせ、射撃に込めた狙いだって読まれているのだ。ならばいっせ、その鋭すぎる警戒心を利用してもらう。

踏^{キックペダル}板をベタ踏みにして、〈ハツキ〉がスタートダッシュを切った。

「思考を回せ、私。勝つためのイメージを描け」

利恵はどうして、紅音と〈ケロベロス小隊〉を分断することを選んだのか？ その意図を読み解くと共に、一つの憶測を立てることができた。

彼女にも余裕が残されていないのであろう。いくら上級吸血鬼とさえも身体の再生や、能力の行使には相応の体力を消耗する。

単純な耐久性ならば、全身が巨大化し、分厚い筋骨の壁に守られている下級吸血鬼の方に軍配が上がると言ってもいい。

「死ねよッ！ 猿真似野郎がッ！」

鈍い音を立てて。〈ハツキ〉の爪先が、利恵をガードごと蹴り飛ばした。

今の手ごたえで、憶測だったものが確信に変わる。

自分なら殺れると。あと少して“狂犬”の牙が、目の前の化物に届くと。

レーザーに装甲を焼かれ、足元を氷漬けにされようと、〈ハツキ〉はその執念で戦場を駆けた。

『くッ……！』

紅音の視界がぐにやりと歪む。報告にあった熱操作の応用による蜃気楼であろう

「いまさら、幻なんてッ！」

瞳に映り込んだ幻が、どんなに悍ましいものであったとしても“狂犬”は迷わず進み続けられていただろう。

それが〈サツマハヤト〉の隊服を着た、かつての大久保利恵の幻でさえなければ――

「ウソ……」

翼も、牙もない。かつての恩師の姿に紅音の殺意が綻んだ。機体の加速が一瞬緩む。

そして、それを嘲り嗤うのが上級吸血鬼である。

『形状構築――クシザシ』

槍先が〈ハツキ〉のコックピットを貫き、流れた鮮血に、利恵は恍惚の表情を浮かべた。

27

「ぐっ……」

鋼太郎こうたろうはゆっくりと〈カンナツキ〉の上部を起こさせた。

ドローンビットは一機が喪失。三機が木々にぶつかり大破するも、残った二機はまた自分の制御下にある。

「……損傷率二〇パーセント以下……まだ、動けるな」

雨に打たれ、泥と傷だらけになった機体の姿はとも万全とは言えないが。

それに身体中の骨も鈍く痛んだ。きつと機体を弾き飛ばされた拍子に、全身を強く打ち付けたのだろう。

モニターを見遣るも周囲に紅音^{あかね}たちの反応はない。ミニマップを見ても、自分一人だけが随分と、遠くまで飛ばされたことが分かる。

「どうする……？ 隊長たちを探るか、それとも、」
不意に鋼太郎を乗せたシートが大きく揺れた。今のは明らかにエンジンの振動じゃない。大地そのものが揺れ動くような感覚に、〈カンナツキ〉が転倒しかける。ブレーキを蹴って、踏みとどまるも機体のカメラアイは巨大なシルエットを捉えた。

それは唾液の滴る顎^{あご}だ。

鋭利な牙が生え揃い、その向こうには大きく開かれた口内がある。——最上級吸血鬼〈グラトニー〉の下顎であった。

鋼太郎はその迫力に思わず言葉を奪われる。

下顎があれば当然、それと同スケールの上顎も。そして、額に埋め込まれた瞳がゆっくりとこちらを見下ろす。

「……………っ！」

目が合った。

それは恐らく鋼太郎の錯覚であろう。閉ざされたコックピットの中でモニター越しに外を眺める自分と、他を歯牙にもかけない化物の視線が交わるわけもないのだから。

だが、鋼太郎はプレッシャーに吞まれてしまった。以前、シエルター内で遭遇した時以上の緊張が全身を震わす。

「マジかよ……………こんなのドンピシャ過ぎるだろ……………」

鋼太郎の隣には紅音も、小夏^{こなつ}もいない。それどころか、他の〈サツマハヤト〉の隊員でさえ。周囲に横たわるのは、執拗にコックピットを潰された〈フミツキ〉の残骸だけだ。雨が止まない以上は、砲撃による支援も期待できなかった。ここには自分以外、誰もいない。

鋼太郎は孤独^{ひと}り、戦場に立たされる。

「……………」

いや、だからこそであろう。目の前の災禍から時間を稼ぐのも、その心臓に刃を突き立てるのも、いま、ここに居る鋼太郎にしか出来ないのだ。

利恵との接戦で消耗した〈鬼灯一型〉のブレード部を、腰部に備えた予備へ換装。煌び

やかな〈聖塵〉の刃をゆつくりと目の前の標的に向けた。

「何ビビってんだよ。アレは俺の仇だろうがッ！　アレが俺の居場所を滅茶苦茶にしやがったクソ野郎だろうがッ！」

まず、自分が何のために剣を握っているのかを考える。

薩摩示現流は威力と速さに特化した実戦向けの複合剣術。八相に構えたブレードの質量

をそのまま叩きつけるような一閃は、高い再生能力を誇る吸血鬼に対して、極めて有用であった。

次に、最悪のパターンを想定しろ。

もしも、このまま雨が止まなかったのなら。要は紅音が戦死した場合、防壁の砲台は狙いが定まらないままで終わる。

このまま〈グラトニー〉が侵攻を続ければ、いつかは照準システムに頼ることなく、狙ったポイントに砲弾をブチ込めるまでの距離になるかもしれない。しかし、それだけの侵攻を許せば鹿児島もタダでは済まないであろう。

「……いや、それは違うな。……俺たちの隊長が負けわけねえだろ」

紅音は勝つ。この雨も止む。

砲撃が始まった際、より迅速かつ確実に〈グラトニー〉を屠れるよう、鋼太郎はここで刃を振るうのだ。

「俺があつた化物を、少しでも削ってやるよッ！！」

〈グラトニー〉もまた、自らに向けられる殺気には敏感であった。目障りな砂利を弾こうと、意識を向ける。

現在。〈グラトニー〉の背から発現した翼に、飛行能力はない。

自身の巨大を二枚の翼だけで飛ばすのは、体力の消耗が激しく、非効率と判断したのであろう。進化をやり直す過程で、翼という形を残しながらも、その内部はより攻撃的な器官にデザインし直されていた。

自ら皮膚を突き破り、鋭利な骨の先が露出した。それを筋肉の収縮と、血流の勢いで撃ち出す。言うなれば、対〈FG〉や対航空戦力を想定したであろう、カルシウムのミサイル弾頭だ。

「野郎ッ!?　だったら、こつちも飛べよ、ドローン！」

残された二機のドローンが飛翔。備えられたセンサーが弾道を観測、着弾点を演算する。〈カンナツキ〉は寸でのところで、迫るミサイルを避わしてみせた。

「周りの〈フミツキ〉たちは、アレでコックピットを潰されたのか」

その狙いは精密であった。ドローンによる索敵能力と、鋼太郎の優れた五感を持つてしても、少しでもタイミングを誤れば、串刺しにされていただろう。

撃ち出した骨を即座に再生しているのだから、弾切れもない。

二射目、三射目と、次々に迫る質量塊をバックステップで避わずも、四発目が機体の脇腹を抉った。

辛うじて〈刃血〉じんけが巡るコード類は破れなかったが、装甲を引き剥がされた。

「うぐっ……！ 皮一枚が何だってんだよッ！」

左腕を大きく振るって、重心のベクトルを変動。そのまま崩れかけたバランスを立て直す。

このままではジリ貧であろう。だが、手にしたブレードで脚や外殻を斬りつけても、大したダメージは期待できない。

叩くなら、脳天だ。

「イチかバチか……やってやるよッ！」

〈カンナツキ〉は自らの手首にブレードを押し当てる。そして滴る〈刃血〉を追隨するドローンの装甲に付着させた。

「野郎の無尽蔵ミサイルは厄介だが、何よりヤバイのは、その狙いの制度だ」

またも鋼太郎に向けて、ミサイルは迫る。こちらが機体を左に逸せば、その弾道も左に逸れた。アレには追尾性能も備わっているのだろう。

では何を指標に、こちらを追尾しているのか？

〈グラトニー〉から見て、鋼太郎は文字通りの虫ケラだ。それを相手に、細々と狙いを定めているとも思えない。

ならば、肝心な追尾の条件は何だ？

「機体の熱量？ それとも、動くものに反応している？ ……いや、どっちも違えな」

目の前の怪物もまた〈吸血鬼症〉ガブンバイア・シンドロームに侵された一個体に過ぎない。ならば、その指標も決まっているようなものだ。

〈刃血〉じんけつを塗布されたドローンビットが割り込み、弧を描けば、ミサイルの軌道もそれに吊られた。吸血鬼の本能が、より芳醇な血の香りに惹きつけられるのだ。

鋼太郎はモニター画面を指で弾く。ドローンの挙動をマニュアル操作で設定。思うがままに、飛来するミサイルを誘導する。

「思った通りッッ！」

〈カンナツキ〉は、ぬかるんだ足元を蹴って、大きく跳躍する。

単機の推進器スラスターの出力だけでは、到底〈グラトニー〉の脳天には届かないであろう。

だが、それも足場があれば別だ。

それはまるで、曲芸のように。ドローンによって軌道を誘導されたミサイルを踏台代わりに、〈カンナツキ〉はさらに高く、跳躍する。

「——獲った!!!」

鋼太郎はブレードを構えた。その鋒の延長線上には〈グラトニー〉の頭部がある。外すわけがないのだ。

直後、咆哮が耳を劈く。

「……………は？」

四脚から二脚に、〈グラトニー〉がその巨体で立ち上がった。たった、それだけだといふのに吹き荒れる風圧は〈カンナツキ〉を弄ぶ。

警告を告げるアラートがなっているのであろう。機体内は真っ赤に染まるも、何も聞かえない。

そのまま鋼太郎は空中で機体のコントロールを失った。

28

「ああ……やはり、この身体の特性は厄介だな」

利恵りえはボロボロの身体を引き摺る。〈FG〉に蹴り飛ばされたのだから、この程度で済んでいる方が幸いなのだろうか……。

人間の姿と理性を保ち続ける分、上級吸血鬼には下級吸血鬼のような身体の頑強さがない。その代わり再生能力に秀でてはいるのだが、今はその傷を治せるだけの体力も残されていなかった。

再生範囲を脳と心臓、並びにその周辺の筋骨や血管を優先。破れた翼や、折れた手足は後回しだ。

「……………」

血を拭って、彼女は大破した〈ハツキ〉に目をやった。

無様なものだ。もともと装甲を纏わない分、ひしゃげたフレームが目立ってしまう。頭部のカメラアイを両方とも潰したのだから、あの内部は暗い棺桶とそう変わらない。

そして、関節からは〈刃血じんけつ〉が滲んでいた。

「あの娘の血は、特別濃かったからな」

鋭い牙の先からは、涎が滴った。

いけない。優先順位を履き違えては。

頭を振って、理性を保つ。変形したフレームの凹凸に手足を掛けながら、這い上がった。

「……待たせて、ごめんね。……私が死んで寂しかったろ、紅音。けど、もう大丈夫だ」

彼女はずっと強くなったのだから。

もう、生き血を吸るような機械に身を包む必要もない。また二人で戦場を駆けることだって簡単だ。

「確かに私は、あの最上級吸血鬼の端末に過ぎない。けどね、この身体に残る記憶も、気持ちも、全部嘘じゃないんだ。——その証拠に私はいつも君を案じていたんだよ。ど

この馬の骨かも知れぬ下級吸血鬼に、喰われてしまうのではないか、とね」

仮に〈グラトニー〉の謀が上手くいかなかったとしても、鹿児島にはそう遠くない未来、別の最上級吸血鬼が飛来していただろう。

〈サツマハヤト〉の組織力にしたって、将来的な〈FG〉の性能にしたって、必ずどこかで限界が来る。吸血鬼の殲滅も、奪われた生存権の奪還も、そのどれもが現実的な話ではない。

いつかは防壁が崩され、彼女の居場所は失われてしまうのだ。

ならばいっそ。

「紅音。いつか君が殺されてしまうくらいなら、私が君を化物に変えてやる。そして、君にまた新しい居場所を与えよう」

利恵は〈ハツキ〉のcockピットまで登り詰めた。折れた腕ではハッチを剥ぎ取れないと、右腕を再生する。

紅音には少し痛い思いをさせてしまうかも知れない。残りの〈ケロボロス〉小隊のメンバーを分断してしまったことに関しても、本当に申し訳なく思っている。

「紅音の隊員なんだ。あの二人もきつと良い、上級吸血鬼になれると思ったんだが……そうだ！ 君が生まれ変わったなら、二人を探しに行こう。賑やかな方がきつと楽しいだろうから」

利恵はcockピットの装甲板を荒々しく引き剥がした。

そこにあるのは額から血を流す紅音の姿と。——そしてポロポロになった自動小銃の銃口であった。

「それは私の……!?!」

降りしきる雨の中、一発の銃声が空気を震わせた。

利恵の額を焼けるような痛みが突き抜ける。身体全身が気だるく、めまいもした。あの

銃に装填されるのは、恐らく〈聖塵〉の弾丸だ。

「偶然とは言え、鋼太郎くんはまたも、こんな私にチャンスをくれたみたいだ」

木々の影には〈カンナツキ〉のドローンビットが浮遊する。恐らくは隊を分断された際に、この一機だけがコントロールを離れ、ここに取り残されたのであろう。

ドローンによって観測された情報は小隊内で共有される。お陰で、頭を潰された〈ハツキ〉も外の状況を伺うことができた。

利恵の警戒心が最も解かれるであろうタイミング。そこを撃ち抜くため、紅音はずっと息を殺していたのだ。

エンジンを貫かれ、〈ハツキ〉が戦闘力を失った瞬間。モニターの傍に鋼太郎のドロンの反応を捉えた、その瞬間から今に至るまで。

「待っていたよ。化物」

彼女は容赦なく引き金を引き続けた。その瞳には涙を溜めて、指先を震わせながら。それでも狙い定めた照準に一切のブレはない。

「ツツ……どうしてツ、どうしてなのツ!? 紅音ツ!」

スライドが跳ね上がり、銃口からは硝煙が仄かに揺れる。

「私はこんなに、君のことを想っていたのにツ! どうして、君は私は拒絶するんだツツ!!」

「……そんなの決まってるじゃない」

時代遅れ自動小銃の威力はたかが知れている。利恵を怯ませることは出来ても、全弾を撃ち切った程度では殺すまでに至らない。

だから、彼女はすぐに次弾を装填した。

「貴女にはわからないんですよ。どうして利恵隊長が私に狂犬としての在り方を教えてくれたのか?」

「それは……」

「自分の全てをただ戦うことに集約させるなんて、本当にイカれた在り方よね。……だけどね、隊長は何度も私に「そう在れ」と言い聞かせてくれたの——最後の一瞬まで、私が生き残れるようになるのツ!」



「ああ……そうだった」

それは元〈サツマハヤト〉の隊員・大久保利恵が〈吸血鬼症おおくほに罹患してからの

記憶。

上級吸血鬼として化け物に生まれ変わった彼女は、人の姿と理性を残したまま吸血衝動に際吞まれた。鋭くなった牙を突き立て、生き物の血を啜りたくて堪らないのだ。

そんな自分が、もう元の居場所に戻れないことは明白だった。

大破した〈フミツキ〉のコックピットに〈ケロベロス小隊〉のワッペンと愛用した拳銃を残し、彼女は歩き出す。

操れる異能与異常なまでの再生能力は、遭遇した下級吸血鬼を屠るために使った。死場所を見つけ、息を引き取るその瞬間まで、一匹でも多くの化物供を道連れにしようとしたのだ。

彼女は赤黒い血肉に塗れ、孤独に戦場を舞う。

時には同じ上級吸血鬼に巡り合うこともあった。再生能力が高すぎるあまり、自分では死にきれない少女の個体だ。

「私を殺してほしい」そんな願いも心良く了承して。

体力と精神を擦り減らしながらに、彼女は化物に成り果てようと〈サツマハヤト〉としての矜持を守り続けたといえよう。

だが、彼女は力尽きる寸前にあのシエルターへと辿り着いてしまったのだ。

上級吸血鬼も所詮は、最上級吸血鬼の端末に過ぎない。その端末がどれだけ崇高な信念を抱いていようとも。歪曲させるのは簡単だ。

——シエルターの最奥に潜む本当の化物に精神を犯され、都合の良い操り人形にされるまでにそう時間は掛からなかった



「ねえ、化物……確かに貴女が私を想ってくれる気持ちに嘘はなかったと思う。けどね、本当の隊長ならきつと私に『生きる』って言ってくれるの。人として私が、私の居場所に居られるよう」

だから、彼女の演技は似ていなかった。

いくら脳に残った記憶を辿ろうと、秘められた心情を模倣することは出来ない。表面だけを小綺麗に取り繕ったメッキと同じなのだ。

理恵がここで紅音を殺すのは簡単なことだった。その動体視力で銃弾を避け、その白い首筋に牙を突き立てるだけでいい。そうすれば傷を治すことも、まだ雨を降らせることだって出来る。

現に自分の中の、もう一人の自分は「そうしろッ！」と喚いていた。けれど、彼女は指先を鋭利に変形させ、それを自らの首元に添える。

「どうやら面倒を掛けてしまったみたいだな、紅音。それに、随分と強くなったんだな
〈ケロベロス小隊〉の隊長」

目の前の少女の照準がズレることはない。研磨された「狂犬」の牙は必ず、忌むべき化物の喉元を食い破ってくれるのだろう。

彼女は自らの説いた在り方に全力で従ってくれた。虚勢を張ることもあつただろう。無理をしたのだから一度や二度じゃないはずだ。

それでも天璋院紅音は生きている。

「……ならば自ずと、答えも決まっているな」



間も無く雨は止むことであろう。二人の〈サツマハヤト〉の奮闘と、上級吸血鬼の自害を持って。

29

数多の轟音が〈グラトニー〉に迫った。

照準システムによって、計算された弾道が外れることはない。数発の砲弾は翼から発射されたカルシウム塊のミサイルに撃ち落とされるも、その大半は〈グラトニー〉に着弾した。



『……太郎ッ！ 鋼太郎ッッ！！ しっかりしなさい、島津鋼太郎ッ！！』

中破した〈カンナツキ〉は、〈ミナツキ〉の盾にもたれ掛かっていた。空中から自由落下した鋼太郎を見つけた彼女が、辛うじて受け止めてくれたのだろう。

「その声……小夏センパイ、ですか？」

『馬鹿ッ！ 起きてるんなら、すぐ返事しなさいよ、死んだかと思っただじゃないッ！』

彼女は強がっているが、通信越しに分かるくらいにはべしよべしよに泣いていた。

鼻水を吸る音も、敢えて今は気づかないフリをしておこう。

「ははっ……俺はどれだけ意識を失っていたのでしょうか？」

『……ざっと数分程度よ。〈グラトニー〉に潰されないよう、すぐに木々の影に隠れたんだから』

操縦桿を引くも、レスポンスが悪い。電装系のトラブルか、それとも内部のパーツが歪んでしまったのか。

「機体は……まだ動くな」

『何が、「まだ動くな」よ。素人目に見ても、壊れる寸前じゃない。……それに、もうアントアが無理する必要はないのよ』

そこで鋼太郎も、雨が止んでいることに気付いた。防壁に設置された砲台は、空を裂いて。〈グラトニー〉の外殻を吹き飛ばす。

「これって、」

『アントアがグースカ寝てる間に、紅音隊長が^{あかね}大久保^{おおくぼりえ}利恵に勝ったのよ。なんか通信は繋がらないけど、きつと、そうに決まってるわ！』

小夏の声は興奮気味だ。彼女の中の「紅音神話」がまた一つ更新されたのだろう。

いまだ紅音と通信が繋がらないことは気掛かりだが、鋼太郎の気も緩んだ。

シートにもたれ掛かれば、全身を途方もない疲労感が、しかし心地の良い疲れが自分を襲う。

「勝ったのか、俺たち……」

今度は〈グラトニー〉が砲弾の雨に晒される番だ。誰もが鋼太郎のように安堵したことであろう——その安堵が次の瞬間に塗り替えられるとも知らずに。



砲火の間際。次弾を装填するまでの本の数十秒の間だけ、辺りは静寂に包まれる。

その間に、残る全ての〈FG〉が異様な熱量の膨張を感知した。センサー類の故障や、誤作動ではない。

感知された熱は〈グラトニー〉の腹部から徐々に喉元へと競り上がり、一本の熱線として放出された。

緋色の閃光が視界を塗りつぶされ。防壁は融解し、砲台は容易く薙ぎ払われていく。

大きく口を開いた〈グラトニー〉はそのまま沈黙し、傷の再生を始めた。ぐちゃぐちゃになった筋繊維の一本、一本が結び付き、表面が補修されていく。

『……………嘘……………冗談よね』

「なんだよ、今の」

轟々と燃え上がった緋色の炎は、背後から〈カンナツキ〉たちを照らした。

その一閃は利恵の放ったそれとはまるで違う。熱操作の応用で精密なレーザーを撃ち出す彼女に対し、〈グラトニー〉の口から吐き出された破壊の光には、精密さも、緻密さも無い。それ故に、純粹な破壊を可能としたのだ。

二人はすぐに〈グラトニー〉に目を遣った。二射目が来ると。

しかし、眼前の巨獣は動かない。何十発もの〈聖塵〉による砲弾を受けたが故に、再生能力が弱まっているのだろう。

引き剥がされ筋繊維の隙間からは砕けた頭蓋骨が見えた。さらにその奥には肉肉しい血色に染まった脳髓が覗く。あれに刃を突き立てることができれば、一撃で絶命に至らしめることができるはず。

「……………俺が野郎を殺らなくちゃ」

〈カンナツキ〉がその身体を引き摺るように動き出す。

『ちょっと、待ちなさい！ やるって何？ あんた一人でどうするつもりよ！』

今の〈カンナツキ〉には〈グラトニー〉の身体を攀じ登る登攀能力も、パイロットである鋼太郎にそれだけの余力も残されていない。

高めたオーバースペックの代償は〈刃血〉だ。ただでさえ血の濃度が薄い鋼太郎に、これ以上支払える代価はない。六機あったドローンビットも全てが失われた今、さっきやったように無理やり足場を作り出すことも出来ない。

万事急須。

絶体絶命。

そんな言葉たちが鋼太郎の頭の片隅をよぎっていった。

「クッソ！ じゃあ、どうするって言うんだよッ！ あの野郎がもう一度動き出したならッ！！」

次に〈グラトニー〉からあのレーザーが放たれたなら、今度は確実に都市部にも被害が及ぶ。そうなれば、鹿児島も、〈サツマハヤト〉も〈ケロベロス小隊〉も全てが終わってしまう。

誰かの居場所がまた、壊されてしまうのだ。

———なら、ひとまずはさ〈ケロベロス小隊〉が君の居場所ってことでどうかな？

思い出されたのは、紅音の言葉だ。

「……」

果たして〈ケロベロス小隊〉は自分の居場所になれただろうか？ 答えは正直、微妙なところだ。紅音たちはこんな自分を受け入れてくれた。それでも彼女たちの隣に並び立つのに、今の自分は弱すぎる。

「……結局、俺の居場所はまだ見つからねえみたいだな」

徐々に思考の熱が冷めて行く。自らを突き動かす使命感と強迫観念から解かれ、鋼太郎は静かに冷静さを取り戻した。

自分の全てを戦うために費やす“狂犬”の在り方は簡単に真似のできるようなものではない。何より鋼太郎はセンスに欠けるのだ。

だが、それでも。

「小夏先輩。〈ミナツキ〉の損傷率ほどの程度ですか？」

「見かけほど酷くはないわよ。ざっと三割ってところ。けど、そんなこと聞いてどうするつもり……」

鋼太郎は、勝つためのプロセスを頭の中で一つずつ積み上げていく。現状を脳内で整理し、何が現状における最適解を思案した。

「……なら、次はエノン先生だ。彼女を経由すればきつと」

居場所のない自分には、それを守るための“狂犬”になれない。人付き合いも苦手な自分には、誰かの“忠犬”になることもできない。

けれど、誰かの大切な居場所を守るような“番犬”になら——そう在りたいと思う鋼太郎の決意は、刃のように研ぎ澄まされた。

『ねえ、……さつきから、何を言ってるのよ？』

「考えたんだよ。俺たちで、あの化物をぶっ殺す方法をな」

30

『こうやって話すのは、キミに〈ケロベロス小隊〉への配属を言い渡したとき依頼だね。』

しまづこうたろう
島津鋼太郎・二等陸士

その異様なまでに落ち着いた声は、この状況にそぐわなかった。

虎視眈々と機を伺っているであろう、あの迫力が通信越しにでも伝わってくる。

「そうですね、さいごうたかつき西郷隆月陸将補殿」

所詮、鋼太郎は一人の隊員に過ぎない。こんな土壇場で上層部と交渉するには、どうしても誰かに取り継いでもらう必要がある。

〈FG〉開発の権威とも言えるエノンなら、どうにか彼に繋げるだろうかと想定したが、なんとか必要な人物の一人を引き摺り出すことはできた。

これで第一の関門は突破した。

『要があるなら簡潔に頼む。こちらも切羽が詰まり切っていてね』

西郷が在中してあるであろう司令室も、防壁を崩されたことによって困惑しているのだろう。時折、通信には切迫した声が混ざり込んだ。

西郷自身も鋼太郎の声はサブモニターで聞いている程度だ。その証拠に、彼は防壁の復旧や航空戦力の配備に纏わる指示を出し続けている。

けれど、それではダメなのだ。既存戦闘機のスペックでは、この周辺を跋扈する下級吸血鬼に強襲され、墮とされてしまう。

「俺なら〈グラトニー〉を殺せます。ですが、その為には陸将補殿に人を集めてもらう必要があります」

鋼太郎は簡易的に、かつ重要な点に注意を払いながら、自分の考えを説明した。

『……………なるほど』

しばし、返事はない。

だが、代わりに通信に割り込んできたのは、他の上層部の声だった。

『ふざけるなッ！ そんな作戦は馬鹿げてる！』

『そうだ、成功するわけがないッ！』

彼らも西郷に説明する傍で話を聞いていたのだろう。

鋼太郎自身にも無茶を言っている自覚があった。成功率やリスクに関してもご察しである。

「まあ……………そうなるよな」

どうやったなら交渉できるのか。そもそも、今の自分にはそれだけの信用が備わっていないかった。

紅音あかねや、それこそ大久保利恵おおくぼりえならどうだったろうか？

結果を出し続けた彼女たちならば、或いは――

『皆、少し待たたまえ。鋼太郎二等陸士、君の発案した作戦だが、正直、上手くいく確率は何割程度だと思っ？』

周囲を諫めようとする、落ち着いた声だ。しかし、そこには言いしれぬ圧があった。

西郷もまた紅音や利恵と同じ、結果を出し続けた人間であることを忘れてはならない。

「……………五割。……………いや、三割もないでしょう」

『そうかい、なら簡単だね。君の能力で、その足りてない七割を補うんだ。これで成功率は十割だ』

彼は「全責任はボクが持つ」「それから並行して、航空戦力の配備も進める」と付け加え、周囲を黙らせた。

『——それじゃあ、総員に命令を下そうか。現在戦闘中の全〈サツマハヤト〉隊員に注ぐ。〈ケロベロス小隊〉の元へ集結せよ、と』

31

〈カンナツキ〉の双眸は、〈グラトニー〉を睨んだ。

チャンスは一度きり。失敗は許されない。

『あー、もしもし？ 鋼太郎こうたろうくん。私の声は聞こえているかな？』

「その声はエノン先生だな。さつきは、陸将補殿に取り継いでくれてありがとう。アンタがいなきゃ、その時点で詰んでたからな」

『なんだろう……君が素直にお礼を言ってくると、なんだか気持ち悪いな』

エノンの声は本当に引いているようだった。

しかし、おふぎけをするのはほんの一瞬だ。彼女はすぐに本題を切り出した。

『私はこれでも、自分の手で弄った機体にはかなりの自信を持っているんだ。君の〈カンナツキ〉に関しても。小夏ちゃんの〈ミナツキ〉に関しても。けど、君の考えた作戦は正直、無茶だと思うよ』

「無茶だとしても、やるしかねえだろ」

『本当に君ってやつは……なら、今から送るデータを確認してみたまえ』

コックピットのモニター画面に現れたのは、彼女から転送したであろうデータファイルだ。その中には〈カンナツキ〉の細かな設定に関する記述がある。

『君の考えた作戦を元に、〈刃血〉の流れや、推進器ブースターの噴射角、関節の反応度なんかの適した数値を計算してみた。その数字通りにやれば、君の無茶苦茶な作戦の成功率も少しマシになるはずだ』

「エノン先生。……やっぱりアンタは天才だよ」

『今更かい？ けど、お褒めに預かり光栄ってやつだね』

不要な装甲はパージ。〈刃血〉の流れを両脚部に集約。ブースターの角度は下方に向け

て、マイナス二〇。

そのまま鋼太郎は、眼前で待機する〈ミナツキ〉に目を遣った。

『こっちはいつでもオツケーよ、鋼太郎』

彼女の機体からは無数のチューブが伸びていた。そして、その先端はこの場に集められた〈サツマハヤト〉の機体たちに繋がれている。

フレーム内部に埋め込まれた〈刃血〉の循環パイプ同士を、無理やり接合したのだ。

「というか、突貫工事だからコッチがいつ壊れてもおかしくないの！ やるならやるで、さっさとしなさいッ！」

〈ミナツキ〉はその大 ライオットシールド 楯を構えながらに、タイミングを押し測る。

「ああ、行くぞッ！」

おおくほりえ 大久保理恵との接戦で見せた「盾ジャンプ」をもう一度やろうというのだ。今度はその軌道を真上に向けて、且つありったけの血を注ぎ込んで――

こなつ 小夏の元にはおよそ、五〇機分の〈刃血〉じんけつが集約された状態にあった。それを純粋な力に変換できるのは、馬力と剛性に特化した〈ミナツキ〉にしか出来ないことだ。

スタートを切った〈カンナツキ〉の両脚が彼女の盾を捉えた。掠れあつた金属同士は火花を散らし。鋼太郎もまた踏 キックペダル 板を踏んだ両脚に力を込めた。

『ぐっ……派手に打上げてやるからッッ!!』

数機の〈フミツキ〉たちが小夏の支えに入る。彼女はそのまま、ありったけの力で操縦桿を押し込んだ。

膨大な量の〈刃血〉が秘めたエネルギーが、ただ盾を上空へと跳ね上げるための動力と化する。

その勢いで〈カンナツキ〉は再び、空高く飛翔した。



風圧を受けて、剥き出しになったフレームが軋む。

機体にも無理を重ねさせた結果であろう。既に破損した各部からは〈刃血〉が漏れ出していた。

「……出力低下か……クソッ！ あともう少し、持ってくれ!!」

鋼太郎の身体も、度重なる連戦に限界が近づいていた。今は歯を食いしばり、辛うじて

意識を繋いでいるような状態だ。

飛翔した〈カンナツキ〉がブレードを引き抜く。

今度こそ、その刃で〈グラトニー〉を討つために。『番犬』として誰かの居場所を護るために。スラストの最大加速で標的を捉えた。

「——オラアアア!!!」

着地の衝撃を押し殺すよりも、ありったけの力でブレードを振り上げることが優先する。崩れかけた体制をベクトル移動で修正。そのまま白刃を振り下ろした。

駆動音と金属音。

爆ぜ散る火花と舞う血しぶき。

「っっ……」

その果てに壊れたのは〈カンナツキ〉の方だった。肩から先の接合部が砕け、そこから熱を帯びた〈刃血〉が吹き出す。

鋼太郎の腕に肉を断つ際の柔らかな感触はない。代わりにあるのは、岩盤を殴りつけたような感触だ。

「……………ちくしょう」

ほんの一瞬だけ、〈グラトニー〉の再生が早かったのだ。

鋼太郎がブレードを振り下ろすよりも早く頭蓋の一点だけに再生を集中させさせ、斬撃を弾いたのであろう。

自らの唇を、血が滲むほどに強く噛み締める。

「畜生ツツ!! 畜生ツツツツ!!」

そんな鋼太郎を嘲るかのように〈グラトニー〉の再生は進んでゆく。ブレードの一撃が最後に与えた亀裂さえ、その末端から少しずつ塞がれてゆく。

「……………なんで、……………なんで届かねえんだよッ!!」

あと一歩だったはずなのに。それなのに機械の身体は動こうとしなかった。

内側を満たしていた〈刃血〉も底を尽き、負荷に耐えきれなくなった〈カンナツキ〉が遂に膝から崩れ落ちた。

「『またも『番犬』の牙は届かなかったのだ。』」

「——いいや。それは違うんじゃないかな」

視界の端で鋼太郎は、その姿を捉える。

遅れて現れたのは赤と黒の攪拌する満身創痍でボロボロな機体だ。

「まさか……………けど、どうしてッ!?!」

装甲が剥ぎ取られたコックピットの向こうで彼女がほくそ笑んで見せる。

「紅音隊長！」

「細かいことは後にしよつか。それよりもコレ借りるよ」

彼女は〈グラトニー〉の頭頂部に着地するなり、鋼太郎の取りこぼしたブレードを拾いあげた。

それを壊れる寸前の〈ハツキ〉に構えさせ、鋼太郎の入れた亀裂へと振り込んだ。

例え「番犬」の牙が届かずとも。

「狂犬」や「忠犬」の奮闘が無意味なものに変わってしまったも。——三ツ首の獣なら必ず、目の前の獲物を喉元を食い破るのだろう。

「これが、〈ケロボロス小隊〉の完璧な勝利ってやつだね」

32

鋼太郎が目覚めたのは、またも病院のベットの上であった。

「……………」

貧血に加え、過剰な身体の酷使による疲労から、一週間は寝たきりになっていたらしい。ただ、以前に病院で目覚めたときのような焦燥感はない。寧ろ、達成感から来る心地よい疲労感に身を委ねられたくらいだ。

「俺は……俺たちはやれたんだよな。〈グラトニー〉から、皆の居場所を護れたんだよな」
鋼太郎の中で「やり遂げた」という実感は薄い。

最後の引き金を引いたのが自分ではないのも要因の一つだが、いまいち現実感というものが無いのだ。

病室の窓から下を覗けば、心地よい晴れ日和の下に、平穏な街並みが広がっていた。

それこそ、〈グラトニー〉が攻めてきて、鹿兒島が壊滅の寸前に陥ったということ自体が、夕チの悪い冗談だったようにも思える。

「……………」

今回の一件で甚大な被害を被った防壁も、修復が進んでいるらしい。資材や人員の不足から工事はやや遅れ気味だが、それでも鹿兒島は少しずつ被った傷から立ち直ろうとしていた。

「俺も早く傷を治さねえといけないみたいだな」

全身は擦り傷と打撲の跡だらけ。狭いコックピットで無茶な操縦をしたせいで、全身を打ち付けてしまったのだ。身体中に巻かれた包帯は少し過剰すぎるような気もするが、骨

が折れていないだけマシだと思うことにした。

「確かに、その心意気自体は悪くないけど、今はゆっくり身体を休めるべき時じゃないかな。鋼太郎くん」

論すような口調の方に目を遣れば、ドアが開いて、ちょうど紅音あかねが入ってきた。

「そんなミイラ男みたいなナリで無理をしたって、いい結果は出せないよ」

そうは言うが、彼女の格好だって似たようなものである。額には包帯。左腕の骨にもヒビが入っていたので今はギプスによって固定されている。

どうみても鋼太郎より重傷を負ったように見える彼女だが、先に退院許可が降りたのも彼女の方だ。

人には「休め」と言っておきながら、自分は病院側に無理を言って、早々と〈サツマハヤト〉に復帰したのであろう。

「……少なくとも今のアンタには言われたくねえよ。……つか、アンタこそちゃんと休んだらどうだ」

「はは。これでも私は〈ケロベロス小隊〉の隊長だし、スーパー最年少エリートだからね。今回の一件の報告やら、今後の方針についての話し合いやら。顔を出さなきゃいけない席は案外多いんだよ。それにね、」

紅音は少し瞳を伏せながら、その一言を付け加えた。

「私なりのケジメを付けるためにも、どうしても行きたい場所があったから」

彼女の服装は黒い喪服姿であった。ほんの微かにだが、線香の匂いが染み付いているようにも思える。

元〈ケロベロス小隊〉の隊長、大久保利江おおくぼりえ。彼女はそんな恩師とも言える人物の成れの

果てに引導を渡したのだ。その内心は、しばらく陰鬱なものであろう。

そんな本心を悟られまいと、彼女は次の話題を持ち出す。

「それよりも。君は本当に無茶をしたらしいね。まさか、〈グラトニー〉を相手に単機で時間を稼ごうとしたり。小夏こなつちゃんと合流したかと思えば、彼女の盾をジャンプ台代わりに強引に高く飛んでみせたり。とにかく無茶苦茶やつたらしいじゃん」

「それは……俺なりに、あの場で出来ることを考えた結果だ」

「けど、足りない〈刃血〉じんけつを集めるために西郷さいこうさんまで利用しようとするなんて、全く末恐ろしいもんだよ」

「無茶だって言うんなら、アンタの方もだろ。俺が小夏センパイの盾をジャンプ台代わり

にした直後に、割り込んで来て、飛んだらしいじゃねえか。しかも、あんな壊れかけの機体で」

あのととき唐突にも紅音の〈ハツキ〉が現れたのは、鋼太郎の〈カンナツキ〉が跳んだ直後。物陰から飛び出した彼女は、まだ盾を空中に向けて掲げられた大^{ライオットシールド}楯を足場代わりに、同じ容量で跳躍したのだ。

紅音の〈刃血〉は極めて濃い。加えて〈ハツキ〉は軽量かつ、高出力の機体だ。タイミングさえ完璧に合わせれば、〈カンナツキ〉以上に高く飛び上がるのも難しくはない。

それに〈ハツキ〉のパイロットは他の誰でも「狂犬」なのだから、そのくらいの無茶を難なく成功させるであろう、と言う妙な説得力まである。

「私も一回は君と小夏ちゃんの連携を見せてもらったからね。壊れかけの通信機からノイズ混じりの声が届いて、残った隊員は二人の元に集結しろって言われた時にピンと来たんだ。それに無茶苦茶であろうと、何であろうと、これで良かったんだよ」

彼女はその瞳で鋼太郎と、鹿児島^{鹿児島}の街を交互に見つめた。

「だって、私にとって大切な仲間と居場所を守れたんだからさ」



「あっ、そういえば次の〈ケロベロス小隊〉の任務は、本州への遠征に決まったからしぼしの間を置いて、紅音はそんな話題を切り出した。

「は……!?! それって、どういうことだよ!?!」

「言葉の通りの意味としか。まあ、私たちの〈FG〉はどれも派手に壊れちゃったから、しばらく後になると思うけど。それでも私たちは、いつか九州の外に出るの」

本州への遠征。それは予想できた任務でもあった。

〈グラトニー〉の殲滅は、人類にとって初めて最上級吸血鬼に勝利した瞬間でもある。今回の一件で〈サツマハヤト〉が被った損害は決して、少ないものではない。それでも、この手で勝ち取った勝利は部隊の士気を高める充分な要員になり得た。

「西郷さんも頑張ったらしいよ。上だって一枚岩じゃないからね。これまでは一向に成果を出さない〈サツマハヤト〉に予算を費やすことに嫌な顔をする連中や、大規模な遠征に懸念を唱える連中も少なくはなかった」

「けど、今回の勝利を機に、本州遠征の決定を強引に押し通すことができたってわけか」

「そゆこと」

紅音はパチン！ と指を弾いてみせる。

「それに私自身も少し気になることがあるんだ。……〈グラトニー〉はあのシエルターの

中で身動きが取れなくなっていた。けどさ、シェルターに続く通路の広さなんて、たかが知れてるわけじゃん」

彼女の言いたいことを察すると同時に、鋼太郎は少しゾツとした。

あのシェルターの内装は、実際に足を踏み入れた自分自身がよく知っている。せいぜいが〈FG〉一機が通れる程度の狭い通路。それを〈グラトニー〉がどのようにして通ったのか？

「実はどこかに〈グラトニー〉も通れるような、秘密の大きな入り口があったのか。または、第三者が何らかの手段で〈グラトニー〉をあそこに運び込んだのか」

紅音は指を立てながら二つの可能性を示したが、本命は後者であろう。

そして、そんなことが出来る存在も限られている。

「大久保利恵以外の上級吸血鬼が、もう一人いる」

「どんな特異な能力を保有しているかは、まだ分からないけどね。けど、ソイツはまだ県外のどこかで息を潜めている可能性が高いと思うんだ」

仮に、そんなことが出来る上級吸血鬼がいたとして。その個体が〈グラトニー〉端末であつたなら、あの場で本体を助けられないわけがない。

ならば紅音の言うとおり、その個体は他の最上級吸血鬼の端末であつたか。或いは、まだ誰の端末にもなっていないフリーの上級吸血鬼の可能性が高かった。

「まだ可能性の域をでない以上、正式な発表はされれないと思う。だけど、これからの遠征の主な目的はソイツを探すことになるだろうね」

鋼太郎は改めて〈サツマハヤト〉の悲願でもある「吸血鬼の殲滅と生存権の奪還」が途方もないことのように感じた。

「……………」

今回のような無茶が成功し続ける保証なんてどこにもない。

次は自分が化物に成り果てて、彼女らに牙を剥く瞬間が来るのではないだろうか？

それとも化物に成り果てた誰かを、次は自分が斬らなければならないのだろうか？

そんな後ろ向きな考えばかりが頭をよぎっていく。

「ん…………？ どうしたのさ、鋼太郎くん」

紅音はその表情を覗き込む。

「本州遠征ってことはつまり、君がずっと帰りがたつた東京に戻るチャンスでもあるんだよ。ちょっと前の君なら、もっと喜んでたんじゃないかな？」

「勿論、嬉しいさ…………ようやく、俺の居場所に帰れるんだ。ただ少し怖くなったんだよ」
〈グラトニー〉にトドメをさそうとしたあのととき。あの瞬間に紅音が間に合わなければ自

分は確実に死んでいた。中尾山公園の跡地で利恵に殺されかけた時だってそうだ。
なかおやま

そもそも、紅音と出会っていないければ今の自分はここに居ない。
そんな今を失うのが「怖い」と、心の底から思ってしまうのだ。

「なるほど。つまり君はようやく鹿兒島とくとくが大好きになってくれたってわけだ！」

「は……？」

不意に投げかけられた言葉に、鋼太郎は首を傾げる。

「だからさ。君はここが好きになれたからこそ、死が恐ろしくなったんだよ」

紅音の言いたいことは、概ね当たっていた。今の自分にとって、〈ケロベロス小隊〉で過ごした日々は騒々しくも、楽しい物であったから。

ただ、それを簡単に見透かされてしまうのは、少しムカつく。

「別にそんなんじゃない……」

「けど、それで良いんじゃないかな？ 君にもようやく大切なものができたんだから。
〈ケロベロス小隊〉が君の新しい居場所になれたかは分からないけどさ。それでも生きようとする人は、きつと強くなれるから」

その言葉には「狂犬」として在り続けた彼女の確信が込められていた。

「君はきつと私より強くなれる。どこの誰だろうと、君から何も奪えないくらいにね。このスーパー最年少エリートたる、天璋院紅音ちゃんてんしょういんが保証してあげる」

鋼太郎は自分の手を見やった。包帯まみれのまだまだ未熟な手だ。

ただ彼女の保証してくれたように、自分がそれだけ強くなれるのなら。——それは「番犬」で在りたいと鋼太郎にとって、何より心強い物であった。

拳をキツく握りしめ。犬歯を覗かせながら鋼太郎は笑う。

「ありがとう、紅音隊長」

「ふふっ。だけど、まずは傷を治すことに注力するんだよ。果たして貰わなきゃ、いけない約束もあるんだし」

「約束だと？」

全く心あたりのない言葉に鋼太郎はまた首を傾げてしまった。すると、彼女は少しムツとした表情を作った。

「前にデートに出かけた時。『また行こうね』って約束したじゃん！」

そう言われてハツとした。それと同時に鋼太郎は自分の両頬が熱くなっていることに気づくのだろう。